
贖罪にささげる転生者

レティウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

贖罪にささげる転生者

【Nコード】

N8751V

【作者名】

レティウス

【あらすじ】

死んで気がつくところには知らない場所だった。

気配を感じ振り向くとそこには知らない女性？がいてたずねると自分を神様だといった、神様いわく前世の行いの贖罪をするためにアニメやゲームの世界にいつて原作ブレイクしてハッピーエンドを迎えると言われた。

今新たな運命の輪が動きだす

※この話は戦闘シーンよりも会話シーンが中心の話が多いです

プロローグ

気がつくところには知らない場所だった

「知らない天井だ」

別に天井を見てるわけではなかったが一応テンプレどおりのことを言っていた

「あなたに転生のチャンスあげるわ」

振り向くとそこには14〜18位と思われる少女がいた

「転生？ 私には資格がないと思いますが？」

「転生のチャンスは誰にでもあるわよ？ 望むか望まないかでね」

「はあ、私は転生するきないです」

「いいえあなたは転生してもらおうわよ」

「決定事項なら先にいつてください」

「言ったわよね？」

「そうだったか？」

「そうよ！」

「それならいったんだろうな、てか君だれだ？」

「私は神よ」

「うわゝ痛い子だ」

「痛い子言うな！てか、口調が変わってるわよ」

「仕事先で死んだからな、だから口調が仕事口調だった」

「そう・・・まあいいわあなたは絶対転生してもらおう贖罪の意味でね」

「なるほどそう言う訳か、それなら転生してやろう」

「えらそうね・・・まあ、いいわ転生するに当たってあなたにはアニメ・ゲーム・漫画の世界に行って原作ブレイクしてもらおうわ」

「転生先選べんのか、ってかアニメとかの世界か」

「そうよ理由は私が好きだからか」

「（腐女子か）了解っと、最初の世界は？」

「不穏な言葉が聞こえてきた気がするけどまあいいわ、と言うか何で最初なの？」

「だって、アニメ・ゲーム・漫画の世界なんだろう？」

「さすがね、では発表するわよ・・・」

「どうぞ」

「最初は・・・次回で！」

「いきなりメタ発言!？」

プロローグ（後書き）

レティ「orz」

？「おい、作者」

レティ「orz＜なんですか？」

？「何で次回に飛ばした？」

レティ「ごめん、まとめられなかった」

？「文章力ねえな」

レティ「自覚してるから言わないで」

？「で、どうするんだ？」

レティ「次の話でいろいろ決定して、設定書いて突入かな？」

？「何なかしらの原作突入は最低でも4話からか」

レティ「ごめんなさい！」

？「いいからとっとと書け」

レティ「はいiiiiiiii」

プロローグ2 (前書き)

短くしようとしてまた長くなってしまったごめんなさい！

プロローグ2

「で？どこ行くんだ？」

「最初はリリカルなのは世界よ」

「全部か？」

「いいえ、まずは無印だけよ、その後何もなければそのままだけだね」

「分かった」

「で、次に転生前にあなたに能力をあげるんだけど何がいい？一つだけあげれるわ」

「一つだけか？」

「最初はね」

「ん？」

「私たちの世界の場合は一つのことをクリアした暁に新しい能力を1個ずつあげてるのよ」

「なるほどな」

「まあ、最初からチート過ぎる能力は制限かかってまともに使えないわよ」

「はー」

「だって、王の財宝とか^{ゲートオブバビロン}約束された勝利の剣とか^{エクス}いきなり制限なく使えたら後からどんな奴手に入れても最強すぎるでしょうが」

「確かに後でいろいろ貰えるならいきなり最強ってのもつまらないな」

「でしょ？で何がいい？」

そこで俺は考えたある程度制限がなく序盤からチート性能を使えるものを

「なあ、質問なんだけどさ」

「なあに？」

「一応形は決まったんだけど、それが通せるかどうか確認したい」

「それは一体？」

「ん、基本的にデバイスなんよ俺が最初にほしいのは」

「ふむ」

「そのデバイスがいろいろな種類に変われるデバイスってのはあるなんか？」

「というと？」

「俺が欲しいデバイスは名前を含めた意味をこめて7種類に変われるのが欲しいんだ」

「なるほど」

「で、その7種類でたとえば剣の形状を取る時ある程度の応用が利くようにして欲しい」

「？」

「剣といっても刀やショートソード・ロングソード・クレイモアとかあるじゃん？それを剣と言う一まとめにしてほしい」

「考えたわね」

「できるか？」

「・・・いいわその条件のみましょう」

「で、ここからが一番重要なんだが・・・ごによごによ」

俺が一番欲しいものを耳打ちで伝えた

「なっ！？それを隠すために欲しいっていうの！？」

「ああ！まあ、それ以外でもおれ自身は戦い方が多様にできるものが欲しいんだ」

「・・・最初のうちは私の許可が下りないと絶対使えないわよ？」

「かまわんさ、切り札が欲しいだけだからな」

「いいわその条件を飲みましょう」

「サンキュー、でデバイスの人格を取り外せるようにもしてほしいんだ」

「またなんで？」

「簡単に言うとパートナーが欲しいってのとリミッターだね」

「一人はさびしいの？」

「まあね、リミッターに関しては人格が外にいる時は武器補正が2ランクダウンするようにして欲しい」

「分かった後は状態は？」

「ピースで」

「あなたが今つけてるピースを媒介にしているの？」

「ああ頼む」

「そう言って俺はピースを渡した」

「じゃあ、ちょっと待っていてね」

「そう言うと神様は何かを唱えだした、その唱えてる間に「トール」

と言う単語が出てきたんだが戦神かよって笑いそうになったのは内緒だ

「ふう・・・できたわよ」

「サンキュー」

そう言って俺は再びピアスをした

「つとこれでいいのかな？」

「そうね後は名前を決めてあげて」

「名前は決まっている、星の輝きが集まった剣『七星剣・グランシヤリオ』だ」

「いい名前ね」

「だろ？よろしくなグランシヤリオ」

《よろしくお願いしますマイロード》

「んじゃ、早速人格だけ出てきて貰えるか？」

そういうと目の前に光が集まっていき終わるとそこには120cmくらいの幼女がいた

「っておい！何でようじょ!？」

「それはあなたをこれから転生させるのに対して原作と同じくらい

の年齢にするからよ!」

「マジか・・・orz」

「マスター ドン☆マイです!」

俺はいらつときて幼女の頭上にぐりぐりした

「痛い痛い痛い! あ、でもk「言わせるかよ」痛い痛い痛い! ごめんなさ〜い」

「はあ、いいからとつと行けば?」

神様はなんか疲れた顔をしていた、まあ俺も似たようなものだが

「分かったよ、行くぞ七星^{ななせ}」

「ななせ?」

「妹って事にするからな、グランシャリオって名前じゃ変すぎるだろ?」

「なるほどね七星剣から取ったって事ね」

「そーいうこった」

神様と話していると七星は自分の名前を連呼して確認していた

「ありがとうございますマスター」

「ああ、それとマスターとかマイロードってのは元の状態に戻ってるとき意外は言わんでいい名前と呼べ」

「そういえばマスターの名前って聞いてなかったんですが」

「忘れていたな俺の名前は・・・赤羽あかばね 紅那岐くなぎだ！」

「分かりました紅お兄ちゃん」

「こうって・・・まあいいか、んじゃ神様転生よろ」

「はいはい逝ってらっしゃい」

そういうと俺達の足元に穴が開き俺達はそれこそテンプレのごとく落ちていった

side end

神様 side

「それにしても裏をつくのがうまかったわね」

「後は私達の後始末をあの子に押し付けるのは悪かったかしら？まあでも私とはいつでも連絡できるし大丈夫ね」

「それにしても・・・タイプだったから思わず偉そうにしちゃった、嫌われてないかしら？」

神様のどうでもいい独り言は誰にも聞こえませんでしたとさ

プロローグ2（後書き）

レティ「orz」

紅「またか」

七「まただね」

レティ「自分の文章力のなさに泣ける」

紅「やめれば？」

レティ「いやだ！妄想小説終わらせたくない！」

七「はあ・・・それで次は私達の設定だっけ？」

レティ「そだよー、紅や七の性癖から何まで書く予定（どや」

紅「ドヤ顔でいうな！」

七「はあはあお兄ちゃん」

紅「おい作者・・・七星の性格はこれなんか？」

レティ「まあね・・・」

紅「頼むから変えてくれ」

レティ「考えとく」

七「いけないよお兄ちゃん兄弟同士で《自主規制》なんて」

レティ「・・・ごめん直しとくね」

紅「よろしく」

主人公設定　ちよつと修正（前書き）

8／19　紅那岐　宝具説明追加

8／20　紅那岐　性格追加

七星　ステータス若干修正

主人公設定　ちょっと修正

レティ「ここでは紅那岐達について書こうとおもう」

紅「しっかりしろよ？」

七「お兄ちゃん大丈夫だよ！私が憑いてるから」

紅「字が違うよな？」

七「何のこと？」

紅「はあ・・・変わったのかこれ？」

レティ「すげー強い防護機能がついていてほとんど変えられなかった」

紅「おい・・・殺るぞ？」

レティ「まあまあ、一応《自主規制》関係は言わないようになったはずだから」

紅「・・・はあまあいいや紹介よろ」

レティ「承った」

主人公

名前
あかばね

くなぎ
赤羽 紅那岐

年齢

25↓11（原作開始時）

容姿

髪の色は血が固まった時のような赤と黒が混じった色

髪型はスパロボ・ライの髪型

目も右は黒で左が赤のオッドアイ（生前事故で後天的オッドアイ）

ステータス F a t e ・ リリなの

筋力… C ｝

魔力… B ｝ ?

耐久… D

幸運… C

敏捷… A ｝ ?

宝具… ? ?

空戦ランク… A ｝

スキル

魔力変換資質… A

全種（凍結Ⅱ電気＞炎熱＞その他）

魔力具現化… C

変換資質で変換したものを更に形に変えて放てる

例…炎熱にて炎にしたものを更に鳥の形などにして相手にけしかけられる

魔力消費量は2倍になる（変換に使った魔力に2倍かけて変換する）

武術…EX

生前使っていた武術で人間の限界を超えていた

魔力が手に入り現在は不可能がほとんどなくなった

武器・体術・暗器なんでもござれ

ちなみに漫画などで魔法や特殊な力が必要ではないものは基本できる（るる剣などの技は習得済み）

やる気…C

能力が現在の状態で左右する通常時は大して脅威ではないがやる気ある時や感情の起伏により変化する

現在は転生させてもらい昔みたいに気を張ってる必要がないため能力（やる気）が劣化してきた

心眼（真）…A

死線を潜り抜けてきたため相手の行動を読むことすら可能となっている

空間把握能力…B

いわゆるホーク・アイ（鷹の眼）であり前を向いてながら上から見ているような状態で戦えるため不意打ちや1対多の戦闘などでも背中側の敵の行動が分かる

感知…C

目の前の相手の力量が分かる

心眼と空間把握のおかげで手に入れた能力最大範囲は半径5m

宝具

全てを斬る者・穿つ者…EX

神様がこっそり持たせたスキル

概念に近い能力で自身が斬りたいものや打ち貫きたいものを物だろうと概念だろうと関係なくできる

使用にはその物によって左右されるため0秒〜無限と戦闘には不向き（無意識に使ってること多数）

真名開放は存在せず常時発動されている

例…相手の魔法を切る↓10秒〜1分（ランクにより変動）

例…相手の存在を斬る↓現在使用不可

デバイス

七星剣・グランシャリオ…C

7つの形を持つ特殊なデバイス

自己修復機能があり修復力はHP回復（大）

形状

1…剣 刀（モデルはマゴロク・E・ソード）・両手剣（基本

的には大剣モデルは斬艦刀（スレードゲルミル） EXモード

（ハリセンやバットになる ギャグ補正専用）

2…銃 ・hackのハセヲのXthフォームの最初の銃 連射性に優れる射程距離は長くない 刃を長くする時は魔力刃となって伸びる（2丁でカートリッジシステム搭載だが無印のため封印中）

3…創造中

4…ブラスター スパロボのライン・ヴァイスのハウリングランチャーと同等（カートリッジシステム搭載だが無印のため封印中）

5…創造中

6…ビット 通常迎撃モード・リフレクターモード・バリアモード（一瞬防げる程度）

7…??? 封印中 (トールの許可がない限り絶対発動しない
本人も使う気一切なし)

セットアップ

ノーマルフォルム…漆黒のズボンに紅のラインが血管見たく2本通った感じのト上は黒のピチピチシャツに白銀の腕の部分が無い足まですでにジャケット(作者の説明力なし+ファクションセンス0のためこれ以上は説明不可) 防御力は高速移動に対して体に負担が掛からなくなる程度で防御力は皆無

コンボフォーム…これはフォームと言うより単純に修行していた結果1と2や2と6を同時に使えるようになっただけ

??? フォーム…全ての能力を開放し7番をえる状態にしたフォーム 現状使用不可 (封印中)

魔力光…血が固まった色を連想させるような赤黒と白銀 (こっちの方は本人が現在使えるのは知らない)

レティ「能力説明はこんな感じかな?」

紅「武器しかもらってないのにかなりチートだな」

レティ「生前の君の能力がそのまま引き継がれたからね」

紅「生前について書く予定は?」

レティ「書くけどいつかは不明、基本的に私思いつきでしか書かない」

紅「最低だな」

レティ「それが私さ☆」

紅「すげーイラっとした」

レティ「まあまあ、次は趣味と性格」

趣味

家事（一人暮らしだったため自然と身についた料理は高級レストランを開いても客が殺到するレベル）

読書（暇があればいつまでも本を読んでいる）

オタク系（ゲーム・漫画・アニメなど大好き 生前は仕事の関係上友人が持てない＋暇な時間は一人で居たかった為こっちに走ってしまった）

性格

少し乱暴な感じもするが10分も喋れば優しさがにじみ出ていることが分かる

ノリはいいほうで普段の物言いからは想像できない

仕事の関係上ものすごく丁寧に喋れるため初めて喋る人はこっちが素人と思ってしまうくらい猫かぶりが如しわからない

また女の子の機微には敏感でフラグを立てても折れたりもする（自分が気に入った相手は愛する《しかし、自分にきちんと好意を向けてくれる人に対してのみなのでツンデレとかは苦手》）

普段は優しくおちゃらけてるが戦闘のとき完全に相手を倒そうとすると冷酷マシンののごとく冷たくなる

また、努力の人でもある 人が10行うのに対して努力の人が100ならば紅那岐は万をやる

レティ「これで紅那岐については終わりかな？」

紅「新しい主人公だなフラグを分かるとは」

レティ「私自身が女の子沢山出しても使いきれぬ自身ないの」

紅「最低だな」

レティ「言わないで」

七「私は」

レティ「いるの？」

七「教えてよ」

レティ「わーったよ」

名前
あかばね
赤羽
ななせ
七星

年齢

2（原作開始時） 外見年齢は9（なのは達と同じ）

容姿

髪色は緋色

髪型は肩にかかるくらい

目の色は両目ともグレー

ステータス F a t e・リリなの

筋力…D

魔力…A
（

耐久…E（防御魔法使用時はA+）

幸運…B+

敏捷…B+
（

宝具…なし

空戦ランク…AA
（

スキル

物質変換資質…C

主人公と同じように全種使えるが威力は低い

魔力具現化…A

主人公よりも魔力効率が高いため変換するのに魔力を必要としない

武術…D

才能全くなし（運動オンチではなく単純に武術としての才能がない）

ただし、主人公のデバイスなので動きは達人までは行かないが単純な戦いなら大の男を屈服させるのは簡単に可能

魔力運用…A

魔力を効率よく使えるため通常使う魔力の1ランク下の魔力で行使
を行える

ラーニング…B

相手の魔法を見たら大体で使うことができる

武器

紅那岐が使っていない武器を使える

紅那岐は基本1と2を使うため戦術的にはセンターバックのポジションのため4や6を多様

魔力光…赤（赤より淡くした感じ）

性格

マスター（兄）至上主義　マスターの為なら命を捨てるのも簡単
普段は明るく元気な子

マスターを馬鹿にしたときは底冷えするくらい暗く怖い

趣味

妄想　日々兄と一緒にいるためトリップは行わないが70%以上は兄のことを考えてる

家事　意外なほどにできる元ができるため引き継いだようだ
アクセ集め　ピアスのデバイスなので基本キラキラしたものに弱い

レティ「こんな感じかな？」

七「武術の才能ないの・・・orz」

紅「てか、魔力効率おれよりいいのか」

レティ「紅那岐はどちらかと言うと魔法の才能は低いよ」

紅「ないわけじゃないわけだ」

レティ「主人公だから0はどうか？って思っ」

紅「それなら努力して使いやすい奴を極めれば問題ない」

レティ「その意気！で七星は逆に魔法の才能に特化したって感じかな？」

紅「お互いを助け合えるって訳か」

レティ「そそ」

七「お兄ちゃんと助け合い・・・エヘヘ」

紅「なんだろうな普通ならかわいいんだがこのドロドロした感じは？」

レティ「諦めろお前なら襲われる前に撃退できる」

紅「ああ、分かってるがな」

レティ「んじゃ、これにて説明は終わり！」

紅「長ったらしい説明でごめんなさい」

七「これからの私達に期待 キラッ☆」

レティ・紅「「すげーイラっとくる！O☆H A☆N A☆S H I！しようか？」」

七「ごめんなさい」

主人公設定　ちょっと修正（後書き）

次回から話は始まりますこうご期待！

主人公の能力と技紹介

○赤羽 あかばね 紅那岐 くなぎ

○電磁拔刀 レールガン

・桜 さくら 通常の拔刀術、ただし電気の力を使い電磁力を発生させ拔刀速度を上昇させている

・陣 じん 拔刀術を行いながら一回転する範囲技 最大射程 2 m

・飛 あすか 字のごとく斬撃を飛ばす威力自体は魔力消費に変わるが、面より点に強いため砲撃なども切り裂ける 最大射程 5 m

・散 みだれ (本編未登場) 逆手で拔刀を行いその場でランダムに切りまくる、これは防御魔法がどうしようもなく考えた技で、対複数攻撃に対しての迎撃技 対人では役にはたたない

・双 ふたえ (本編未登場) る○剣の双龍閃

・連 れん (本編未登場) メルブラの琥珀さんのように連続拔刀術一撃の威力は低いが一発ごとに相手の体制を崩しながら攻撃するため削りなどに役に立つ

・天 あまつ (本編未登場) 左手で納刀してる刀を掲げ拔刀する技で威力は高いが、技後の隙が大きいため出す時は一撃で決める時意外使わない シグナムが A S' で使っていたのを思いつけば O K

・殲 せん 電磁拔刀の奥義の一つで両腕拔刀するため威力は絶大、また

その時は特殊な方法で肩に鞘を固定し其処から抜刀する

・絶^{ぜつ} 神速の抜刀術である、自身もそのスピードの世界に行くため相手はいつ斬られたかすら認識できない ただし、術後はあまりの衝撃で体にダメージがひどい

・その他あり

○クイックドロウ

・某黒猫漫画のを参考にした技であり通常の「クイックドロウ」で2連続の弾丸を一瞬で出す
ドライ||3 フィーア||4 フუნフ||5 ゼクス||6の攻撃を出す
カートリッジをロードすることに2発ずつ増えていく

○ｼｼョット

・自身の魔力弾の属性を表す言葉である
バースト||爆裂 フリーズ||凍結 シール||封印 ライジング||電撃 e t c .

○ラスト・ワルツ

・自身が打った弾丸をその場にとどめ続け最後に一斉攻撃をかける技落とされた場合は入らないが、収束砲などの収集には干渉して集まらない性質である

○ブラッディ・プラチナム

・ 基本的には^{エクスカリバー}約束された勝利の剣と変わらなく自分の魔力を攻撃力に変換し打ち出した技

○ラグナレクフォーム

・ 最強フォームであり基本的にはノートウングの力を使うために身体能力の強化を念頭に置いたフォームであり防御力は相変わらず無い背中に生えた羽は飛行補助でなく回りに飛んでいる力（魔力・霊力など何でも）を自身の魔力へ変換するためのものである

○ノートウング

・ 話で説明したが全ての時系列・平行世界・次元世界において最上の結果を持つてくるもの、形は自身の好きな形になるため決まった形が存在しない

・ 欠点は、自身をあまりに超える存在に対しては効果を発揮しても意味が無い。負ける結果に対して持つてきても負けてしまうため

・ 維持時間はラグナレクを合わせても3発が限界である

主人公の能力と技紹介（後書き）

レティ「こんなところか？」

紅那岐「アカシックバスターとかはその場のノリで使っただけだしな」

レティ「忘れていたのがあったらごめんなさい」

主人公設定2（前書き）

変わったところ＋すずか紹介

主人公設定2

○赤羽 あかばね 紅那岐 くなぎ

【容姿】

身長…160cm

【基本能力】

筋力…B
魔力…B
耐久…D
幸運…C
敏捷…A+
宝具…??

【スキル】

やる気↓7段リミッター
リミッターを一つ開放することにより一段階ずつ能力が上がっていく（基本的に+がついて行き+2個で上のランク）
防御は7段階目まであげて漸くBになるくらい

【宝具】

全てを斬る者・穿つ者…EXエクゼキューション↓なし
ツールがノートウングの能力開放を行ったため取っ払った

ダ・カーポ
復元する世界↓B

対象を24時間以内の状態に戻すことができる

24時間以内にあった人物を召還することができる

※詳しくはfortissimoを参照

【デバイス】

モード3…棒 長い棒の先に丸い球体がついており其処から刃を出せる

鎌や槍になるため中距離万能型

○月村 すずか

【基本能力】

筋力…C

魔力…C

耐久…B

幸運…B

敏捷…B

空戦ランク…AAA

【スキル】

吸血種…C

血をすわなく生きることができる

血をすうと能力が倍化する、満月の夜なども能力に補正がつく

武術…B

紅那岐が格闘戦を教えたため近距離――（0距離）ではなかなかの性能を持つ

格闘戦以外にも投げ技なども使える

【デバイス】

ルナティック

大きな爪――（EX2で説明済み）である

基本的には近接メインだが、中距離戦闘も得意である

主人公設定2（後書き）

レティ「能力の変動だけ書きました」

紅那岐「七星は？」

レティ「変わってないよ」

七星「うっそ！？私だけ紹介なし！？」

レティ「無い！では次回で！」

Ep 1 (前書き)

まだ原作介入しません

Ep 1

紅那岐 Side

「何で送り出された時ってこうテンプレどおりなんだ？」

「お兄ちゃん考える前に何とかしないとまたあそこに逆戻りだよ？」

テンプレが起こってることに對して七星がツツコンだ

「だよな」

俺に何が起きてるか簡単に言おうと・・・

「落ちるにしても何でこんな高い高度から・・・」

そう、俺は今空中にいるそれも高度1000mはゆうに超えるくらいの高さだ

「考えても始まらんか・・・しゃーない、グランシャリオ セットアップ！」

俺がそう言うのとピアスが淡く輝やきバリアジャケットを纏った（
管制人格の七星は外にいるため反応はしない）

「さて、後は飛ぶだけだな」

そう言って飛ぶイメージをしたら俺は空中に止まった

「ふむ・・・飛ぶことに対してはどうやらうまくいったみたいだ」

「おめでどう、お兄ちゃん！」

隣を見ると七星が赤と白を貴重としたジャケットを着ていた

「お前のほうも問題はないみたいだな」

「当然！もともとがデバイスだよ私は」

そういえばそうだったな、あまりにもアレすぎて忘れていた

「つと、それよりこのまま飛び続けるのはいささかやばいか？」

「どうして？」

「今は昼間だしな、いくらリリなの世界でも人間が飛んでるのは不自然なんだ」

「へ」

俺は何かできないかと考えてやがてひらめく

「そういえば認識阻害の魔法？が有ったはずだがどーやってやるんだ？」

「あ、それなら私ができるよ」

そう言って七星がなんかやっていた

「ん、これならよっぽど近くにいない限りは大丈夫だよ」

「ご苦労、んじゃ行ってみるか」

そう言って俺と七星は降りられるところを探して移動した

「あそこなら大丈夫か」

俺が言ったところは大きな森だった

「お兄ちゃん早く行こう、お腹減った」

七星はなんか勘違いしてるんじゃないだろうか？降りたからと言って別にすぐにご飯食べられるわけではないんだが・・・

「まあいい行くぞ」

そう言って俺達は森に降りた立ったすると・・・

「人が空から降りてきたー！」

横を向くとそこにはリリなの世界の月村すずかがいた

「「あ」」

俺と七星はおそらく間抜けな顔をしてたと思う

紅那岐 Side End

すずか Side

私は今屋敷の猫が森の奥の方へ行ってしまったために追いかけてきたら急に影がさしたのでそちらを見てみたら

白い服と黒いズボンを履いた血を連想させるような男の子と赤と白を基調とした緋色の髪の子が空から降りてきた

私は驚いて思わず叫んでしまった

「人が空から降りてきたー！」

「「あ」」

男の子と女の子はやってしまったと言う顔をしていた

すずか Side End

紅那岐 Side

「え？空から人が？え？ええ？」

すずかは面白いぐらい混乱してくれたので逆にこっちは冷静でいられる

「まあ落ち着いて」

俺はジャケットを解除してすずかに近づく

「え？服が変わった？」

また混乱しだして目が渦巻きのようにぐるぐるしていた

「まあまあ　（ぼん）」

俺は落ち着かせるためにすずかの頭に手を置いてなでながら話す

「いきなりでビックリしただろうけど少し落ち着いて話をしないかい？」

俺は目線を合わせながら優しく微笑む

「あ、はい・・・／／／」

どうやら落ち着かせるには成功したようだ

「お兄ちゃんのロリコン」

七星がなんか言ってるが今は大体同じくらいだからそうでじゃない
だろと思いついて話を続ける

「さて、とりあえず自己紹介が必要かな？俺は赤羽　紅那岐」

「私は七星だよ」

「あ、月村すずかっています」

一通り自己紹介が終わりすずかが家に招待したいと言っていたので
案内に従いついていった

「お兄ちゃん気づいた？」

「ああ」

七星が耳打ちをしてきた

「どうやら俺が介入したこの世界普通のリリなのとは違うようだな」

そう言いながらすすかを見る

「何ですずかに魔力があるんだ？」

俺は疑問を抱きつつすすかに付いていった

Ep 1 (後書き)

レティ「orz」

紅「既に定番とかしたな」

七「だね」

レティ「無駄な部分書いてると長くなりすぎる・・・」

紅「じゃあ削れば？」

レティ「削ってこの状態」

紅「ダメダメだな」

レティ「いやあああああああ」↑走って逃げていく

紅「行っちゃった」

七「だね」

紅「まあいいや次回を」

七「お楽しみに！」

Ep 2 (前書き)

言葉遣いとかは若干スルーしてください

因みに私はリリなのは

すずか＞リイン・初代＞フェイトの順で好きです

Ep 2

紅那岐 Side

俺達は今月村家の一室にて会話している

「はじめまして、すずかの姉の月村忍よ」

そう言って忍さんは話を始めた

「すずか曰く空から降りてきたと言うけど？」

どうやら忍さんは回りくどい言い方をせず直接話を振ってきた

「まあ、その通りですね」

俺は相槌を打ちながらどうするか考えていたら神様から捻話がきた

『もしもし、聞こえるかな？』

『どうしたんだ神様？』

『さっき言うの忘れてたからそのことについて説明をってね』

『はぁ・・・』

神様にこの世界の説明と俺の状態を説明して貰った

曰く

- ・俺の年齢はなのは達より2つ上で現在9歳
- ・戸籍などはないが金銭は俺が生前貯めていたのをカードでおろせるらしい
- ・俺が転生させられた世界は転生者を受け入れるためにオリジナルとは若干異なるらしい
- ・俺達の正体を話すのは自由
- ・神様とはよっぽどがない限り常に会話が可能

との事だ

ふむ、金が有るのは楽だな戸籍がないのが痛い

「で、聞いてるかな？」

忍さんに話しかけられ現実に戻る

「ああ、聞いていますよ。空から降りてきたことですよね？」

「そうよ、普通の人間は空を飛ぶことなんてできないわ」

どうするかな？普通ではないのはあちらも同じだしここは賭けにできるか

「分かりましたお話をします、ただし此方の条件を飲んでいただけなら？」

「条件？」

「ええ、それは話し終えてあなた方が納得したらでかまわないので」

「分かったわ、それで？」

「あわてないでくださいよ『夜の一族』さん」

俺がそう言うのと2人は警戒した否、敵と認識したようだ

「それをどこで知ったのかしら？ 場合によっては」

忍さんは殺気を出しながら俺を睨みつける、すずかを見てみるともの凄い青い顔をしていた

「ふう・・・落ち着いてください、そもそも私と七星も似たり寄ったり存在ですからね」

「「え？」」

2人は分からないと言った顔をしていた、そして俺は自分のことを説明した（転生した存在であり魔法を使えるということ）

「俄かには信じられない話ね」

警戒の色はそのままに一応の理解は示していた

「いや、そもそも夜の一族の存在すら信じづらくないですか？」

「そ、それは・・・」

俺のツツコミにたじろぐ忍さん

「あなたは私達が怖くないの？」

今まで黙っていたすずかが話しかけてきた

「なんで？」

俺はわからず聞き返してしまった

「だって、私達化け物だし・・・」

すずかが自分を軽蔑したように言ったことがものすごく腹が立ってしまい、気づいたらすずかの頬を叩いていた

「え？」

すずかは涙目になりながらこっちを向いていた

俺は自分の持論を言っていた

「話したな俺は転生者だと、転生前に俺はいろいろな人間にあっていた」

「自分は化け物という奴もいたがそいつらほど人間らしいところもなかったぞ」

「分かるか？人間と化け物の定義は考えることをやめてるかそうかじゃないかだ」

「そう受け入れたら化け物になってしまいが、すずかはどうなんだ？人間か化け物か？」

俺がすずかに聞くと

「私は・・・」

まだ迷いがあるようであったので俺は言ってやる

「迷いがあるならそれは人間なんだよ、普通とは違うかもしれないが人間として生きたいと思う限りお前は人間なんだ」

そういうとすずかは泣き出し俺にしがみつく

「うわああああん」

「よしよし」

俺は慰める意味を含めて頭をなでてやる

「さて、話がそれてしまったがどうしますか？」

一部始終を見ていた忍さんに聞く

「すずかのその状態をみて拒否することはできないわね」

「ですね」

俺は苦笑いしながらすずかを見る

「うん・・・」

どうやらなきつかれて眠ってしまったらしい、俺はこのまま話を続けた

「さて、忍さん私達の条件を言ってもいいですか？」

「何かしら？」

忍さんはさっきまで出してた殺気はどこへやら優雅にお茶を飲んでいた

「まあ、簡単なんですが俺達は住むところと戸籍がないので何とかして欲しいんですよ」

「それくらいならいいわ、衣食はここに住めばいいし戸籍に関しては手続きしてあげるわ」

「ありがとうございます」

「気にしないで」

「あ、因みにお金は入れさせてくださいね無駄に持ってるんで使えるだけ使えますので」

「分かったわ。それよりさっきの口調と今の口調どっちが素なのかしら？」

忍さんがツツコミを入れた

「まあ、どちらも素ですが一人称は俺ですね」

「そ、これからあなたは私達の家族になるからできるだけ自然に話してね」

「わかったよ、姉さん」

「よろしい！」

すると今まで黙っていた七星が急に騒ぎ出した

「っていうか、いつまでお兄ちゃんにくっついてるのこの泥棒猫は！」

「ごめんさい・・・／＼／＼」

七星はすずかを起し無理やり引っぺがした

「一つだけいっとくけどお兄ちゃんのていS「ばぁん」いったゝい」

七星が馬鹿なことを言おうとしたのでEXモードのハリセンで制した

「馬鹿な事言ってるんじゃないよ」

「一体どこから」

すずかは目を丸くしていた、デバイスや魔法に関しては後で教えといてやろう

「あ、でもこれはあいj「もう一発いるか？」ごめんさゝい」

七星を制して改めて挨拶する

「ではこれからよろしくお願いします、姉さん・すずか」

「よろしくね☆」

「「よろしく！」」

Ep 2 (後書き)

レティ「さて、これでやっと原作介入にいけるかな？」

紅「は？」

レティ「すまん、説明系の話でもう一話入れるかもしれない」

紅「おいおい・・・」

レティ「反省はしてるが後悔はない！」

紅「斬るぞコノヤロウ」

レティ「落ち着け、とりあえず、次は2年後の話で原作突入間近からになるから」

紅「りょうかい」

レティ「では！」

紅・七「次回をお楽しみに！」

EP 3 (前書き)

今回は説明でおわりそうです

Ep 3

アレからいろいろあったが2年の時が過ぎた

2年の間に自分の能力の確認といろいろなフラグを（恋愛にあらず）立てることはできた

自分の能力に関して言えば

「直射砲と収束砲は使えんな・・・」

「お兄ちゃんの場合威力が高いからいいんじゃない？」

「防御無視とかどれだけ？」

七星とすずかが言うてくるがそうはいつでも

「打つのに最低10秒掛かるとか意味ないだろ、収束砲に関して言えば1分とかアホ過ぎる」

そう、なぜかでかい砲撃は時間がやたら掛かって意味がなかった（カートリッジ使っても無意味とか死んでくれ）

因みに魔法弾は連射が楽で貯めは一切ない、また属性弾として簡単に打ち出せるため凍結と相性がいい

操作弾は使えなかったがな

「まあ、基本は剣と銃しか使わんから問題ないな」

「てか、村正の電磁拔刀レールガン使えるのってかなり鬼畜だよ？」

「まあな、技自体も俺自身用に昇華させたし」

変換資質があつてそれを利用した技を考えたら村正の技を思いついてやってみたらうまく言ったのだ

「まあ、おれ自身生前拔刀術や刀を使う機会多かったから満足はしている」

「紅くんの生前っていったい・・・」

生前については誰にも話してはいない

「一番の問題は防御だな、これは砲撃以上にどうしようもない」

「お兄ちゃんのは防御といえないよね」

「単なる魔法弾でも2〜3発しか耐えられないモンね」

俺の防御魔法はどうしようもなく薄い、そのため直射砲などは回避が基本だ

「俺も基本的には避けるスタイルでいいんだが、バインド食らった後に収束砲食らったらどうしようもないだろ」

「よく言うよ、剣の先に魔力を集中させて拡散させて防げるじゃん」

「それに、回避技術おかしいよね？どこにいるかわからなくなるも

ん」

「生前使ってた歩法術の応用だな、ぶれて動くことによって相手は補足しづらくなる」

「風舞だっけ？」

「そうだ、他に移動だけに特化した雷舞、更にその上の移動と回避を特化させた閃舞、攻撃と移動を同時に行い櫻舞がある」

「それだけあれば十分だよ、ただの風舞にしても捕らえづらいのにその上とか」

「まあ、がんばって気配探って当ててるんだな」

「ぶー」

一通りこの2年の間得た結果を復習していた

「七星は近接ダメダメだが、防御が硬いわ収束砲の貯めはないわってそっちも十分チートすぎるな」

「いえてる」

「ひどいよ2人とも」

七星は俺とは逆に遠距離魔法に特化していたな

「すずかはいいい感じにバランス取れてるから楽だな」

「そう？ 私としては近接もつと練習して紅くんと一緒に前線にいた
いんだけど・・・」

「いや、俺としては今まで1人で戦うことが多かったから中距離戦
闘のほうが助かるよ」

「すずかも魔道師としては十分強い」

え？ デバイス？ トールがくれたんだよね

『何で女に作って上げなきゃいけないのよ！』

って言っていたがなんだかんだで作ってくれたので助かった

名前に関してはあっちがそう呼んでって頼まれたので呼んでいる

フラグに関して言えば未来の魔王っ子とは既に面識がありすずかの
遠い親戚ということになってる

――魔王じゃないの！――

変な電波を受信したが気にはしない

他にもはやてとは既にあっているので問題ない

あった時の後にすずかと七星がものすごくヤキモチを焼いていたがな
後は変わったというなら、すずかはもう夜の一族については吹っ切
れたようだ

俺がフラグを立ててしまったせいかしょっちゅうベッドに潜り込ん
でくるもんだから七星が対抗意識を燃やして同じように潜ってくる
が気にはしていない

そんなことを思っているとすずかに話しかけられた

「で、紅くん確か紅くんが言っていたことがそろそろ起きるんだよ
ね？」

「ああ、そろそろだと思うな。お前は分かっていると思うが当分待
機だからなのはやアリサと一緒に普段どおり行動しといてくれ」

因みに原作介入については俺は未来が見れるということにしている

「で、結局どうするか決めたの？」

原作介入については結構後回しにしといてどうするかは決めていな
かったのだ

「一応は考えはまとまったぞ」

「おしえて」

七星が寄りかかってくる

「ぶー」

すずかがヤキモチを焼き七星みたく反対側から寄りかかってくる

「落ち着け2人とも」

そう言って2人を一旦話す

「「ぶーぶー」」

「ふてくされるな」

かわいいのでいいんだが

「介入に関して言えば悪役を演じようと思う」

「「悪役？」」

「そう、第3勢力ってかんじか？とにかくなのはやフェイトに集めてるジュエルシードは俺がいただこうと思う」

「うわゝ」

「それはちょっと・・・」

2人が引いてるが気にしてはいられない

「まあ、最終的には敵になりすぎず、味方にならないってかんじかな？」

「よくわかんないけど私の出番は？」

「アリサと一緒にいないときなら付いてきてもいいぞ」

「分かった」

「それなら私は常にお兄ちゃんと一緒に入れる分有利!」

七星がいらん事を言って2人は火花を散らす

「2人ともやめい!七星はいらん事いうな、すずかもちゃちな挑発には乗るなっていうところおが」

2人にハリセンをかます

「「った」」

2人は頭を抱える

「おそらく今夜辺りには淫獣が念話を送ってくるからそれまでは待機だな」

「「淫獣?」」

「そこらへんは気にするな言った手前なんとも言えんがそんな言葉は忘れてくれ」

「「はい」」

「んじゃ、今日の訓練はここまでにして帰るか」

そういうと2人は腕にまとわり付いてきた

その夜やはり淫獣からの最初の映像が夢に出てきた

Ep 3 (後書き)

レティ「ようやく原作に入れる」

紅「つつても第3勢力か」

レティ「そ、施設武装組織ソレス「最後まで言うなよ? 違うからな?」えゝ変わらないじゃん」

紅「違うわドアホ」

レティ「ちえゝ」

す「私のデバイスの名前とか出てきてないんだけど?」

レティ「それはその内設定で出す予定だよ」

す「分かったわ」

七「てか、私達の技名って基本パクリなんでしょ?」

レティ「私ネーミングセンス無いからパクリまくりです(ドヤ」

紅「ドヤ顔でいうなや」

レティ「まあまあ、ではどうやって原作ブレイクするかは」

紅「これからの作者の腕次第だな」

す「では、次回も」

七「お楽しみに☆」

Ep 4 (前書き)

ようやくと原作に入れる

Ep 4

今は朝飯を食べている

「ノエルくコーヒー頂戴」

「少々お待ちくださいね」

そう言って食べ終わった後コーヒーをもらおうとノエルに言うはずから念話がきた

『今日変な夢をみたんだけど・・・』

『ああ、それは俺が言っただけが始まったらだ』

『そうなんだ』

七星がパンを頬張りながら念話に参加してきた

『まあ、当分は監視だけだけどな』

『?ジュエルシードっていうのを横取りするんじゃないの?』

『人聞きが悪いな、間違っちゃいないが。まあ、最初のうちは魔法に慣れて貰うために監視だけだな』

『『へ』』

『だから、当分の間好きにしていいいぞ?』

俺がそう言って二人を自由に動かそうとしても

『『一緒にいたい!』』

と言って来るもんだからあまり変わらないな

『かまわんがそろそろ学校だからな急げよ二人とも』

『『はい』』

・
・
・

因みに七星はなのは達と同じクラスだ

そんなこんなで休み時間になった

「将来の夢かゝ、みんなはどうするの？」

未来の魔王っ子が聞いてきた

「魔王じゃないの!」

「なのは!?! 急にどうしたのよ」

「なぜかツツコミをいれなきゃならない気がしたの」

地の分を読むとはやるな

「それでどうなの？」

なのはが聞いてくる

「私は両親の会社を告ぐためにとにかく勉強かな？」

とアリサ・バニングスことバーニングアリサは言った、両親の後を
ついでやるとは偉いな

「ぶっとばすわよ！」

「にゃっ！？アリサちゃんこそどうしたの？」

「なんでもないわ」

ふむ、アリサも地の文を読めるとはやるな

「そ、それですずかちゃん達は？」

なのはが聞いてくる

「私は機械系の専門職かな」

すずかは魔道師になっても機械系は強かった

「私はお兄ちゃんのおY「ゴチン」った」

「アホなこと言ってるな」

「七星はあいかわらずね」

どうやら七星は俺がいなくても大体こんな感じなのか

「で、紅那岐あんたはどうなのよ？」

アリサに聞かれた

「俺は世界を歩き回るかニートかのどっちかな」

「何その究極の2択」

「気にするな」

なんかトール曰くいろいろな世界行くかとどまるかだから予定が立てられん

「なのははどうするんだ？実家継ぐのか？」

「うん・・・」

どうやら決められてないみたいだな（まあ管理局員って選択肢になるが今言っても無意味だしな）

「まあ、あせらんでもいいさ。俺達はまだまだガキだから今から将来のことを考えても意味がない」

「うん、そうだね・・・」

これで少しは納得してくれたみたいだ

〽放課後〽

「じゃあ、俺は家に帰るからお前ら塾がんばれよ」

「ぶーなんでお兄ちゃんは塾行かないの？」

「はっはっはっ、それは俺が頭いいからだ」

「あんたムカつくわね」

「悔しいなら全国1位になってから言うんだな」

因みにここで言う全国1位は大学受験とかで使われる模試での結果だ

おふざけで受けたら満点を取ってしまった

「まあ、がんばれよ」

そう言って俺は4人と別れた

これでなのはユーノと会うイベントに遭遇するはずだ、すずかも七星も俺がいないときは基本的に念話すら使わないように調k・・・ゲフン念を押してあるから下手な行動はとらんだろ

夕飯が終わり家でくつろいでいるとすずかと七星がきた

「今日ねフェレットをみたんだよね」

「かわいかったよ」

「おーやっと獣イベが起きたか」

「知ってるの？」

「言ったら？ 未来が見えると。簡単に言うといいつがなのはに魔法を授けるんだ」

「「へ」」

「さて、夜になればなのはが魔道師として覚醒するから見に行くかな？」

「私もいく」

「なら私も」

「好きにしろ」

そう言って俺は時間まで別途に転がり本を読んでいた

夜の街の上空

「レイジングハート セットアップ！」

《スタンバイレディ セットアップ》

「ちょうどセットアップするところか」

「いいタイミング」

「それにしてもアレ気持ち悪いね」

俺達は上空でなのは達を見ていた

「まあ、雑魚だから初戦闘でも問題無いだろ」

さすがが魔力を持っていたので魔物とかも強力になってるかと思いきや、保険できていたのだが杞憂だったな

「リリカル マジカル ジュエルシードXXXI封印」
《シーリング》

考え事していたら終わったようだ

「さて、ここにいっても意味が無いから帰るぞ」

「はい」

そう言って俺達は家に帰ろうとしていた

帰りの途中結界の基点を感じそこに向かってみた

「何でこんなところに結界があるんだ？」

「それに中の時間がとまってるしこれは？」

「こりゃあ確か・・・なんだっけな？」

俺が答えを言うと思っていた二人は俺の回答にずっとこけた

「紅くん（お兄ちゃん）」

「俺にもわからんことくらいあるわ」

そう言って結界の中心部に急ぐそこには

「お前も転生者か・・・」

見慣れない男が立っていた

Ep 4 (後書き)

レティ「原作突入〜！」

紅「いきなりオリジナルが入るな」

レティ「私の小説のこれからを知るためにはどうしても大切なことだよ☆」

紅「へ〜、因みに「☆」がゲーム力つくからつぶすぞ？」

レティ「ごめんごめん」

紅「てか、一日で4話ってドンだけ暇なんだ？」

レティ「ちょっと他の話も書きたいからブーストかけた」

紅「後でどうなってもしらんからな」

レティ「その時はそのときさ！」

紅「まあいい」

レティ「次回は初の戦闘シーン」

七・すず「次回もお楽しみに！」

EP 5 (前書き)

初戦闘シーン

おかしなところがあったら教えてください！

Ep 5

紅那岐 Side

今俺の前には俺のことを「転生者」と言った奴がいた

「あなたは何で知っているんですか？」

俺は基本初対面の人には丁寧に話す

「俺も転生者だからだ」

俺は目の前の転生者が言った言葉に疑問を感じた

「なぜここに？この世界は私がきてるので他の方は来ないのでは？」

俺が言うのと転生者はおかしそうに笑った

「そうか貴様最近転生したばかりか？だったら教えてやるよ」

そう言って目の前の転生者は言った

「簡単に言えば転生する世界は一人じゃねえ、神が五万といるんだ
だったらかぶるのも当然だよなあ？」

品の笑みを浮かべながらその男は言った

「なるほど」

俺はとりあえず理解を示したので目的を聞こうとしたらトールから
念話があった

『おひさ、元気にしてる?』

『トールか? テンションおかしいなお前』

『気にしないで言った後後悔してるから』

『で、用件は?』

『そうそう、今の状況を教えようと思って』

『何となく理解できたが、とりあえず聞こう』

そしてトールから話を聞いた、曰く

- ・転生者を受け入れる世界のためイレギュラーがつき物
- ・転生者同士は組むも殺しあうのも自由
- ・転生者を殺しても天界?に戻ってペナを受けて新しい世界にいける

との事だ

『まるでゲームだな』

『自覚はしてるわ。でも、それでもやってもらいたいよあなたに
はね』

『かまわんさ、俺がそれを受けた事実は変わらん』

『じゃあ、後はよろしく』

そう言って念話が終了した 因みに掛かった時間は1秒程度らしい

「さて、状況も理解できたことですしどうしますか？組みますか？」

一応聞いておく 因みに俺は組む気は一切ない

「はっ、馬鹿いつてるなてめえ俺はこの世界ではハーレムを作るんだよ、だからてめえは死ね！」

そう言って男は後ろにいる七星とすずかを見た

「何ですずかが魔道師かは分らんがまあいい俺好みにしてやる、その隣の奴もな」

そう言って二人に汚い視線を向ける

と言うかこいつは何を言った？二人を手籠めにする？

「ふざけないで！」

「私はお兄ちゃん以外お断りよ！」

二人は前の転生者否、カスに向かっていこうとしていたしかし・・・

紅那岐 Side End

すずか Side

転生者？が私達をどうかするといっていたから、かつとなって私と七星ちゃんは向かおうとしたけど

「・・・貴様何を言っている？」

ものすごい殺気を感じて動けなくなってしまった

「あ、ああ・・・」

呼吸もままならず殺気の方へと視線を向けようとしたら

「みちゃだめ！」

七星ちゃんが止めた

すずか Side End

七星 Side

お兄ちゃんからものすごい殺気を感じすぐさま嘔吐感がこみ上げてきた

幸い吐くほどではなかったがそれでも異常までの殺気、冷や汗が流れるなんて表現があるがこれはその比ではなかった

場が本当に凍りついた

私は七星ちゃんがお兄ちゃんのほうに向きそうになったのを必死になって止めた

「今はお兄ちゃんを直視しちゃダメ！目線を合わせなくても殺気だけで死んじやうから」

そう言って私も視線を合わせられなくなっていて転生者を見た

転生者も冷や汗を流しているがあせった様子が無かった。

この殺気が分らないのかそれとも相当な実力者なのかどっちにしろお兄ちゃんがこれほど怒っているのは初めてだった

七星 Side End

紅那岐 Side

「・・・貴様が欲望に忠実なのは構わないが、俺の大切な人たちすら奪おうと言うなら・・・殺す！」

怒れば怒るほど冷静になっていくのは昔からだが、転生してもかわらないっぽいな

「ふん、てめえは転生したばかりだからたいした力なんてねえだろうが、調子に乗るな！」

そう言って目の前のカスは突っ込んできた、武器はどうしたお前？

トレースオン
「投影開始」

投影魔術か、手には投影魔術の代名詞干将・莫耶を握っていた

「おらあ！」

無造作に攻撃してくるのを俺は余裕を持って避ける

「・・・遅い」

俺はつぶやく、どうやら相手は今までその能力と相手から感じる無尽蔵の魔力で他者を圧倒してきたのだろうと結論を出した

「ちっ、ならこれだ『我が骨子は捻れ狂う…』」

カラドボルグを放とうとしてるのが見えたので俺は・・・

「遅いと言っている」

「なっ!?!」

一瞬で近づき相手を殴り飛ばした

「くっ・・・」

相手は焦りだしたようだが、たいした事ではない

「弱いな貴様、さぞかし今まで各上との戦いはしてないだろ」

「だからなんだというのだ! この世界来る前に投影魔術のリミッターが解除された俺の勝ちが決まっている」

目の前のカスは面白いことを言う、技術が無いのになぜ「勝てる」?

「分かった、なら格の違いを教えてやるよ」

そう言って俺はグランシャリオの1型・刀を出した

「それがお前の武器てめえかよ宝具でもなんでもなくデバイスじゃねえか」

「貴様を倒すのに特別な力などいらん、わめく前にきたらどうだ？」

「嘗めるなああああああああ」

カスが切れてまっすぐ突っ込んできた、その手にはグラムが握られていた

「・・・ぬるい」

俺は抜刀しグラムを斬り捨てる

「なっ！？グラムが」

男は驚いてるようだが、いくらグラムだろうが所詮は贋作、本物に届かん まあ、本物がどれくらいか知らんがな

「では俺の攻撃を食らって貰おうか・・・燕返し！」

そう言って俺は燕返しを放った

「ぐわっ！？」

カスは俺の放った二連撃ふたれんげきを食らい吹っ飛んだ

「なんだ今のは！？燕返しじゃねえのかよ！」

カスが聞いてきたので俺は教えてやる

「何を勘違いしている？誰がF a t eの燕返しと言った？それは俺が生前使っていた燕返しだ」

「はっ？」

「もともと燕返しの伝記は二連撃。ならばそれを人間でできる範囲でやったまでだ、光速の初撃に神速の連撃それが俺の燕返し・地だちる」
そう言って俺は再び構える

「そしてこれが・・・燕返し・天だあまつ！」

今度は神速の初撃の後に光速の連撃を当てた

「ぐわあ！」

「どうした貴様の實力はその程度か？」

俺は挑発し目の前のカスを挑発しながら納刀する

「ざけんなあ！」

カスは起き上がりその手に約束された勝利の剣エクスカリバーを投影し真名開放をしようとしていたが

「言っているだろう？遅いと」

俺は再び後ろまで一瞬で移動した

「電磁拔刀・桜^{レールガン}」

隙だらけのその後ろから思いっきり電磁拔刀を放った

「くそがあ・・・」

てか、よく防げたな？ 斬り捨てるつもりで放ったんだが

「俺の能力の最後は死徒以上の回復力だ！」

なるほど、だから斬られても回復できたのか、だったら殺すには全てを消すしか方法は無いか？

「分かったか？ お前の勝ち目はねえってことが！」

「何を言ってるだ貴様？ 俺に攻撃が一切当たってないのになぜ「勝てる」と言うんだ？」

俺は心底不思議に思い聞き返してしまった

「ああん？ さっきから剣戟のみしか俺に放ってない貴様に俺を倒す術はねえだろうが！」

「面白い事いうなお前は、確かに俺は剣で戦うのが基本だが、剣で戦うにしてもお前を一瞬で塵にするくらいの技は持ってるぞ？^{エクスカリバー}そもそも約束された勝利の剣などそれにもっともふさわしいだろう？」

「もってねえだろお前は！」

「例え話だ馬鹿か」

俺の挑発にますます乗っかるカス

「嘗めるなあああ！」

カスは再び真名開放をして俺を追撃しようとするが俺はその場になかった

「消えた!?!」

「見せてやるよ貴様を屠る技ってのを・・・コール・フェニックス!」

俺が言うのと俺の目の前に六芒星の魔方陣が現れる

「なんだと!?!」

男は空にいるのが予想外だったらしい、リリなの世界だぞ? 空戦がデフォに決まってるだろうが

「終わりだ・・・アカシックバスター!」

俺は魔方陣に突きの形で突っ込む、魔方陣を抜けると俺の周りには巨大な火の鳥を纏っていた

「終わりだ!」

「くっ! 熾天覆う七つの円環」
ローアイアス

目の前に七枚の花弁を模したたてが現れる、しかし・・・

『パリーイイイイン』

アイアスは簡単に砕けた

「アイアスは投擲武器には強いが近接では役に立たんぞ！」

「くそおおおお！」

その言葉を最後に俺はカスを通り抜けた

その後には塵も残ってなく地面が少しこげた後が残っていただけであった

「ふう・・・」

俺は納刀しリリースした後すずか達の元へ行った

「怖かっただろう？これが俺だ」

俺はすずかに自嘲気味に言った、これで離れていくものだと思ったから

紅那岐 Side End

すずか Side

戦いはあまりにも一方的だった、強いのは知っていたがここまでだったとは思わなかった

そして戦いが終わり紅くんが近づいてきた

「怖かっただろう？これが俺だ」

と言った、確かに怖かったがそれ以上に私は

「怖かったけど、それ以上に嬉しかった。私達のことをこんなに思っていてくれたから」

私はそれ以上に嬉しかったから紅くんと言ったら紅くん驚いた顔をした後優しく微笑んだ

「ありがとう」

そう言って頭をなでてくれた

すずか Side End

紅那岐 Side

てつきり離れるものと思ったがすずかがありがとうと言ってくれて正直泣きそうになった

まさか、感謝されるとは思ってなかったし離れもしないとは、転生前とは大違いだ

嬉しくなりつい頭をなでてしまった

／／／

照れていらっしやる、かわいいな！

「お兄ちゃん私も！」

そう言って七星も近づいてきたの撫でてやった

「はにゃ／＼／＼」

二人ともデレ状態になってしまったが、まあ今は気分がいいので構わない

「さて、夜も遅いそろそろ帰るぞ二人とも」

「「は／＼い」」

そう言って俺達は帰っていった

その夜二人がベッドに潜り込んできたのは言うまでもない

Ep 5 (後書き)

レティ「戦闘シーン難しい!」

紅「がんばって表現するんだな」

七「ていうか、私が戻らなくてもあんな威力出るの?」

レティ「技術と言う点ではいようがいまいが変わんないよ、あくまでデバイスの性能だから」

紅・七「そーなのかー」

レティ「さて、今日は紅那岐の技の説明をしよう」

紅「よろしく」

○燕返し・地 燕返し・天

紅那岐が生前使っていた技、威力はCー
魔力を一切使わない技なので乱発が可能
どこかのゲームが原作だが、あえて言わない

紅「言えよ!」

レティ「だが断る」

○電磁^{レールガン}拔刀・桜

電磁拔刀の一つ

拔刀術そのままなので近距離専用

魔力消費は変換に当てただけなので足して消費しない
威力はB

これの他にもバリエーション多数

レティ「電磁抜刀はこれからも紅那岐の主力技の一つにする予定」

紅「見た目がかっこいいからいいんじゃないか？」

七「でも、納刀する暇有るの？」

レティ「そこは不思議パワーで」

紅「はぁ・・・」

レティ「仕方ないじゃん！それしか書く方法ないよ」

紅「わーった」

○アカシックバスター

スパロボのサイバスターが使っていた技

具現化の力を使ってるので魔力消費は大きい

補足レンジは纏う大きさに変わるので1～50

威力はB+

余談だが「ばすたー」の顔文字？変換にアカシックバスターが存在
する

アカシックバスター、（ー、）ノ（☆）~~~~~Σ◆<<<>><

レティ「こんな感じかな？」

七「私が戻ったら威力2ランクあがるから鬼畜だね」

レティ「燕返し以外はね、アレは身体能力のみで放つから関係ない」

七「そっかー」

レティ「これ以外にも技を出していく予定です」

紅「では、次回も」

七「お楽しみに！」

EP 6 (前書き)

今回は原作にちよつとした介入程度です

最初と最後を見れば後は大体原作どおりのはず？

Ep 6

紅那岐 Side

現状を説明すると現在なのは最初の覚醒と犬退治は終了した

犬退治のときも上空で見張っていたんだが、敵の強さはどうやら変わらなかったようですぐに終わって安心した

昼間だったからどうやってフォローできるか考えていたんだが、いい考えが浮かばず結果がアレで本当に助かった

俺が介入するのはなのはとフェイトがエンカウントする時、つまりは我が家に来たときにしようと思ってるからだ

そんなこんなで、時はたち・・・

俺は今サッカーをしている

『ゴオオオオオル!』

審判の宣言と笛が鳴り響いた

俺は再びボールを掴むとセンターサークルまで持って行き相手を挑発してるんだが一向に動かない

「君もういいだろ？トラウマだよあれは」

そう言って審判が試合を止めた、まだ時間残ってるじゃん？

「いいね、終わりったら終わり！」

そう言って審判が試合終了を告げた

相手チームは全員orz状態だ

「30対0で翠屋チームの勝利！」

まあ、分かっていたただけたかな？審判がとめた理由が

因みに最初は俺は出る予定ではなかったが士郎さんが俺に頼んできた

「チームに欠員でたから入ってくれないかな？」

俺はきちんとしたよ？絶対やりすぎるからってそしたら士郎さんは

「Y A - C C H I - M A - I - N A ☆」

とまぶしい笑顔でサムズアップをしたもんだからやった結果がこれだ

因みに俺はふざける時はとことんだ！

「ふゝ、面白かった」

そう言ってなのは達のほうへ向かいながら言ったら

「あんた手加減って物を知らないの!」

とアリサ嬢が言ってきた

「何を言っている? バーニング。手加減してアレだ!」

胸を張って答えたらアリサ嬢が震えていた

「だああああ! バーニング言うな! 胸張って言ってるんじゃないわよお!」

ナイスツツコミだな

「士郎さん例のものよろしくお願いします」

「用意しとこう」

そして、全員が翠屋にて食事が終わり解散しようとした時ジュエルシードの反応があった

『!?!』

この場にいる俺・七星・すずか・魔王っ子が反応する

「魔王じゃないの!」

「なのは、この前からどうしたのよ!?!」

「なんでもないの」

このくだりはそろそろ封印しとくか

『紅くんいまのって』

『ジュエルシードの感覚だね?』

『そだぞー、まあなのはアクション起きない限り放置で問題ない』

『『はい』』

ふむ、どうやらなのは勘違いと思い放置するようだ

『本当にいいの?』

すずかが聞いてくる

『かまわん、俺達はあるまでイレギュラー。本来なら存在しないからな』

『どういうこと?』

『気にしないでかまわないよ』

『ぶー』

『ふてくされるな、簡単に言うとまだなのは魔法の危険性が分か
つていない、浮かれてる状態だからな』

『そうなんだ』

因みにすずかには教える段階で人を怪我させることも死に至らしめることも徹底的に教えた

まあ、夜の一族だったせいか暗い部分を知っていたためか、覚悟は本物まではいったが

「じゃあ、解散かな」

アリサが言ってきた

「みんなはこの後どうするの？」

「私はおねえちゃんとお出かけ」

「わたしはパパと買い物！」

「俺は少し町をぶらぶらしたら帰る」

「私はお兄ちゃんと一緒」

そう言っただけ俺達は分かれた

そして時間がたつと巨大な魔力が立ち上がった

『紅くん!?!』

『きたか、すずかはそのままでもかまわないから』

『ココはお兄ちゃんと私でなんとかするよ』

『がんばってね』

七星がふざけてないって？　こういうときにふざけたら俺が切れるってのをふざけない用にちよっとしたO☆H A☆N A☆S H I！を二人にした

『『！？』』

おっとO☆H A☆N A☆S H I！で二人が反応したようだ

そして今なのはが遠い距離からジュエルシードを探しているが・・・

「まずいな・・・」

「うん、無理だね・・・」

俺達二人はなのはの更に後方で頭を抱えていたなぜなら

「今のなのはにアレ破れる？」

「無理だと思うよ、ろくに魔法使ったことが無い子があの障壁は」

なぜか巨大なあの木には障壁が張ってあって今のなのはのままじゃ無理だな

「だな、おっし今日は七星に任せたすきにするといい！」

「本当！？やったー！」

そう言って七星は準備をしようとしている、だが正直に言おう

ぶっちゃけ俺やるの無理ゲー！最大射程よくて20mですよ俺

近くに行けば問題ないがそれだと俺の正体わかんなくても確実に他
がいるってのがばれるし

すると七星はどうするのか決めたようだ

「んじゃあ、お兄ちゃんにほめて貰いたから今回はサポートに徹す
るね！」

「と言うと？」

「ブーストかける」

「その手があったな」

七星は遠距離・サポートが万能に使えるからな

「具体的には？」

「魔力量の増加と後は直射砲（封印）使おうとしてるからその威
力向上かな？」

「それだけあれば十分だな」

「でしょ？・・・では行きます！」

そう言って七星はなのはに補助魔法を使い能力を上げた

「行って！リリカル・マジカル・ジュエルシールド NO・X封印！」
『シーリング』

そうやってなのははジュエルシールドを封印した、そしてその顔には後悔の文字がありその後に現場に行った時には何かを決意した顔だった

「終わったか、これで少しは決意ができたみたいだ」

「じゃあ、この後はお兄ちゃんが言っていたアレを？」

「そうだ、介入して未来を変えてやるよ」

「そっか、行こうお兄ちゃん」

「ああ」

そう言って俺達は家に帰る

「どんなに悪役になっても、他の人が幸せになれるなら幾らでも汚れてやるさ」

Ep 6 (後書き)

レティ「しゅうりよ」

紅「おつかれ」

レティ「紅の性格については前にも書いたけど修正少し入れるかも」

紅「と言うと?」

レティ「ぶっきらぼうだけど、ノリがいいみたいな」

紅「俺はどっちなんだ?」

レティ「いやあ、今日の書いてたらそっちの設定も面白いかな?」
「て」

紅「どっちでもいいな」

レティ「まあ、それは私の気分しだいってことで!」

紅「次回も読んでください!」

Ep 7 (前書き)

三人称難しい！

紅那岐の表現を少年と紅那岐のどっちがいいかわからない！

Ep 7

紅那岐 Side

今日はなのは達が遊びに来る、まあ招待したの姉さん事忍さんだ

何でも恭也さんと楽しみたいらしい

まあ、俺の目的もある意味一致しているから今日は部屋で待機だ

俺と一緒にいないのは肩身が狭いわけじゃないぞ？一緒にいるとフレットが逃げた時に俺が抜けるのが難しいからだ。決して肩身が狭いわけじゃない

そんなこんなでなのは達はやってきて姉さんは部屋へ恭也さんとしっぽり

すずか達はテラスで談笑中

「そういえば紅那岐は？」

「紅くんなら何か面白い本を見つけたって言って部屋にこもってるよ」

「お兄ちゃん本読むの好きだからね」

「付き合い悪いわね」

「にやはは・・・」

すずか達は楽しく喋っていたが・・・

そして今ジュエルシードの気配がした

『『『!?!?』』』』

『今のはジュエルシードの反応』

『そうだ、俺はこれから介入に入るがお前らはアリサの相手していろよ?』

『なんで!?!?』

『いやだって、アリサ一人にするのは無理があるだろ?』

『でも・・・』

『心配するなって、てか俺が被弾する姿想像できるか?』

『『できない!?!?』』』

『だろ?』

『『しまった!?!?』』』

『と言うわけだから逝ってくるぜ』

『何か字が・・・』

俺は念話を切り件の場所へ向かう

向かったらちょうど猫が大きくなりなのはとユーノが目点を点にしていた

確かにアレはなる、というかアニメで見る分にはかわいいが実際に見るとかなりシュールだ

そしてなのは以外の魔力反応を感じた

（きたか・・・）

俺は木の上で最初の成り行きを見ていた

フェイトの魔力弾が子猫（？w）の足に当たり倒れた

そしてフェイトとなのはが対面した

（これで最初の流れは作れたな）

そしてフェイトがバルディッシュをサイスフォームに変えなのはに切りかかろうとしていた

（行くか）

俺は木から飛び立ちなのは達のほうへ向かう

「グランシャリオ モード2・銃^{ショット}！」

そう言って俺は双銃を取り出した

紅那岐 Side End

なのは Side

目の前の金髪の子の斧のような杖が鎌に変わり構えたの

「申し訳ないけど頂いていきます・・・」

女の子がこっちに近づいてくる、私はとっさに避けようと杖を構えたらそこに二発の魔力弾が私達の目の前をとおったの

なのは Side End

フェイト Side

私は驚いてしまって目の前の白い子に飛びかろうとしたのに止まってしまうていた

「申し訳ないですが、どちらにも渡すわけにはいきません」

声がしたほうを向くとそこには今までいなかった筈の人がいた

「ジュエルシールドは私が頂かせていただきますよ？お嬢さんがた」

その人物は白銀と黒のバリアジャケット・顔はフェイスガードをつ

けていて分からなかったが、双銃を持っているって事はさっきの魔力弾はこの男の子なのだろう

フェイト Side End

紅那岐 Side

おーおー驚いてるな、まあタイマンと思ってたら謎の乱入者がいれば誰だって驚くか

「さて、返事はいただけますか？」

俺は丁寧に丁寧に言って二人の答えを待つ

「譲れません、私にも目的がありますので」

フェイトが言う

「アレは危険なものなの！何でなの！？」

なのはの回答はやはり期待してなかったが、答えになってなかった

「そうですか、譲ってくれないなら実力行使しか方法はありませんね」

そう言って俺は再び双銃を構えた

「さあ、始めましょうか！」

そう言って俺は引き金を引いた

「「!?!」」

フェイトは回避したのはは防御したようだ

するとフェイトは回避した後、俺との距離を詰める

「おっと」

俺は双銃に生えている刃で防ぐ

「あなたの目的はしりませんが、私にはアレは必要なものです」

「そうですね、私も必要なので集めるのですから、あなたを倒させていただきますよ」

《シューティングモード》

なのはが砲撃の準備をしていた、原作でこんな場面あったかな？

「はっ！」

「くっ!?!」

俺はフェイトを蹴り飛ばし一瞬でなのはの後ろに行く

「え!?!」

なのはは何が起こったか分からず、固まっている俺はなのはも同様に蹴り飛ばした

「きゃっ!？」

なのはをふっとぼし再び話しかけた

「ひどいですね、近接戦闘してる相手をまとめて砲撃ですか」

「ちがうの!そんなつもりは・・・」

「何が違うのですか?あなも・・・だああああああ」

俺がなのはを言葉でいなそうとしていたら急に上から何かのしかかってきた

紅那岐 Side End

三人称 Side

今日の前には想像を絶するシュールな光景が広がっている、それが何かと言うと・・・

「ちょ、やめ・・・やめてください!」

子猫が起き上がり仮面の少年を舐め回しているのである

「・・・」

さすがに2人もこの状況についていけずただ啞然と見ているだけである

「た、たすけ、きゃははははは」

幾ら魔道師だとしてもあれほどの巨大猫に足で押さえられなめまわされていれば流石に動けないだろう

「く、こっのおおおお！」

するとなのは達の目の前で信じられないことが起きた、少年がなんと猫を持ち上げ脱出したのだ

三人称 Side End

紅那岐 Side

はあ・・・はあ・・・はあ、ようやく抜け出せたな

よく見てみればこいつって確か俺に妙になついていた奴じゃないか

「・・・」

ふと、視線を感じてみるとそこには啞然とした表情をした二人がいた

「ゴホン！さて、仕切りなおしと行きましょうか？」

俺はわざと咳をつきなのはとフェイトを見る

フェイトは再び戦う姿勢に入り、なのはは戸惑ってるだけだった

「いきますよ？」

そう言って俺はまずフェイトに一気に近づき双銃の刃で切りかかる

「はっ！」

「うっ・・・」

フェイトは俺の威力が高かったのか吹っ飛ばされ木にぶつかる、なのは今だ戸惑いの中だった

「さて、終わらせていただきます・・・」

そう言って俺は双銃をそれぞれに構える

「クイックドロウ・バースト」

俺の放った弾丸は二人に向かっていき爆発は起きた

なのはは直撃は免れたらしいが爆発をモロに食らったらしく吹っ飛び気絶していた、ユーノはなのはを追っていく

フェイトを見ると防御をしていたが、ダメージが大きかったようだ

「今日は引いた方がいいですよ？今のまま戦っても私には勝てないので」

そう言って俺は猫に近づき凍結弾を放ち猫を丸ごと氷付けにしジュエルシードを回収した

「では、また」

俺はそう言ってその場を離れた

紅那岐 Side End

フェイト Side

私は動けなかった、確かにダメージはあった。だけど動けなかったかと言うとNOだった

あの男の子は私の動きを把握してた、まるで見えているという風にしていたからだ

そして男の子はジュエルシードを回収したらそのまま飛んでいってしまった

私は悔しくもその日は帰って行った

フェイト Side End

なのは Side

私が目を覚ますとそこはベットの上だった

「ビックリしたぞ？読書が終わって森で鍛錬しようとしたらなのはが倒れてるもんだからな」

そう言って最初に声をかけてきたのは紅那岐君だったの

「それでどうしてあんなところにいたんだ？」

「それは・・・」

私はどういっていいかわからず濁しながら答えようとしたら

「そんなことよりお兄ちゃんにおんぶして貰うなんてうらやましすぎ！」

そう言ってきたのは七星ちゃんだ

「私だってまだしてもらってないんだ「ゴツツン」ったあゝ」

七星ちゃんが頭を抑えて涙目になってるの、いい音がしたからアレはいたそうなの

「馬鹿な事言ってるんじゃないねえよ」

「そうよ七星ちゃん！最初にして貰うのはわた「パシン」つつゝ」

今度はすずかちゃんがはたかれていたの、その光景を見て私は思わずわらってしまったの

「ふふ・・・」

「お？笑えたかなら大丈夫だな！」

そう言って紅那岐君は頭を撫でてくれたの

／／／

「「あー！」」

二人が大きな声を上げてすぐに離れてしまった・・・

お父さん以外に撫でられたの久しぶりなの

「紅那岐きさまああああ！」

お兄ちゃんうるさいなの

なのは Side End

紅那岐 Side

なのは達が帰って夜になったが俺は今凄く疲れているなぜなら・・・

「お前らそろそろやめてよくね？流石に一回じゃフラグたたんだろ？」

「「だめ！」」

どうやらなのはを撫でたのが相当気に入らなかったらしくあの後夕食後からずっと撫でているのである

「はぁ、それよりこれの嚴重封印を七星たのむな」

「後でね」

はぁ、夜はまだまだ長そうだ

紅那岐

S
i
d
e

E
n
d

Ep 7 (後書き)

紅「氷付けになった猫ってどうなったんだ？」

レティ「もちろんジュエルシードを取った後紅那岐が壊してるよ」

紅「かけよな」

レティ「いや、どちらかと言うとあの流れ無理じゃね？」

紅「・・・そうか？」

レティ「そうなの！他に聞きたいことある？」

紅「そうそう、フェイスガードって？」

レティ「それは紅那岐の正体をばらさないため、あの仮面には簡単な認識障害魔法が付与されていて特徴的な部分は目を離れると靄が掛かるような仕組み」

紅「便利だな」

レティ「でしょ？紅那岐の仮面はTOAのシンクをモデルにした奴で、七星はラウル・クルーゼ、すずかはベガさんだよ」

「ほーでも、ばれる可能性あるんじゃないか？」

「大丈夫！私自身が気づかせないから」

紅「だめだめだな・・・ところで作者よ俺が最後に言いたいこと分かるよな？」

レティ「やべ」

紅「作者確かなのはにフラグ立てる気なかったよな？」

レティ「書いてたら、こうなった・・・反省してるが後悔してない！」

紅「電磁抜刀・桜！」

レティ「ギャアアアアアアア」

紅「ふう、この後苦勞するのはお前なんだから気をつけろ」

レティ「きを・・・つけ・・・ま・・・す・・・（ガク）」

紅「では、次回をお楽しみに！」

Ep 8 (前書き)

基本的に書いてるときは原作を見ながら書いています

え？ユーノ？空気ですよ基本

Ep 8

三人称 Side

高町家・月村家・アリサ・紅那岐・七星は温泉に来ている

「「はく・・・」」

男三人が爺くさいことを言いながら気分よく温泉に浸かっていた
浸かっていると士郎が紅那岐に声をかけた

「紅那岐君はあの強さはどうやって手に入れたんだい？」

士郎さんの質問に紅那岐はすんなりと答えた

「一番は遺伝ですね、父も母も大概そろって化け物でしたので」

「いや、化け物はないだろ・・・」

恭也がツツコミを入れるが紅那岐は気にすることなく続ける

「まあ、後は出来心付いた時には両親に既に師事受けてたのでこの
年でここまでできるんですけどね」

転生したからとは言えず紅那岐は全てを才能の一言でまとめた

「そうか・・・」

それ以上士郎は追及しなかった。紅那岐は両親と死別してる設定のため

「そういえばお前なのはのこと」「友達ですよ？それ以上もそれ以下も無いです」そうか」

流石シスコンなのはの事に関して釘を打とうとしてきた

「それにしても、君は剣のほかもできるだって？」

「ええ、一通りの戦い方は身に着けましたからね。剣の戦いは父も母もしてなかったからですね」

紅那岐は死別していることを気にしてない装いで答えている

因みに、紅那岐の両親は剣は戦いの一部として使っている

そう言って男三人は風呂から上がっていった

S i d e E n d

紅那岐 S i d e

廊下を歩いていってるとそこには人間型のアルフの姿とにらみ合っているアリサ達がいた

「どした〜お前ら？この素敵お姉さん知り合いか？」

俺はわざとおちゃらけてアリサ達に聞く

「知り合いじゃないわよ！」

アリサが答える

「紅くん？」

「お兄ちゃん？」

目のハイライトが無くなりすずかと七星が詰め寄ろうとしている

「え？ちょっと待て、なぜに？」

俺は冷や汗を書きながら後ずさる

「「ちょっとO☆H A☆N A☆S H I！しょうか」」

「いや待て！ちょ・ぎやあああああ」

俺はO☆H A☆N A☆S H I！を食らっていた

話を聞くとその後アルフはすずかと七星のオーラに当てられ去っていったようだ

そして夜になった

「ほらお兄ちゃん一緒に！」

七星が意味ありげに布団を引いて寝ようとせかしている

「ちょ！？七星なにやってるのよ！／＼／＼」

アリサは意味が分かったのか顔を赤らめている

「フフフ・・・七星ちゃん抜け駆けは許さないよ？」

黒いオーラを纏わせゆらりと七星と対峙する

「「フフフ・・・」」

「「・・・」」ガタガタブルブル

それを見ていたアリサとなのはは二人そろって震えていた

「馬鹿なこといつてるな俺はそっち側の部屋でねるぞ？」

「「ぶーぶー」」

ふてくされてる姿はかわいいものだった

Side End

三人称 Side

そしてみんなが寝静まった後ジュエルシードが覚醒する

なのはは唐突に起き出し部屋を出て行く

その後すずかと七星は起き上がった

『なのはちゃんいったね』

『私達もいこ』

『紅くん（お兄ちゃん）』

『俺は既に覚醒場所にいるぞ、はよ来ないと終わらせるぞ』

『『いつの間に!?!』』

紅那岐はいつの間にか抜け出しており既に先に行っていたようだ

Side End

紅那岐 Side

はるか上空で覚醒した状態を見ていた

「な〜んで気づかんかね?」

フェイト達は目の前のことにいっぱいいっぱいなのか俺が近くにいることに気づいてない

「まあいっか、んじゃグランシャリオ モード2・銃^{ショット}」

俺はそう言って双銃を出した瞬間ジュエルシードに真っ向に向かう、
丁度フェイトが封印しようとしていた

「フリーズショット！シールショット！」

そう言って俺はジュエルシールドが覚醒した池に凍結弾と封印弾を放った

「「!？」」

2人は突然の侵入者にビックリしていた

「回収完了」

そう言って俺はジュエルシールドを回収した

「あ、アンタ何者だい？」

アルフは俺に聞いてきた

「そこにいる子から聞いてませんか？あなた達と同じでジュエルシールドを集めているものですよ」

「アンタがフェイトの言っていた」

とそこに来たのはなのはか

「あ、あなたは!？」

「何でそれを回収してるんですか！それはとても危険なものなんです！」

なのはとユーノが聞いてきた

「その白い子にも言いましたよ、私が欲するから集めてるだけです♪」

いかなな、少し昔に戻りかけてる

「と言うことで私は失礼しますね？」

そう言って俺は飛び立とうとしたらアルフが襲い掛かってくる・・・
いつの間に獣になったんだ？

「ふざけんじゃないよ！そいつを渡しな！」

「ふう・・・」

俺はため息を付きながら攻撃を避けた

「仕方ないですね、また痛い目にあってもらいましょうか？」

俺は今まで出してなかった殺気をだした

「「「「!?」」」」

4人は俺の殺気にビビり動きが止まった

「く、嘗めるじゃないよ！」

アルフが怖気づくことなく飛び掛ってこようとした

S i d e e n d

アルフ Side

目の前の奴は不思議な怖さがあつた、魔道師みたいだが魔力を見てみると明らかにフェイトより少なかった。

けどどあいつが出している殺気は異常だった、あたしは体が震えているのを無理やり抑えて、目の前の奴に思いつきり飛び掛ったらいきなり衝撃がきて吹っ飛ばされた

「うわっ!？」

「あなた達も来たんですか」

男がそう言って視線を追ってみると底には男と同じように仮面をつけた2人がいた

「あなただけ戦わせるわけには行かないでしょ？」

「私は単純にあなたがいるから」

そう言って2人は男の下へ近づいた

「紹介します私の仲間です♪」

男が楽しそうに言った、アタシはここから逃げる方法を考えていた

Side end

紅那岐 Side

『お前達くる必要ホントなくね?』

『たまには活躍させてよ!』

『私まだ活躍すらしてない・・・』

『分かったよ、すずかはアルフ・・・犬ねを頼む、七星はフェレットの方を頼む』

『『はい』』

『ただし攻撃されてからな?流石にこっちからやるのは可哀想過ぎるから』

そう言って俺は再びフェイトとなのはを見る

「さて、どうしますか?戦うか、私達に逃されるか」

そう言って俺は二人を少し挑発する

「私は、あなたを倒します」

フェイトは構える

「私もお話したいの」

なのも構える・・・この時点でののはって戦う気構えできてたっけ?

「いいでしょう・・・きなさい！」

そう言って俺は上空へ駆け上がる

Side end

すずか Side

紅くんが二人を誘導するように上に言った

「さて、私達はどうしよっか？」

私は紅くん見たく殺気のコントロールができないから聞くしかない

「フェイトがやるっていうならアタシだって！」

そう言って目の前の狼さんは戦う姿勢をした

「じゃあ、行きます！」

そう言って私は狼さんと戦うことにした

Side End

七星 Side

「あなたは どうする？」

私は目の前のユーノに問いかける、知ってる分やりにくいから正直引いてくれる方が助かるな

「僕はなのはの援護に行かせてもらおうよ！」

「やらせると思ってるの？」

なかなか面白いこと言うなこの子、流石にジャマするなら排除する
しかないじゃん

「くっ・・・僕は戦わないよ」

ユーノがそう言ったので私は提案する

「じゃ、お兄ちゃんの戦い見ていようよ！」

そう言って私は上空のお兄ちゃんに視線を向けた

S i d e E n d

紅那岐 S i d e

「どうして・・・どうしてなの！」

なのはが問いかける

「それはどちらにですか？」

「どっちもなの」

まあ、どちらも何で集めてるか分からないしな

「私に勝ったら教えてあげますよ♪」

いかなあ、少し楽しくなってきた

「必要ないです、私が勝ってそれを頂きます」

そう言ってフェイトは俺に斬りかかってくる

「フ・・・どちらも遅いですよ」

俺は雷舞を使い二人から遠ざかる

「いつの間に!?!」

「にゃ!?!」

二人は驚いてるようだ

「はぁ・・・終わりにさせて貰いますよ?」

俺はこれ以上はやってられないって思わせるそぶりを見せ二人に双銃を構える

「勝たせてもらいます!」

《サンダースマッシャー》

「うう、お話を聞かせて貰うの!」

《ディバインバスター》

二人はそう言うど砲撃を打ってきた

「クイックドロウ・バーストライ」

俺は爆裂弾をそれぞれの砲撃に向けて3発同時に放った

『ドオオオオン』

二つの砲撃に辺りそれぞれは拮抗していた・・・っておい

「レイジングハートお願い！」

《オーライ》

「バルディッシュ」

《イエッサー》

そういうとなのはの砲撃とフェイトの砲撃は威力をまし俺のバーストを飲み込み俺に迫る

「マジか・・・しゃーない、モード1・刀^{かたな}！電磁^{レールガン}拔刀・陣！」

俺は即座に双銃を刀に変えて抜刀術をしながらその場で一回転した

「「え!?!」」

二人が驚くのも無理は無い、なぜなら2つの砲撃は俺によって斬られたからだ

「危ないですね、でも終わりです」

俺は即座になのはの横に回り蹴りを放つ

《プロテクション》

レイジングハートが即座に障壁を張ったが俺はかまわず蹴り飛ばし
フェイトの方へ飛ばした

「私の勝ちですね」

俺は二人に銃を突きつけた

「・・・」

「・・・」

二人は何も喋らない

「では、私はこれで。ああ、あなたが持っているジュエルシールド
はその内まとめて貰いますのでそれまでなくさないでくださいね？」

そう言って飛び立とうとしたら

「待って、名前を教えて！」

「ああ、そういえば言っ
てなかったですね・・・アイオーン永劫とでも言っ
ておきま
しょうか」

俺は実名を言えるはず無くとつさにそう名乗った

「私は・・・」

「ではまた！」

俺はなのはの名前を聞かずそのままその場を飛び立った

Side end

三人称 Side

今寢室にはなのは・すずか・アリサ・すずかが寝ている

紅那岐達はなのはが帰ってくる少し前に帰ってきていた

『そういえばアルフはどうしたんだ？戦ってたろ？』

『アルフさんなら額にパンチ一発打ったら気絶しちゃった・・・てへ♪』

『ないわー、それはないわー』

『ひどいよ七星ちゃん！』

『・・・まあいい、俺はこれから永劫と名乗るから仮面つけてるときはそっちで呼んでくれ』

『『はい』』

『んじゃ、寝るぞ』

『『おやすみ』』

そう言って紅那岐達も眠りに付いた

Ep 8 (後書き)

レティ「今回は少しはしりながら書くかも？」

紅「どっちでもいいが技の紹介なくていいのか？」

レティ「後書きが長くなるから無印終わったらついでに書こうと思ってる」

紅「分かった、まあそんなに出るか分からんがな」

レティ「では！次回もよろしく！」

Ep 9 (前書き)

戦闘シーンありません！

もしこの流れが他にあつたら教えてください

Ep 9

紅那岐 Side

どうやらなのはとアリサが喧嘩をしているらしい、原因は言わずもがな俺やフェイトの魔法関係だろう

「ちょっと紅那岐聞ってるの」

「聞いてない！」

「胸張って言うんじゃないわよ！」

こうしてアリサが俺にまで聞きに来てるんだから相当なのだろう

「冗談だ、なのはの様子がおかしくて問い詰めてもなんも教えてくれないのが不満なんだろう？」

俺はアリサの言いたいことを簡潔にまとめて聞いた

「不満ってわけじゃないけど・・・友達でしょ私達。なのに何も相談しないって」

アリサが暗い顔をしている

「ふむ、確かに。しかし俺の意見としてはほっとけの一択だ」

「なっ！？アンタそれでも友達？」

アリサが詰め寄ってくる

「言わないならほっときゃいい。なぜならそれはそいつ自身の問題だ」

俺は一旦言葉を区切り続きを言った

「言ってくれるのを待ってやるってのも友達だと俺は思う」

そう言って俺はアリサと別れ教室に戻っていった

Side End

三人称 Side

「なんなのよあいつは！」

「まあまあ、アリサちゃん落ちついて」

「お兄ちゃんの言ってることも分かるんでしょ？」

「だから余計腹立つのよ！」

今はなのはを抜いた3人で喋っていた

「まったく、何であいつはああも冷静にいられるのよ」

「簡単だよアリサちゃん、お兄ちゃんこっち来るまで友達いなかったし」

「……」

七星のぶっちゃけ話に思わず声が出なくなる2人

「……それは置いといてどうしてなのはってああなのかしら」

毒気が抜かれたのかアリスの興奮も収まったようだ

「まあ、ココは紅君じゃないけど待ってみようよ、ね？」

「分かったわよ」

「それじゃ帰ろうっか」

そう言って3人は帰って行った

Side End

七星 Side

「またね」

私はすずかとアリスと分かれてそのまま家に帰る

二人はお稽古だってすごいね

「ただいま」

「お帰りなさい七星さん」

メイドのノエルさんが迎えてくれた

「お兄ちゃんは？」

「お部屋でございます」

「ありがとうございます」

そう言って私はお兄ちゃんの部屋に行った

「おっにいちゃ〜ん」

私が部屋に入るとお兄ちゃんの足元には魔法陣が有った。アレって転送魔法だったはず

「お！お帰り〜」

お兄ちゃんは普通に挨拶してくれた

「お兄ちゃん今のは」

「ああ、今夜ちょっち用事ができたから行ってくるからお前にジュエルシードは任せた」

そう言ってお兄ちゃんは用事を教えてくれなくてそのまま外まで行ってしまった

でもお兄ちゃんが期待してくれたんだ！頑張るぞ！

Side End

紅那岐 Side

「ふう、何とか転送はうまくいきそうだな」

さっきまで練習していた転送魔法はおれ自身あまりうまくできなくてずっと練習していた

「さて、今夜やっとプレシアとご対面かフェイトが来る前に話し終わらせないと」

俺が計画を練った後ツールに連絡を入れた

『ツール聞こえるか？』

『聞こえてるわよ』

『だったら話が早い、今夜俺をプレシアがいるところまで送ってくれないか？』

『私の力あてにしすぎ』

『いや、原作ブレイクするなら最低でもここでの会話とアリシアを生き返るためはお前の力必要だし』

『そういやそうね』

『だろ？だからよろしく』

『分かったわ』

『で、アリシアを生き返させる方法ってどんな方法がいいんだ？』

『一番簡単なのは私の力そのまま使うといいんだけど、それじゃ世界の影響でかいから今あなた達が集めているジュエルシードを使った方法ね』

『は？』

『ジュエルシードは願いを叶える輝石、それを全部使い生き返させる方法が一番不自然ではないわ』

『いやでも、暴走しないか？』

『それなら大丈夫その時になったらあなたが《その時まで秘密だよ》って方法を取ればいいのよ』

『なるほどな、それなら影響は少なくなるのか』

『そういうこと、場合によっては余るかもだけどそのときは好きにしているわ』

『分かった。じゃあ、今夜よろしく』

『はいはい』

そうやって俺はツールとの念話を切った、その時までは鍛錬でもしてるか

そうこうしている内に夜になった

『ツールよろしく』

『了解よ』

そうやって俺はプレシアのいるところまで跳んだ

く時の庭園く

「こんばんはプレシア・テストロッサ」

「だれ!？」

S i d e E n d

プレシア S i d e

「聞いてませんか娘さんに私達のことを？」

私は驚いた今まで気配が無かったのにいきなり声をかけられて

「あの人形から？」

「人形とはこれはひどい、まあ自己紹介を私は永劫と名乗っていま
アイオーン
す」

「あなたが介入してきたって言う」

目の前の少年は私の殺気を受けながら平然と話していた

「とりあえず殺気とその杖をしまってくださいませんか？あなたに有益な情報を持ってきたのですから」

「話を聞いてからしかできない相談ね」

私は今だこの少年の意図が分からないので杖をおろすことができない

「やれやれ、折角親子3人普通に暮らせる方法を考えてきましたのに」

「なんですって!？」

私は驚いてしまったこの少年は今なんとやった？親子3人で言ったわよね？

なぜアリシアの事をこの少年が知っているの？私はますます殺気を出してしまっていた

「怖い怖い、しかし安心してくださいよ。アルハザードなんて危険な賭けをしなくても行き返させてあげますよ。アリシア・テストロツサをね」

私は驚き杖を落としてしまった、全ての事をこの少年をは知っていて更にいえばアリシアを生き返させると言った

「では、お話ししようその方法を」

Side End

紅那岐 Side

「と言うわけです」

俺は説明を終わりプレシアを見る、驚いて固まってるな

「そ、そんなことが可能な訳ないじゃない！」

回復したプレシアが最初に言ってきたのはやはり否定からか

「まあそうですね、普通なら信じませんよね。ですからとりあえずこれを渡しときますよ」

そう言って俺はジュエルシードを渡した

「こ、これは」

「まあ、信じて貰うための手付金と思ってください」

使い方あってるかは知らないがな

「本当にアリシアはよみがえるのね？」

「私の名にかけて」

「・・・分かったは今信じてみましょう」

賢い方だ全部を信じないで3割位しか信じないとは

「ええ、今はそれでかまいませんよ」

俺はそう言ってプレシアを見つめる・・・おかしいな？なぜプレシア以外の魔力を感じる？アリシアか？

「な、なにかしら？」

おっと、見つめすぎたようだ

「失礼、話は変わりますがもし私が成功した場合条件を飲んでいただきますよ？」

「条件？」

「ええ、さっき言ったように親子3人で仲良く暮らして欲しいということです」

俺はそう言ってプレシアを見る

「あの人形を？必要ないじゃない」

プレシアは言った、しかし俺はしめたと思った、此方の思惑が見事当たったからだ

「おかしいですね、なぜ人形と自分から遠ざけようとした言い方をするんですか？」

「あの子はアリシアの出来損ないだからよ」

「それならなぜそういう風に思うんですか？いつからそう思ったんですか？」

「・・・」

プレシアは答えない

「あなたは気づいているんでしょう？アリシアという変わりを作ろうとしてフェイトを生み出したと」

「何が言いたいのかしら？」

「簡単ですよ、娘がいつの間にか2人になっていたってことですよね？」

「本当に人形なら何もしなければいい、親としての責務といって痛めつける必要も無ければ厳しい言葉をかける必要も無い」

「本当に人形なら必要最低限のことをし後は無視し続ければいい」

「うう・・・」

プレシアは頭を抱えだした

「あなたは気づいたんでしょ？フェイトも愛しい娘だと、親子として愛したいと」

「しかし、気づいた時には遅すぎただから痛めつけ、自分のことを嫌わせていなくなっても大丈夫だと思わせたいと」

「しかしね、子供ってのは親にどんなに嫌われても愛されたいと思うものなんですよ」

「だからあなたがどんなに痛めつけてもフェイトはあなたを慕ってくるでしょ？」

俺は言いたいこと言い満足したので帰ろうとする

「伝えたいことは伝えたのでこれで失礼しますね」

そう言っただけ俺は踵を返したがプレシアが声をかけてきた

「聞かせて、貴方はなぜこんなことを？貴方に得は？」

俺は振り返り答える

「何故かはそれは単純にそれが仕事だからです、得は特には・・・
ああ、娘さんと友達に慣れたらいいなと言うことくらいですね」

「娘は渡さないわ」

ここで親馬鹿！？

「まあ、それはおいおいと。それではこれでそろそろフェイトが帰ってくるはずですので」

そう言っただけ俺は今度は振り向きもせず部屋を出て行き転送魔法で家に帰った

S i d e E n d

プレシア S i d e

驚いたわあの子はこっちのことを全部見抜いた上で得は友達になれたらって

私は思わず渡さないって言ってしまったがあの子なら・・・この命が尽きる前に

少しは信じてみようと思うあの少年を永劫というまるで苦しむ少年を

さて、フェイトが帰ってきたら傷が付かない程度に鞭かしら♪

※このプレシアは結構なSです

S i d e E n d

三人称 S i d e

紅那岐が帰ってきたら正座をした七星がいた

「・・・何があった？」

「どうやら、七星ちゃん調子に乗りすぎてジュエルシードを暴走させちゃったみたい」

「ほう・・・」

「しかもその時フェイトちゃんが暴走したジュエルシードを掴んで無理やり抑えたみたいだよ」

「・・・」

「だ、大丈夫だよ！きちんと直してあげたから痛みすら引いたはず！」

「辞世の句はそれでいいか？」

「ひい・・・」

紅那岐の顔を見た七星は思わず悲鳴を上げていた、隣にいるすずかも青い顔をしている

※どんな顔かはお任せします

「さてO☆H A☆N A☆S H I！しょうか？すずかはもう寝ていいぞ？」

「うん、お休み紅くん・・・」

すずかはそのまま早足で部屋まで行く

「待って！置いてかないで！」

「さあ、O☆H A☆N A☆S H I！しょう」

そしてこの夜には七星の悲鳴があがったとき

「きゃあああああああああああああああああ」

Ep 9 (後書き)

レティ「終了！」

紅「作者よ」

レティ「はいな？」

紅「俺の前世の親とか俺について質問がきてるんだが？」

レティ「それについては無印リリなのが終わったら書かせていただきます」

紅「分かった。では次回もお楽しみに！」

レティ「最後に感想をくれた畏無様・秋代様・雨季様・時空の旅人様ありがとうございます」

紅「雨季様に関しては調子乗った感想大変失礼しました」

レティ「では！」

Ep 10 (前書き)

クロノ登場！

やっぱり空気

Ep 10

紅那岐 Side

「さて、今回は流石に二人でもまずいかな？」

「行ける行ける」

「いや、危ないでしょ流石に」

何が起こってるって？目の前の木の化け物があるんだよね

原作では二人でなんとかしてたけど何か介入しての修正力なのか敵が強くなり始めてきた

「行くぞお前ら？」

「「はい」」

俺達はなのは達の元へ向かった

Side End

フェイト Side

「はぁ・・・はぁ・・・」

今日の前には木の化け物があるあの白い子・・・なのはって子が助けてくれてるけど正直きつい

「ふえええ！？すぐ再生しちゃうよ」

そう私達が戦っているこの木はジュエルシードがある部分は障壁が硬く

それ以外の根っこなどは再生力が凄くて斬っても打ち貫いてもすぐ再生してしまう

「クイックドロウ・バースト、クイックドロウ・フリーズ」

いきなり声が聞こえたかと思ったら爆発する魔力弾と凍る魔力弾が木に直撃した

すると根っこの大半が吹き飛び残りの部分が凍っていた

そして近くに誰か来たと思ったらこの前私と戦った子だった

「やほゝ助けにきてあげたよ。手は大丈夫？」

そう言って私の手を覗き込んできた

「大丈夫です」

私はそっけなく返すことしかできなかった

Side End

なのは Side

「すごい・・・」

「うん・・・」

私とユーノ君は今のことにビックリしてポツリとつぶやいていたら誰かが来たの

「大丈夫だった？」

前に温泉に現れた女の子だったの

「あなたは？」

私はつい聞いてしまったの

「あーそっか星^{スター}しかまだ名乗ってなかったね、私は月^{ムーン}って言うのよろしくね！なのはちゃん」

「ふえ？私の名前」

「星に名乗ってたでしょう？それでよ」

そうだったの

S i d e E n d

紅那岐 S i d e

・・・気持ち悪！根っこが触手見たくうねうね再生しだしたし

てか、触手趣味なんて作者だけで十分だろ

————触手は最高の美だああああ！———— byレティ
ウス

スゲー変な電波が飛んできたな・・・俺がメタ発言したせい？

「さて、アレを破るのを手伝いさせていただきますしよう」

俺はそう言って二人を見る

「信用できません・・・」

「なの・・・」

あれ？俺ってそこまでひどいことしてないよね？

「信じる信じないは好きにしてください」

言っていて少し悲しい

「さて星今度は失敗してはダメですよ？」

「分かってるよ！汚名挽回してあげる！」

「「「・・・」」」

場が沈黙に包まれた

「汚名は返上するものです」

俺はそう言っバカて七星を戒める

「やだなあ・・・ちよつとしたジョークだよ？」

「「うそ（だ（なの）」」

俺以外の奴らが突っ込む

「ぶー・・・いーもーん私一人でやってやるから」

そう言って七星はグランシャリオ モード4・ブラスターを取り出した

「前にも思ったけどその武器気味悪いの」

なのははいやそんな顔をしていた

「・・・」

フェイトに至っては青い顔していた

ハウリングランチャーって結構よくない？俺はすきだけどなあ

「穿て！アトミックブラスター」

するとランチャーからすさまじい砲撃が木へと行き障壁を貫いて貫通した

「「・・・」」

二人は固まっているな、俺も最初威力を見たときは驚いたしな

「お二人とも、封印も終わったんでもらっていいですか？」

「ダメ！」

二人はすぐに反応した

「ではどうするのですか？戦ってもこの前と同じ結果ですよ？」

「それは違います永劫さん」

永劫さんって・・・

「私のことは呼び捨てにどうせ偽名ですし」

「ふえ！？そうなの」

信じるか普通？まあいっか

「ではどう違うんですか？」

「こういうことです」

するとフェイトはなのはの近くに行き俺に構える

「二人掛かりですか」

完全に原作崩壊したな・・・俺乙！

「いいでしょう！掛かってきなさい！」

俺となのは達はお互いの距離を詰め寄ったその時

「ストップだ！ここでの戦闘は・・・プゲラ」

ついに出てきましたKYことクロノ

俺達を止めようとしたけど一人で3人は止められなかったようだ、
モロにフェイトの攻撃を食らっていた

「「・・・」」（可哀想なものを見る目）

うん、俺達の反応は間違いが無いはず

「そ、そんな目で僕を見るなー！」

クロノが言ってきた

「かっこよく登場してうまくいかなかった時ほど空しいことないで
しょう？」

「「うんうん」」

二人ホント仲良いね

「で？何のようですか？」

「はっ！？時空管理局クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせ

てもらおうか」

そう言ってクロノは俺達を見る

「ジュエルシールドが有る、私らが欲しい、戦って奪い合う、貴方がジヤマした」

「単語で喋るな！」

なんだよ、きいてきたのそっちなんだがな

「永劫く何かしらけちゃったから帰ろく」

「そうですね私達はここで失礼させていただきます」

七星が言ってきたので俺は背を向けて帰ろうとした

「まで！逃すわけ無いだろう！」

そう言ってクロノは俺に向けて魔力弾を放ってきた

「ふ！」

俺は双銃の刃で全部斬り払った

「なっ!？」

「今の一回は警告として受けますが、もし次背を向けてるものを撃つのなら・・・殺しますよ？」

俺はクロノのみに殺気を放ちそのまま立ち去った

ジュエルシールドはちゃっかり回収したよ

S i d e E n d

フェイト S i d e

『フェイト今のうちに!』

『アルフ、ジュエルシールドは』

『やつこさんの方が上手だね取られちゃったよ』

『分かった』

私はなのはを一瞬見てその場を立ち去った

S i d e E n d

紅那岐 S i d e

「ぎやはははははは・・・腹痛え」

「お兄ちゃん今になって噴出すなんて・・・」

「笑ったら可哀想だよ」

二人が俺を注意するが

「いやだってよ？ かつこよく登場しようとしてスベルって最高にひどいだろう！」

「気持ちは分かるけど・・・」

「よくあの時笑わなかったね」

「戦闘中は基本的に感情の起伏は抑えられるからね、だからあの時はそういう反応だったのさ」

俺はひとしきり笑い終わり説明していた

「へへ」

「基本的には戦ってる時はポーカークフェイスだよ俺？ 怪我しても顔すら歪めないように訓練したからね」

そう言って俺は再び帰路についている。因みに既にジャケット等は解除してるので基本はばれないだろう

Side End

クロノ Side

何打あの男は！？ 仮面をつけていたので素顔が分からなかったし、思い出そうとしてもナゼが靄が掛かってうまく思い出せない

そして一番印象づいたのはあの殺気だアレは人を殺してなお余りあるものだ、まだ少年といって過言でないはずなのにあの殺気だけは以上だった

そして固まってる隙に黒い魔道師にも逃げられてしまった

一体ここでは何が起こってるというんだ

S i d e E n d

トール S i d e

私は上から紅那岐達がやっていることを見ていた

確かに原作崩壊をし始めていた、それはいいが崩壊したことによる修正が来ているようだった

詳しくは分からないがどうやら転生者がまた1人いるようだ、この世界は誰もいないから私の管轄になったはずだが、それはあくまで表面上の話

他の神が律儀に守るとは思えない

まあ、あの子には期待してみましようかしら、なんだかんだ言ってもチートにチートを重ねがけた存在だしね

そして私は仕事をしながら見ていた

なのは↓管理局に協力

フェイト↓進展なし（母親の鞭がやさしくなった気がする程度）

紅那岐↓相変わらず神出鬼没

という感じだったわね、紅那岐もどうやら管理局では危険・重要人物認定されたみたいね

力を使ってみてみるとどうやらあそこの船の艦長さんが上へは報告してないみたいだけど

さあ紅那岐？第一幕はもうすぐ降りるわ貴方はどうやって幕を下ろすのかしら？

Ep 10 (後書き)

紅「作者よ」

レティ「なになな？」

紅「本編にでてくるじゃねえよ！」斬

レティ「ぎゃあああああああああああ」

紅「ふう・・・次回をお楽しみに！」

レティ「最後に畏無様感想ありがとうございます！」

紅「戦闘シーン増やして会話シーン減らす努力忘れるなよ？」

レティ「がんばる・・・」

Ep 11 (前書き)

ちよっとすっ飛ばしてO☆H A☆N A☆S H I! 編

Ep 11

紅那岐 Side

「準備はいいですかお二方？」

「いつでもかまいません」

「お話させてもらうの」

俺とフェイト・なのははお互い見合わせながら空にいた

「いいでしょう、慢心することなく油断せずかかってきなさい！」

こうして俺VSフェイト・なのはの戦いの火蓋がきって落とされた

Side End

三人称 Side

今空中では3人が激しい空中戦を繰り広げていた

「行って！」

《ディバインシューター》

なのはが魔力弾を作り紅那岐へ向かって放つ

「はっ！」

紅那岐は来た玉を難なく打ち落とすがそれがいけなかった

「はぁっ！」

《ハーケンセイバー》

紅那岐が打ち落としている隙にフェイトは急速に接近し切りかかっていた

「ちっ」

紅那岐は舌打ちしながらもフェイトの攻撃を止めた

《ディバインバスター》

「味方ごとですか？」

するとフェイトはすぐに離脱して距離をとった、紅那岐も同じく離脱しようとしたら右足に違和感があった

「バインド！？しかし一個なら」

「フォトンランサー」

「ちっ」

バインドをとこうとした時にフェイトのフォトンランサーが来ており体を捻って回避はできたがその時にはなのはの準備も終わっていた

「シュート！」

桃色の魔力の塊が紅那岐へと襲い掛かる

「くっ・・・グランシャリオ モード1・刀」

紅那岐は今まで使っていた双銃をしまいすぐさしまい刀をだした

「レールガン電磁拔刀・飛_{あすか}」

紅那岐は斬撃を前に飛ばしディバインバスターを切って難を逃れた

「驚きましたよ、ここまで連携が取れてるとは思っていませんでした。前見たく瞬殺ってわけには行きませんね」

紅那岐は一旦攻撃をやめ二人を褒めた

「貴方を倒すためには必要だったから」

「私はフェイトちゃん以外貴方のお話を聞いてみたいの」

Side End

紅那岐 Side

俺は二人の言葉を聞いて嬉しかった

なのははなんと言った？フェイト以外と言ったつまりはフェイトの話
話を既に聞いているということだ

つまり、話が変わり最後のO☆H A☆N A☆S H I !の対象が俺へと変わった、これで原作ブレイクの話は半分は終わったということだ

さあ、そろそろ戦いを終わらせようか

「なるほど、二人が組むことで私を倒すことができると考え、わだかまりすら超えましたか」

「貴方の力は私達以上の力を持っています、私の目的のためにもそして、母さんのためにも負けるわけにはいかないんです」

「永劫さんなんでなの？フェイトちゃん見たくお母さんのためとか見たく集めているんですか？」

フェイト・なのはがそれぞれの思いを言ってくる・・・最後までさんをつけるのか？

「ふう・・・私を倒したら教えてあげますよ」

そうして俺は再び双銃を出し乱射を始めた

「くっ！」

「にゃ！？」

フェイトとなのはが避ける、当然だ俺は狙って撃ってるわけではない

俺が一通り打ち終わるとなのは達に言う

「さて、そろそろ魔力が厳しくなってきましたので終わらせて頂きましょう」

「なら」

「私達が」

そういうと二人は俺を上下で挟むように移動した

「どうするんですか？」

俺が問いかけてる間に二人の準備が完了したようだ

「サンダー・・・レイジ！」

フェイトは範囲魔法攻撃を放ってきた、最初のバインドはすぐに解いたがすぐさま落雷が襲ってくる

《ディバイン》

「バスター」

なのはが追撃というばかりに直射砲を放ってきた

「くっ!?!・・・閃舞！」

俺は移動術を使い何とか逃れた・・・凄く危なかったとだけ言っておこう

「ふう・・・危なかったですよ。次は此方の番です！」

俺はそう言って動き出そうとしたら足にバインドがあり、気づいたら全身を拘束されていた

「いつの間に!？」

「設置型です、貴方が避けるのは分かっていたのでそこに誘導させていただきました」

フェイトはそう言うのと自身の周りに38基のスフィアを作っていた

「そう、こうでもしないとあなたに攻撃できないの」

するとフェイトの上からなのはが言った

「受けてみて知恵と戦術、最後の切り札」

・・・バインド今だ解けないんだけど

「フランクスシフト」

「全力全開」

『『紅くん（お兄ちゃん）』』

『お前から来るな！俺達の勝負ジャマしたらただじゃ置かない！』

七星とすずかが心配しているが俺は打開策を頭の中で必死に考えていた

「撃ち・・・」

「スターライト」

フェイト達が既に発射体制に入ってる中漸く足のバインドを外せていた

「碎けー！」

「ブレイカー！」

足のバインドが外れたと同時にフェイトとなのはの砲撃が飛んできた

「こうなったら・・・」

そして俺に弾幕と俺を包む砲撃が向かってきた

S i d e E n d

フェイト S i d e

今私となのはの攻撃が終わった

なのはと友達でよかった私じゃアレを受け止められない

「「はぁ・・・はぁ・・・」」

私達の最大の魔法を使ったから流石に私もなのはも疲れてていた

「やったかな？」

なのはが降りてきて聞いてきた

「分からない、あの人は凄く強いから」

そう言って煙の先をみていた

Side End

なのは Side

私とフェイトちゃんは煙がはれてきたので見てみるとそこには

「うそ・・・」

「そんな・・・」

永劫さんがその場にいた

「やりますね、今のは流石に効きましたよ」

そう言って私とフェイトちゃんを見て言った

「馬鹿な！」

「どうなってんだい！」

ユーノ君とアルフさんもビックリしている

「どうやって抜け出したの」

私は思わず聞いてしまった

Side End

紅那岐 Side

「どうやって抜け出したの」

なのはが効いてきたが正直今の俺は答えられる余裕は実は無い

「抜け出してませんよ、足のバインドが外れたので足技を使って威力を軽減しただけです」

流石に答えないわけはいかないから答えたが・・・ダメージがひどいな

「さて、次はわたしの番です・・・逝きますよ？」

「字が違うの！」

俺はそう言って先ほど無駄撃ちした魔力弾を再びなのは達の前に出したその数1500

「これは・・・」

フェイトがビクリしている

「私は直射砲など苦手だね、なので通常弾をたくさん使う事によって威力を底上げしてるんですよ」

フェイト達が驚いてる間に俺も準備を終わらせた

「グランシャリオ コンボ2&6・銃&ビット」

「最後の攻撃です、耐えれば貴方達の勝ちでいいでしょう」

俺は二人を見て言い放つ

「さあ踊りなさい！ラスト・ワルツ！」

俺は再び銃を乱射しビットも防御の薄いところに攻撃をした・・・
今度は狙いをしっかりと持って

「きゃあああああああ」

俺の攻撃が縦横無尽に辺り流石の2人も防御ができなかったようだ

S i d e E n d

三人称 S i d e

あの弾幕という地獄の図が終わるとそこにはボロボロになったフェイトとなのはがいた

しかし二人は何とか耐え切ったが体力の限界が来て落ちていつてしまう

「フェイト！」

「なのは！」

二人が急いで助けようと向かおうとしたが、紅那岐が二人を助けた

「ふう・・・流石の私でも今の状況はきついですね」

そう言って二人をアルフとユーノに渡した

そして戦いが終わりジュエルシードの受け渡しが行われようとした
その時上空から魔力を伴った雷が落ちてきた

「くっ・・・星・月！」

「「はい！」」

紅那岐の合図の元二人は全員を守る広域防御を張ったがその隙を
疲れジュエルシードを取られてしまった

「ちがう・・・あいつじゃない」

紅那岐が何かをつぶやいていた

「!!・・・管理局今すぐ俺達を戦艦に転送しろ！」

「何を言ってるんだk「分かりました」艦長!？」

「助かる、細かい説明は後だ早くしろ！」

そうして紅那岐達はアースラに転送された

Ep 11 (後書き)

レティ「飛んでる話は特別編でやる予定」

紅那岐「やる必要あるんか？」

レティ「ネタで行こうかと？」

紅那岐「疑問系はやめろ」

レティ「まあ、どこでなのは達が協力するようになったのかの説明がその特別編にもって行くから」

紅那岐「因みに、今回苦戦した理由は単純にチームプレイができてたって事です」

レティ「今までは各々勝手に動いてたから1人ずつ倒せばよかったけど、それができなかったためです」

紅那岐「では、秋代様・時空の旅人様・畏無様、感想ありがとうございます
ざいます」

レティ「次回でまた！」

Ep 12 (前書き)

この話は会話のみとなっています

Ep 12

紅那岐 Side

「リンディ通信機借りるぞ」

そう言って俺はムリヤリ通信機を借りプレシアの元へ通信を送った

「貴様何をやってるんだ！」

クロノが突っ込んできたが今は構ってやれる余裕ない

「何かしら私に連絡を入れるとは」

プレシアが出てきた

「プレシア！アリシアはどうした？」

俺は悪い予感しかしなかったがそれでも聞かなければいかなかった

「アリ・・・シア・・・？」

そこにフェイトがやってきた

「あら？人形もいたのね」

「人・・・形・・・」

そしてプレシアは今までのことなどを説明し、フェイトはその場に

崩れ落ちた

「フェイトちゃん!？」

「誰か彼女を医務室に！」

なのは達が駆け寄りリンディが手牌をしているが俺は構わずプレシアに再度聞いた

「アリシアはどうした？」

「あの子ならもっとも安全なところにいるわ」

プレシアはそう言ったが、瞳は違うと言っていた

「そうか、ならばプレシア！アリシアの元にいろ………に行くってやる」

俺はそういうと七星たちに指示を出した

「星・月先行して道の確保をしておけすぐに追いつく」

「「T e s .
テストメント」」

そう言って七星たちは転送場へ行った

「わ、私達も行かせてください」

なのははフェイトを心配しつつも七星たちについて行った

「さて、俺も行かせてもらおう」

俺は先ほどフェイトが運ばれた部屋へときた

「アンタ・・・」

「悪いが時間が無いのでな構わず話すぞ？フェイトに問うお前は何者だ？」

俺は直接的かつ根本にかかわる質問をした

「私は・・・アリシアのクローン」

フェイトは心が壊れてしまっているのか機械的な返事をしない

「俺が聞いているのはおまえ自身がどう思ってるかだ」

「わたしは・・・」

今の状態のフェイトでは流石にきちんと答えられないか

「一度しか言わないからよく聞け、お前がどう思ってるかで人というものは決まるんだ、もしお前がアリシアのクローンというならそうなのだろう・・・だがしかし、他人に言われそれを受け入れてる時点でお前は人形という存在を受け入れたということだ。なのはが必死になりお前を呼び、アルフがお前をご主人様と呼んだことすら否定してな・・・」

俺は一度区切りフェイトの頭に手を載せ再び言う

「いいか、お前の命はお前のものだ好きにするといい、たとえば全世界が否定をしようとお前を受け入れてくれる人がいるならそれが世界と思いな」

そう言って俺はフェイトの頭から手を離した

「・・・」

フェイトは涙を浮かべていた

「もう一度だけ問おうお前は誰だ？」

「私は・・・フェイト。フェイト・テストロッサ」

そう言ってフェイトは立ち上がった

「ならばその気持ち母親へと伝えてやれ」

そう言って俺は内心の悪い予感が当たらないことを祈りつつなのはたちの元へと向かった

Side End

三人称 Side

「なのは！」

ユーノが叫ぶ、ユーノがバインドで拘束していた機会兵の2体が抜け出しなのはの元へと向かう

「しまっ！」

「あっ!？」

そこにいた七星たちも他の機械兵の相手をしていたので動けなかった

「サンダーレイジ！」

「クイックドロウ・バーストゼクス」

すると頭上から強力な雷と魔法弾が舞い降りてきて2体の機械兵はあっさりと爆散した

「フェイトちゃん！永劫さん！」

なのはが紅那岐達のもとへくる

「話は後だ！俺とフェイトはプレシアの元へ行ってくる。他は駆動炉の封印を頼む」

「」「」「はい！」「」「」

そして二手に別れそれぞれの目的地へと向かっていった

S i d e E n d

フェイト S i d e

「母さん！」

私は永劫の案内の下、母さんがいる場所に來た、叫びながら入ると

「フェイト！？こっちにきてはダメ！」

すると母さんは私を止めた

「どうして・・・どうして來てしまったの」

母さんの表情はどこか悲しそうだった・・・今まで私はそんな顔を見たこと無かった

「分かったかプレシア？子供とはこうも儂げでそして親を求めるものだ」

「貴方の言うとおりであったわね・・・」

永劫と母さんが話しているけど一帯・・・

「さて、プレシアよ人生がうまくいかないのは当然だ、ここいらで少し休め」

「そうね・・・私はもう長くないからせめて・・・」

長くない？イヤ！聞きたくない

S i d e E n d

紅那岐 S i d e

「アホか、貴様も助けんと俺は仕事が完了としたと言えんのだ貴様

も助けてやる、丁度仲間も着たようだしな」

俺はそう言う上を見ると七星達が丁度来たようだ

「貴方達・・・」

プレシアはビックリしてるようだ

「さて、まずはお前とアリシアにはアースラに非難をして貰おうか」

「それはできないわ・・・私達には・・・」

プレシアが何かを言おうとしたところでそいつは現れた

S i d e E n d

三人称 S i d e

「ハーハッハッハ！それはできない相談だ！そいつらは俺が貰い受けるつもりなのでな！」

突如虚空から一人の男が現れた

「いつの間に！？」

「だ、だれ！？」

突然の事態に紅那岐を除く全員は驚いてしまった

「そうか、お前が前話の雷を放ったものの正体か・・・」

紅那岐よメタは控えろ

「いかにも！俺こそが時の支配を司る「名乗らんでかまわんよ」貴様！」

紅那岐はその男が名乗ろうとしてるのを制したのは達に言った

「七星以外アースラに戻れ、こいつは俺が倒す」

「そ、そんな！できるわけ無いじゃない！」

月が反論をした

「異論は認めん！最悪全員虚数空間に落とされてしまうからな」
そう言って紅那岐は全員に言い放った

『紅くん！』

『早く行け、こいつはお前達には手に終えない』

『そ、そんな・・・』

『安心しろ、こいつを倒して直ぐに帰る』

『絶対だよ！』

『約束するよ』

念話が終わるとすずかはプレシア達に近づいていった

「させると思うか！」

男はすずかを止めようとその腕を振るおうとしたが

「お前の相手は俺がしてやるよ」

「チッ」

紅那岐が割り込み男と紅那岐の位置が入れ替わった

「早く行け！」

紅那岐が叫ぶと全員プレシアやアリシアを抱えながらその場を出て行った

「ふん、ならば貴様を倒してあいつらの後を追おうとするか」

そう言って紅那岐を正面から見据えた

S i d e E n d

すずか（月） S i d e

私は今アースラに戻ってきており目の前のモニターを見ていた

「ダメです！時の庭園崩壊止まりません！」

エイミィ？さんが言うが私は目の前のモニターから目を離せないで

いた

「ダメです時の庭園完全に崩壊します！」

エイミィさんが言った瞬間時の庭園が白銀と赤黒の閃光が包む

「時の庭園・・・完全にロストしました」

「あ・・・ああ・・・」

私は底に崩れてしまった

「うそ・・・」

「そんな・・・」

他の人たちも何かを言ってるが私には聞こえなかった

「どうして・・・約束したのに」

私はついに泣き崩れてしまった

「月さん・・・」

誰かが私に近づいてくるが私はそんなのに構ってられない

「離して！今からでも！」

助けに行こうというおうとしたら後ろから声が聞こえた

「あー悪いがあそこに言っても何もないぞ？」

私が一番聞きたかった声が聞こえてきた

Ep 12 (後書き)

レティ「終了！」

紅那岐「戦闘パート無いので痛いのに散々叩かれただろうが」

レティ「そんなの気にしていたら小説なんてやってられないさ☆」

紅那岐「だいぶダメージは受けたみたいだな」

レティ「まあね！だがこれが私の小説だし」

紅那岐「まあ、今回俺が助かった理由や戦闘シーンは次の話でやるんだよね？」

レティ「やらせていただきます！」

紅那岐「では、秋代様・時空の旅人様・畏無様感想ありがとうございます」

レティ「今回は0時回って少ししたらあげる予定です」

紅那岐「では！」

Ep 13

三人称 Side

「悪いが時間が無い、直ぐに終わらせてもらおう！七星！」

「イエス、マスター」

そう言うと七星は光となり紅那岐が持っている刀に吸収されていき
刃の色が白銀から血に染まった色に変わった

「何だそれは！？」

紅那岐はそれに答えることなく斬りかかった

「くっ！？」

男が間一髪で避けるが紅那岐は追撃する

「食らえ！電磁抜刀が終の太刀が一つ電磁^{レールガン}抜刀・・・」
《殲^{セン}》

肩に担いだ刀をそのまま唐竹に抜刀し攻撃をする

「がはっ！？嘗めるなダオスコレダー」

「しまっ！？」

男Ⅱダオスが自身を中心に範囲技を放ち紅那岐はダメージを受け思

わず離れてしまった

（流石にダオスは想定外だった）

あの時割り込んできた男はなんとダオスだった・・・見た目と能力が

（まさかまんまダオスの能力とは思わなかったが・・・）

※ダオスの倒しづらさは作者が一番強いと思ったラスボス故にです

「貴様がいるせいでこの世界は俺を否定しだした・・・だから滅させて貰う！」

今度はダオスが紅那岐に大して攻撃を開始した

「はぁ！ミリオンアサルト！」

ダオスによる4連撃・4連続昌術・範囲攻撃・手から放たれるビームを食らい流石の紅那岐も捌ききれず吹き飛ばされる

「ぐ・・・」

「さて、ここももうじき崩壊する終わらせてもらおうぞ」

ダオスはそのいうと手に魔力を集めだす

Side End

紅那岐 Side

こうなったらやるしかない

「・・・グランシャリオ フォーム・ラグナレク開放 モード7起動」

《マスター!? それは神によって封じられています無理に開放すればマスターが!》

グランシャリオが止めてくるが

「ヤレ!」

《・・・イエス、マスター。ラグナレクフォーム開放ノートウング起動》

グランシャリオが開放してくれた、そして俺は今までは反転した服装になり背には薄い羽みたいなものも生えた

「貴様何をした!？」

ダオスが聞いてくるが今の俺には余裕は一切無い

「電磁抜刀が終の太刀が最後の極技・・・電磁^{レールガン}抜刀」
《ぜっ! 絶!》

そして俺はダオスの前から消えた

Side End

三人称 Side

「なん・・・だと・・・?」

気づくとそこには斬り伏せられたダオスがいた

「絶……それは亜光速の域まで到達した最速の抜刀術だ」

「しかし、私はこの程度では終わらんぞ」

ダオスが立り上がり再び紅那岐に攻撃を仕掛けようとする

「いや、これで終わりだ」

紅那岐の手には剣？ 銃？ 数多の武器という概念を持つ形の無い武器があった

「ノートウング、これが俺がツールにもらった最強の武器」

「なんだと？」

「それは、過去・現在・未来・数多の平行世界・無限の異世界の全てにおいて必ずの可能性を持つてくる最強の力」

そう、紅那岐はこの力を欲するためグランシャリオをもらい使うことを拒んだが故封印を了承していた

「終わらせよう……」

紅那岐は形の無い武器を剣となし肩に担いだ

「嘗めるな！ 真ダオスレーザー」

ダオスの後ろから魔方阵が現れ数多のレーザーが現れいずれ一つの攻撃となって紅那岐を襲う

「・・・の名において！ブラッディ・プラチナム！」

紅那岐のは剣を振り下げると赤黒と白銀の斬光が辺り一面を支配した

Side End

紅那岐 Side

「くっ・・・ここは？」

「ここは？じゃなーい！」

目を覚ますとそこにはご立腹のツールがいた

「全く、まさか封印を強制解除して使うとは思わなかったわよ」

「すまなかったな、倒せなくは無かったがいかなせん時間が無かったからああするしか方法は無かった」

「いいわよ、じゃあ、戻すわよ？場所はアースラでいいわね？」

「頼むよ・・・そして世話になった」

「フン！」

そう言って俺は帰って行った

「離して！今からでも！」

戻るとそこには泣き崩れたすずかがいた・・・時の庭園なくなって
らあ

「あー悪いがあそこに行っても何も無いぞ？」

俺はそう言ってみんなを止めた

Ep 13 (後書き)

レティ「終了」

紅那岐「ダオスは作者が始めてRPGのボスとしてぼろ負けしまくった為採用しました」

レティ「当時○学生だったころ泣きながらやってたからなあ」

紅那岐「因みにダオスのモデルはテイルズVSから採用しました」

レティ「そして0時にあげるといってこの時間になったのは純粹に寝落ちしました」

紅那岐「俺の最強の力については無印終了時に改めて詳しく書くつもりです」

レティ「時空の旅人様・畏無様・秋代様、感想ありがとうございます」

紅那岐「では、次回はエピローグ！」

Ep 14 (前書き)

やべえ・・・クロノよりユーノのほうが空気が嫁状態だった

私が言うKY 〓 空気が嫁です

Ep 14

三人称 Side

紅那岐は突然戻ってきたかと思うといきなりプレシア達の下へと赴いた

「生きてるかプレシア？」

そんな不吉なことをプレシアに聞きながらズカズカと部屋へと入っていった

「あなた・・・生きていたのね」

「まあな」

プレシアも負けない不遜な態度で紅那岐を迎えていた

「約束を叶えにきたぞ」

そう言って紅那岐が取り出すはこの事件のきっかけのジュエルシードであった

「それをどうして!？」

全員が驚いてる中紅那岐は気にすることなく続いていた

「さて、ここは狭いからもう少し広い場所に移動しようか」

紅那岐は周りの声を一切無視して話を続けていた

※移動中

くアースラ 訓練室く

紅那岐たちは訓練室へと移動してきていた、アリシアも途中で拾い訓練室まで運んできている。

ここにいるメンバーは紅那岐・七星・すずか・なのは・ユーノ・フエイト・プレシア・リンディ・クロノと言った主要メンバーである
ただし、話が分かっているのは当然プレシアのみである

「あゝ何が始まるんですか？」

状況が分からないのはが代表して聞いてきた

「アリシアを蘇させるだけさ」

紅那岐が何気なく言った言葉に全員が驚いていた

「馬鹿な」「できるはずが」「どうやって」

など否定な意見が多い中紅那岐が気にすることなく続けていた

「あゝ男子諸君できれば出て行ってもらいたいのだが？」

「なぜだ？」

クロノが代表して聞いてきた

「少女の裸見たいのか？」

紅那岐が言った一言によりユーノ・クロノは状況が分かった女子に
凄く睨まれてしまい慌てて部屋を出て行った

「さて、始めるか・・・」

つぶやいた瞬間紅那岐の周りに21個のジュエルシードが踊るよう
に舞い上がった

「我ここに宣言する、願いを叶える輝石よ今この時を持って我が願
いを叶えたまえ！」

紅那岐がそう言い自身の魔力を注ぎ込んだ

するとジュエルシードが今まで以上に一層輝くとその輝きから神r・
・・・ではなくある少女の霊が舞い降りてきた幻覚が見えた
またプレシアも淡く光り輝いていたが誰もがアリシアやジュエルシ
ードに夢中で気がつくものは誰もいなかった

「これにて、契約は終わりここに願いが叶ったことを宣言しよう」

紅那岐が言い放ちアリシアの元へと赴き自身のジャケットをかけて
やりながら抱いた

「ほれ、プレシア約束どおりアリシアは蘇ったこれから家族3人で
仲良く暮らしな」

そう言って紅那岐は抱いているアリシアをプレシアに渡した

「あ・・・暖かい、生きている」

プレシアは涙を流しながら我が子アリシアが生き返ったことを実感した

「で、管理局にはこれを返しておく」

そう言うのと紅那岐は先ほど使ったジュエルシードをリンディに渡した

「これは・・・」

「能力を使い切っちゃったからただの石にしかならんが、無いよりましだろう？ 更に言えば今回は何も起こらなかったんだよ、しいて言えばプレシアが実験を失敗してしまい管理局が注意に来たって位じゃないか？」

屁理屈をこねながらリンディに言い放った

「そうね・・・今回は何も起こらなかったわ」

リンディも納得が言ったかのように紅那岐の意見を聞きいていた

「では、俺らはここら辺で帰らせていただこう」

そう言って紅那岐達が出て行こうとすると

「「待って！（ください）」」

なのはとフェイトが声をかけた

「なんだい？」

「えっと・・・その・・・ありがとうございました！」

「また会えますか？」

「フエイト、気にするな仕事だからな。そしてこれからがおまえ自身好きに生きるといい。なのはそれは分かんが近いうちまた合う気がするよ」

そう言って紅那岐は今度こそ本当に出て行った

Side End

フエイト Side

私は永劫が出て行った後母さんに近づいていった

「母さん・・・後のとき言えなかったけど・・・」

私は母さんに自分の思いを言おうとしたら突然抱きつかれた

「フエイト・・・ごめんなさい・・・私のもう一人の娘よ・・・ごめんなさい」

泣きながら私は母さんに抱きつかれた、私は知らずにないていたよ
うだ

「あ・・・ああ・・・母さん、母さん！」

Side End

なのは Side

「フェイトちゃんよかったの」

私はついもらい泣きをしてしまったの

「艦長あいつが！」

感動の場面でクロノ君が入ってきたの・・・もう少し空気呼んで欲しいの

「クロノ？今回は何も起きなかったのよ？たまたま民間協力者が回収を手伝ってくれたって事なんですから」

リンディさんが説明していたの

「それにしても暴走もさせずどうやって・・・？」

ユーノ君がやってきて疑問に思っているの

「そういえばそうなの」

私も不思議になってきてがんばって頭で考えたけど何も思いつかないの

Side End

紅那岐 Side

「ここまで来れば後は大丈夫だな」

俺はそういうと元に戻った

「お疲れ様お兄ちゃん」

そう言って七星は俺をねぎらってくれた

「・・・ん？　すずか？」

先ほどから静かだったすずかのほうへ目を向けるよそこには・・・

「ねえ紅くん？　どうしてあんな無茶をしたのかな？」

ものすごい笑顔で俺の方によってくるすずかがいた・・・こええ

「少し落ち着こう！　会話とはすばらしい機能だと思わないか！？」

俺はそう言ってすずかを落ち着けようとした

「ふふ・・・問答無用だよ？」

すずかが笑顔で死刑宣告をした、俺は有無を言わせずこつてりと絞られました（物理的に）

そしてその後当分の間腕に抱きつき離れてくれなかったことをここに刻む

Side End

三人称 Side

そして今なのはとフェイトは別れの挨拶をしていた。フェイト達は今回の騒動でプレシアの実験が暴走ということで一旦ミッドに行つてあれこれやるらしい

「今回はうまく言つてよかった」

その場所から遠く離れた地で二人の別れを見ている紅那岐達がい

「そうだね、私も友達が増えるのが楽しみだよ、半年くらいしたらここにくるんだよね？」

さすがが質問する

「くるはずだ、その時でもいろいろと弄つてやれ」

そう言つて紅那岐はその場から離れた

『これで一応無印は完了かな？』

『お疲れ様、私の力を使ったけどなかなかの結果よ、合格！』

紅那岐はツールと会話し最初の依頼を完了させた

「さて、次はどうなることやら」

紅那岐の旅は始まったばかりである

Ep 14 (後書き)

レティ「終了！お疲れ」

紅那岐「おうよ、これで一応無印編は無事終了したか」

レティ「この後はお前の生前と抜けてる話の保管と技紹介をして新しい話に以降だな」

紅那岐「話の保管いるか？」

レティ「私の独断ですずかを魔道師にしたのに全く活躍させなかったからさせたいw」

紅那岐「自業自得だな」

レティ「それでは、時空の旅人様感想ありがとうございます」

紅那岐「次回もお楽しみに！」

Ex 1 (前書き)

保管の話です

Ex 1

「協力体制取りました」

【温泉の戦闘の後】

紅那岐が飛び立った後其処に残されたなのはとフェイトがいた

「ねえ、お名前教えて欲しいの」

なのはは其処にまだいたフェイトに話しかけてた

「フェイト、フェイト・テストロッサ」

「私はなのは、高町なのは」

なのはも同じように自己紹介をした

「ねえ、フェイトちゃんお願いがあるの」

「お願い？」

フェイトは自身の使い魔アルフが気絶しているため動くに動けないのでなのはの話を聞いていた

「そう、あの永劫さんって人とお話するためにフェイトちゃんにも協力して欲しいの」

「私は・・・」

「教えて？何でフェイトちゃんはジュエルシードを集めているの？」

「私は・・・」

そしてフェイトはなのはに話したなぜ集めているのかを、またなのはも自分の幼少のころの事を話お互いなぜ集めているかを理解したようだった

「そうだったの・・・」

「なのはも・・・」

そしてお互いの気持ちを理解した後なのはが先ほどの話をしてきた

「それで永劫さんとお話するためにフェイトちゃんと同じように協力して欲しいの」

なのはがレイジングハートを握りながらフェイトに問いかける

「う、うん・・・私一人だけじゃ勝てないからなのはに手伝ってもらえたら嬉しいな」

フェイトはこの時かすかに思ったそうだが、絶対になのはのお話の対象になってはいけないと

End

く七星が調子に乗りましたく

【紅那岐がプレシアの元に行ってる時のジュエルシード発動編】

「あれ〜？何で奪い合ってないの？」

七星が現れたときなのはとフェイトはお互い封印が終わりジュエルシードの付近にいた

「あれ？えっとあなたは？」

「私？私は・・・（実名いえないしな〜・・・そうだ！）^{スター}星って呼んでね？」

七星は自分の自己紹介をした後改めて質問した

「それにしても何でお互い奪い合ってないの？」

「永劫さんを倒すためにお互い協力したの！永劫さんは？」

「永劫は本日お休みのため私が出てきたんだよ。じゃあ、それもらっていくよ？」

そう言って七星はジュエルシードに向かった

「させません！」

フェイトが光速で近づき七星を止める

「わっ！？プロテクション」

間一髪で防御が間に合い再び距離をとった

「危ないなくこうなったら貴方達無力化して奪うしかないか」

そう言って取り出すはモード4（通称ハウリングランチャー）

「気持ち悪いの・・・」

「うっ・・・」

二人はそれの外観を見て青い顔をした

「だよね、でも・・・威力は高いよ」

そういうと七星は二人に向かって砲撃をしてきた

「「にやっ!?(くっ!?)」

「それぞれ、どんどんいくよ」

七星はタメやラグが無い砲撃をぽんぽん放ってくる

「何とかできなくは無いけど・・・隙がないの」

「なのは私が囷になるからその隙に」

そういうとフェイトは七星に突撃をしていく

「はあっ!」

サイスフォームで斬りにかかってくるフェイトを七星は距離を詰め

させないように砲撃を撃ちまくりなのは存在を忘れていた

「今だ！ダイバイン・・・バスター！」

七星がフェイトに夢中になってる隙を突きなのはの砲撃が無防備な背中に直撃をした

「やった！」

「・・・（怒らせないようにしよう）」

フェイトは人を丸呑みできるほどの威力のある砲撃を見て青い顔をしたそう

「もういったいな」

煙が晴れて出てきた七星の姿はバリアジャケットが破れボロボロだが体のダメージは少ないようだった

「この姿は永劫に見せなきゃ意味無いじゃん・・・」

そうとうと七星は先ほどの連射とは変わり足場を作り魔力を貯めだした

「うそ・・・」

「アレは・・・」

二人は信じられないものを見ている表情だった、それもそのはず

「お返しだよ？デイベインバスター！」

先ほどののが打ったものと同じ砲撃を打ってきたのであった

「フェイトちゃん！」

「なのは！」

二人はお互いプロテクションを張り防御をした、防御は相乗効果で硬いがその余波で周りが崩壊していく

「それ！」

七星がより一層魔力をこめると砲撃は太さを増しなのは達を更に覆うほどになりあたり一面に余波がまっていた

『キュイイイイイン』

その余波でジュエルシールドが暴走を始めてしまった

「くっ！」

フェイトは暴走するジュエルシールドを手で掴みその暴走を抑えたがその場で倒れてしまう

「フェイトちゃん！」

「あっちゃ・・・」

二人が駆け寄りフェイトを見るとその手はボロボロで痛々しいほど

の傷があつた

「ど、どうしよう・・・」

「私が直してあげる」

そして七星は回復の魔法を使いフェイトの手を直した

「今回は私が調子に乗っちゃったからそのジュエルシールドは貴方たちにあげるわ」

そう言つて七星は帰つていった・・・お仕置きが待つてゐることも露知らず

End

くすずかの活躍く

【竜巻イベント編】

現在フェイトは残りの6個のジュエルシールドを手に入れようと海までやってきていた、すると其処に3人の姿が現れた

「貴方は・・・永劫」

「こんにちわ、最後のジュエルシールドですか・・・無理やり覚醒させて取ろうとするには貴方には荷が重いのでは？」

紅那岐はフェイトのこれからの行動を予測していたので釘をさした

「貴方はいつも・・・」

フェイトは永劫の態度に何かしらの憤りを感じたのか静かに怒っていた

「さて、此方は戦力が少し余裕がありますのでここは私達が覚醒してあげますよ」

紅那岐がそういうと七星に視線を向ける

「星？ 今度失敗するようなことがあれば分かっていますよね？」

「ひい！？ はい！」

七星は小さな悲鳴を上げながら返事をした。

「じゃあ・・・行きます！」

そう言って七星はフェイトが使うつもりだった儀式魔法を使いジュエルシードを暴走させた

「うそ・・・これって私の」

フェイトが驚いてる間になのはが到着した

「フェイトちゃん！」

そしてなのはが着たことにより封印作業が始まった

「サンダー・・・レイジ！」

「ディバイン・・・バスター！」

二人が最大の攻撃を行い陳情かしようとしたが・・・

「「え？」」

七星の魔力が高かったのかあと少しが足りなかったようで竜巻の威力が衰えてる程度だった

「これは・・・月^{ムーン}? 貴方が手伝ってあげてください」

紅那岐がすずかに指示を出した

「わかったわ・・・ルナティック！」

するとすずかがつけている腕輪が光、右手には巨大な爪があった
(簡単に言えば紅蓮可翔式の徹甲砲撃右腕部と同じと思ってください)

「行くよ! HFインパクト！」

すずかの手のひらから広範囲への魔力派の攻撃を行うと弱まっていたのも含めてあっさりと蒸発した

「相変わらずの威力ですね」

「人間に当たったら溶けるんじゃない？」

そう言って二人は若干引いていた

「ひどいよ!」

さすががツツコミを入れるが周りを見てみると竜巻を発生していた海は湯気を出していた

「・・・・」

なのは達は今の魔法と言葉を聞いて哑然とした

「さて、今回は協力したということで2個だけ頂いていきますね?」

そう言って紅那岐達は封印され浮いていた6個のうち2個をもらい帰って行った

End

Ex 1 (後書き)

レティ「すずかの技をネタに走ろうか純粹に迷いました！」

紅那岐「第一声がそれか？」

レティ「いやあ・・・手のひらからの攻撃っしょ？サイキック・ウエエエエイブってやろうか悩んだ結果がアレでした」

紅那岐「まあ、いいんじゃないか？」

レティ「次は紅那岐の過去！」

紅那岐「あまり思い出したくないけどな」

レティ「畏無さん・時空の旅人さん感想ありがとうございます」

紅那岐「では次回で！」

E x 2 (前書き)

過去話というより出生の秘密です

会話がほとんどです

Ex 2

紅那岐 Side

JS事件（実際は事件としては登録されてないけどな）が終わって少したった後、俺はツールに呼び出されある一室で漫画を読まされていた

「・・・」

「感想はどう？」

俺が読み終わり考えているところにツールは入ってきた

「感想というかなんと言うか・・・」

「混乱するのも無理は無いわね」

混乱か、確かに混乱してるわな

「ていうか、これはなんだ？ツールか誰かが書いたのか？」

「そんな事するわけじゃないじゃない、それはれっきとした漫画よ？貴方の世界には無かったかもしれないけれどね」

ツールが言うが俺はこれ以上無いくらい否定したかった

「なぜ俺の父親が漫画に出てくる!？」

「違うわ、貴方のお父さんがそれを参考にしてるのよ!」

トールが言った言葉に俺はある疑問が浮かんた

「・・・転生者?」

「正解よ」

「馬鹿な!？」

俺は力の限り叫んだ

「っゝ、うるさいわね」

「す、すまん」

俺はトールの言葉に我に返り改めて質問した

「で、父さんが転生者ってのは本当か?正直俺の世界はリリなの
世界見たく魔法やこの漫画のような世界ではなかったはずだぞ?」

「それはこれから一から説明してあげるわ。貴方の理不尽までの戦
闘力を込みでね」

そう言ってトールは説明を始めた

S i d e E n d

三人称 S i d e

「じゃあ、説明するわよ？まず貴方のお父さんについてね」

トールが説明を始めた

「貴方が読んだその漫画―ゲットバック―に出てきた赤屍蔵人の能力を持って転生した人物よ」

「理由は簡単、転生前に血が原因で死んでしまいその理由により血の能力を持って転生することを望んだわ」

「ちょっと待て、その理由は分かったがなぜ戦いの無い否、力自体が必要の無い世界に飛んだんだ？」

紅那岐がトールの説明を途中で区切り問いただした

「それはね、貴方の世界自体は基本的には力……を必要とする事はないわ、でもね裏の世界ではそれが通っていたのは貴方が一番知ってるでしょう？」

「それはそうだが……」

「話を続けるわよ？まあそれで転生をし力を持ちながら普通とは少し違うかも知れないけれど、一般的には幸せに生きていたのよ」

「そして貴方の母親と出会い貴方は生まれたわ」

トールは一旦区切り紅那岐を見る

「そうだったのか……それじゃあ母さんも？あれも大概化け物だったんだが？」

紅那岐はツールに質問する

「いえ、貴方のお母さんは普通の人間よ？」

「・・・は？」

紅那岐はとても間抜けな顔をして呆けてしまった

「たまにいろのよ世界に選ばれたイレギュラーって」

ツールはあきれながら言う

「うえきの法則って知ってるかしら？アレで才って表現でいろいろあったけど貴方の母親は「あらゆる武術の才」と「戦闘の達人の才」を持っていたわ、だからアレは天然のチートよ」

「・・・なんと言うか、あれだな？化け物のハイブリットの俺は化け物になったということか」

「そういうことね、貴方が受け継いだのは「あらゆる武術の才」と「超越者の戦闘能力」の二つよ」

「なるほど・・・だから俺には父さん見たく血を使った攻撃はできないのか」

「それもあるけど、一番の理由は貴方が自身の名字を嫌い赤羽性を名乗ってるの一旦かしらね？」

「・・・」

「まあいいわ、それで貴方の死因を説明するわ。簡単よ？寿命ってだけだったから」

「・・・は？」

「貴方も気づいていたんじゃないくて？幾ら武術の才と戦闘能力を引き継いでもそれはあくまで補正がある人間、貴方の体は補正が無かったからその力に体を壊されてしまったのよ」

「ハードがソフトに追いつかなかったって事か」

「正確にはハードがソフトによって壊されたってところね」

「なるほど・・・」

「気づいてる？今貴方は転生というかトリッパーねそのおかげで体を壊されること無く成長を続けられるわ」

「なるほどね・・・最後の戦いで自身の性を言ってから攻撃をしたら想像以上の威力が出たのは？」

「アレは宝具と同じような真名開放ね、自身の力が一瞬とは言え超越者として力が宿り力が解放されたのよ、因みにあの時無理やりの開放だったから60%くらいの出力だけだね」

トールの説明を聞いて紅那岐は再び呆氣に取られてしまった

「因みに貴方の具現化の力は貴方の父親の力の一端が出てきたためよ」

「なるほど、やけにリアルに作れるのはそのおかげか」

「そ、因みに魔力を消費すれば貴方の父親と同じとはできるわ」

トールが言うと急に紅那岐の顔が青くなった

「・・・やめてくれ父さん！隙間の無い攻撃をどうやって防げって言うんだ！母さんも黙ってみてないで止めてくれ、やめてくれえええええ！」

急につぶやいて大声を上げたかと思うとぶるぶると振るえ出したのであった

「（ええわ）・・・そこで震えてないで続きいいかしら？」

「ああ・・・」

気力ない紅那岐を恍惚した表情で見ながらトールは続けた

「超越者としてほぼ不死身といっていい能力は無いけど、戦いにおいて貴方の力自身で負けないと思わない限り貴方は負けないって所は出ているからこれからの戦いは有利に運ぶはずよ？」

「あ、ああ」

今だ青い顔をしながら返事をする紅那岐

「それと、貴方の力を7段階のリミッターで出力調整できるようにしたわ、やる気のスキルつけてれば大丈夫かな？って思ったけど意

味無かったからね。」

「戦いが無かったころは出力でなくて楽だったんだが、転生者と戦ってからダメになったな、スイッチが入っちゃおう」

「でしょ？だから貴方の任意で外せるようにしたわ、それにノートウングも7段階目を開放したら使えるようになってるわ、封印しても無理やり使ってしまうものですし」

「いいのか？」

「ダメって言うっても使ってしまうでしょ？だったら貴方の好きにするといいわ」

「すまん」

紅那岐が礼を言って自身の能力の確認をしながらふと気づいたことを聞いた

「そういえば転生者たちのことについて聞きたいんだが？」

「それについては時期がきたら話すわ」

「わかった・・・」

そう言っで一応の納得を見せた紅那岐を見てツールは言った

「まあこれから貴方が手に入れる能力は貴方の好きにすればいいわ、能力を保管するもよし、違う能力も良し、話は以上よ」

「分かった、サンキューな」

紅那岐が礼をトールに言った

「じゃあ近いうちに会うと思うけどまたね」

そう言っていると紅那岐の足元に穴が開きテンプレのごとく落ちていった

E x 2 (後書き)

レティ「これが紅那岐の出生です」

紅那岐「過去というより俺の力についてだったな」

レティ「まあお前の強さについて話したかったただけだしね」

紅那岐「あいよ・・・それにしてもトラウマを思い出した」

レティ「まあそれで生きてるからいいじゃん☆」

紅那岐「やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて・・・」

レティ「壊れたか・・・それでは次回に！」

1万アクセス御礼（前書き）

1万アクセスありがとうございます

1万アクセス御礼

レティ「1万アクセスまことにありがとうございます！」

紅那岐「ただの駄文がここまで行くとは思わなかった」

レティ「10人くらいに読んで貰えば程度で書いていたしね」

紅那岐「では、早速本題に入ろうと思います」

レティ「本題は・・・ずばり新キャラ！」

紅那岐「扱いきれるのかよ？」

レティ「わからん・・・ただ作りただけだ！」

紅那岐「で、ここでやる意味は？」

レティ「実は読者様に協力をしてアンケートをと思ってな」

紅那岐「ほう・・・」

レティ「ずばり新キャラに対してどれが必要高いか分からないから、決めて貰おうかと」

紅那岐「それで、決めて貰う内容は？」

レティ「発表します・・・」

○容姿…普通・妖艶・ロリ・シヨタ・その他（希望のを書いて欲しいです）

○能力…普通・妖艶Ⅱドラクエ・FF・テイルズの魔法のどれか
ロリ・シヨタⅡ模倣（見ただけで相手の能力を使える）　その他は希望の能力をつけてあげてください

レティ「こんな感じで選んで欲しいです」

紅那岐「なるほど」

レティ「因みに、ロリ・シヨタは2重人格設定あります。その場合は体がどっちがメインか決めてください」

レティ「正確も一応参考程度に」

普通Ⅱ何もかも普通―（どの編が普通か疑問ですが）

妖艶Ⅱ読んで字のごとくかなりエロエロな感じで作りたいと思います
ロリⅡ無垢だけどちよつと小悪魔チック
シヨタⅡ純真無垢でお兄ちゃんといってよってくる

紅那岐「正直シヨタが一番まともで癒しだな」

レティ「んだね、まあ私が扱いきれるかは不安だけどね！」

紅那岐「おいおい・・・まあいいや期限と登場は？」

レティ「期限は約1週間後の9月6日の夜10時まで。登場は特別編で出す予定です」

紅那岐「ではアンケート協力よろしくお願いします！」

プロローグ（前書き）

次の世界＋能力追加です

プロローグ

紅那岐 Side

「トール、いきなり呼び出しとはなんだ？」

「貴方も分かってるんでしょ？」

ジュエルシード事件が終わりのほほんと平日を過ごしていたら、突然トールに呼び出され最初にいた天界？に呼び出されたのだ

「そうか、このままあの世界と思ったんだが」

「紅くんここどこ？」

なぜすすかがいる？

「と言うわけで次の世界はこれよ！」

すすかをスルーしトールが掲げたのは・・・

「恋姫かよ！しかも無印！」

どこを見ようが女ばっかししか出てこない三国志のゲームの恋姫――（無印）だった

「行く必要あるのか？あれ最終的にハーレムルート行けば何も起らないだろう？」

「それがね、時系列の違いはあるんだけど、白い軍団いるじゃない？アレがほとんど転生者（トリッパー）集団になっていてね、貴方にはその駆逐をお願いしたいのよ」

「行くのは最後の方か？」

「いえ、不自然にならないように最初の方ね」

最初の方となるといろいろあるが一番は・・・

「すずか元の世界へ帰れ」

「え？どうして？」

「この世界では常日頃から人殺しが蔓延る世界だからな、連れて行きたくない」

あの世界は正直血なまぐさすぎる、七星はいざとなれば戻せばいいがすずかはどうもできないしな

「イヤ！私もついていく！」

くそ、一度言い出したら基本的にはこいつ頑固だからこれ以上言っても聞かないな

「はぁ・・・じゃあ約束しろ戦いは絶対に参加しないって・・・ガキだから外されるか？」

「・・・？分かった約束するよ！」

そう言って俺はさすがと一緒に来るのを了承した

「さて、次は貴方の欲しい能力は？」

「・・・いろいろ考えたが防御ができないなら死なないを念頭に置いた戦いをしたいから決まったよ」

「何かしら」

「ダ・カーポの能力くれ」

「桜の？」

「どっちも桜だぞ？」

「そっか・・・えと、うんと、お菓子とかのほう？」

「わざとボケてるのか？」

「ごめんなさい・・・」

そう言ってツールは謝って俺に能力をくれたようだ

「制限は・・・無い！？何で！？」

制限があるか調べたらしくそしたら無かったようだ

「・・・誰も欲しがらないから最終的に制限項目破棄されたみたいね」

「なんとも言えんな・・・」

俺は苦笑いするしかできなかった

「さて、次の世界も頼むわね？逝ってらっしゃい」

そう言って足元に穴が開き俺達は落ちていった

プロローグ（後書き）

レティ「終了・・・月たん（＊、＼＊）ハアハア」

紅那岐「変態だな」

レティ「なんともいえ！」

紅那岐「さて、次は恋姫どうなることやら・・・てか話覚えてるのか？」

レティ「実際にプレイしながらやろうかと」

紅那岐「マジでその場限りの勢いだな」

レティ「なんとも言って・・・では次回で！」

Ep 1 (前書き)

恋姫は正味戦闘描写すくないかも・・・

Ep 1

紅那岐 Side

「鉄を打ちましょ〜・〜・とんとんとん〜♪」

俺は今何をやってるかって？台詞を見れば分かると思うが鉄を打つ
武器作りをやってるんだ

「おう！今日も精が出るな紅那岐」

「あ！親方おつかれ〜」

親方（40台黒色の厳ついおっちゃん）が入ってきた

「・・・お前のその敬ってるんだか敬ってないんだかの言い方何と
かできないのか？」

「敬ってますよ、俺が本当に敬語だけだと・・・お疲れ様です親
方・・・ってな具合になりますか？」

「・・・気持ち悪いな」

「でしょ？」

実はこの世界きたはいいけど、最初の方で一刀とは全く関係ないところ
に落とされたのだ。

仕方なしに歩き回り流石にそろそろ野宿とかきつくね？となったの
で町に入っただけだが、子供が3人・・・どうがんばっても普通に

ややって行けないとなりどうしようか？と悩んでいたらこの親方に拾われたのだ

でだ、すずかと七星はどうしたって？あいつらなら・・・

「紅くん！」「お兄ちゃん！」

ほら来た

「二人でお饅頭作ってみたんだ」

「食べて感想教えて」

女将さん（親方の奥さん30台でもものすごい美人）と一緒に飯を作ったりしてるよ

「頂くよ」

「俺は？」

「「親方は後で！」」

泣くな親方その顔の泣き顔は正直つらい・・・と考えながら二人が作ってきた肉まんを食う

「「で、どうかな？」」

「30点」

おお、二人が眼に見えて落ち込んでる

「理由は簡単、生地が足りないから回りの部分がごわごわしてる、それ以外は味付けも何もかもいいぞ」

「分かった！」

「次こそは！」

二人は気合を入れている、うんガンバレ

「黄巾の乱が終わったってえのにまた戦が始まろうってのかい」

と、唐突に親方が厳つい顔シテ渋い顔をした・・・その顔でやると怖いだけだよ親方

「・・・失礼なこと考えてねえか？」

「気のせいです！（キリ）」

実際は考えてるけどね

でだ、最近ここの領主になったのが一刀なのだ、ご都合主義だねえ・
・
話がそれだが、そろそろ反董卓連合が結成されて諸侯が集まる時期になってきた、ここを逃すとおそらく一刀とのかかわりが持ちつらくなるのでさっさと何かしらの方法で着いて行かんと

「ごめん！」

「ちょっといいかな？」

と考えてると入り口に黒い長髪の女と明らかに場違いな服を着た男がやってきた・・・ってありゃ

「へいらっしやい！って領主様じゃねえか、俺の店に一体どういう具合で？」

「実はもう少ししたら戦がまた始まるのでね、それで今武器をと思っ
って」

ふむ、やはりそんなことか

「へい、しかし何時もは兵隊さんが来るのに今日に限って何で領主様が？」

「いや、兵士達の武器は何か間に合ってるんだが、俺の武器が欲しくてね。って事でこの店の評判がいいから来てみたんだ」

うむ、親方は顔は厳ついが仕事自体は凄いからな噂になってもしょうがない

「・・・また変なこと考えてなかったか？」

「考えてたけど？（何のことです？（キリ）」

「・・・本音と建前が逆になってるぞおめえ」

いっけね☆・・・わざとだけどね

「そちらはご子息で？」

関羽が聞いてきた

「いえ、数ヶ月前にこの辺をうろついてたガキ共3人組を面倒みるだけでさあ」

「一刀様、武器が欲しいと言われるならこれはいかがですか？」

俺はそう言って一刀にこの前打ち終わった日本刀を見せる

「こ、これは!？」

「どうしたのですご主人様!？」

流石に驚くか、いかんせん自分の世界の武器だからな、中国（三国志）の武器は無骨で切るより叩く感じの剣が主流だし

「君、どうしてこの刀を？」

一刀が聞いてきた

「いえ、単純に俺がいたところの武器ですよ」

「なんだって!」

おー驚いてる

「じゃあ、君は・・・」

何かを言う前に近づき耳打ちする

※以下内緒話

「そ、俺はあんたと同じようにこの世界に来た住人だよ」

「俺以外にも同じような人がいたんだな・・・」

「ま、俺はアンタと違う世界から来たんだが、それはまた別でいいでしょ」

「ああ、それでこの内緒話って」

「そうそう、俺もこの後の流れって気になるからついて行かせてくんね？」

「君は子供だろ？そんなところについていかせるわけには・・・」

「張飛や諸葛亮だって同じモンっしょ、それに同じ用な人間ほつくの？」

「・・・分かったいいよ」

「サンキュー」

※終了

で一刀は結局刀を購入し、関羽に告げる

「愛紗、この子も連れて行こうと思うんだ。どうやら俺と同じ世界出身らしい」

「なっ！？まだ子供ではないですか」

関羽が反対する、そりゃそうだな

「失礼ながら関羽様こう見えても私も武芸をたしなんでいます、まあ前線に立つつもりはありませんが、一つ私と手合わせ願えませんか？もしダメならお城で待っていることを約束しましょう」

そう言って俺は関羽と手合わせすることが決まった

Ep 1 (後書き)

レティ「終了！意外な才能が開花！？」

紅那岐「鍛冶面白いな・・・いろいろ作ったが、これが秀逸だった」

レティ「それは？」

紅那岐「魔力こめながら作った護りの小太刀・・・説明書上げる」

レティ「ありがと・・・これ本当に作れたんか？」

紅那岐「んだ、ビックリしたわ」

レティ「そか、まあいいや・・・」

紅那岐「時空の旅人様・畏無様・秋代様感想ありがとうございます」

レティ「次回もまた！」

※護りの小太刀

災厄を防いでくれるお守りとしての効果がある

災厄の反応度は持ち主にとって災厄と思われる部分に反応する

EP 2 (前書き)

ちなみに恋姫無印編は私が使いたいキャラを使うためだけに入れたのでそれ以外は結構不遇かもしれません

Ep 2

関羽 Side

今私は目の前の少年と戦うと言うことで鍛錬場に来ている。私以外にはご主人様と鈴々と朱里がいるくらいだ

「さてと、武器は何にするかな？」

少年は現在丸腰でまるで遊ぶ感覚でいる、なぜご主人様はこんな少年達を連れて行こうとしているんだ？

「・・・アレでいっか、おーい七星く其処の一番長い奴とってく」

七星と呼ばれた少女がいろいろと持ってきたうちの一つで大体3メートル（※当時の言い方分かりません）のものを取ろうとしていた

「・・・お兄ちゃんこれすごく重くてもてないんだけど」

「ありゃ？ んじゃ、すずか取って」

「はーい」

すずかという少女が難なく持ち上げて少年の方にそれを放った

ポイ・・・ヒューン、ズドン！

何かおかしな音が聞こえてるような・・・

「サンキュ」

少年はたまにご主人様が言う感謝の言葉を言いながら近くに突き刺さったそれを持ち上げて風呂敷を取った

「な、なんだその槍は!？」

「これですか？ 竜を倒した後の素材で作った武器ですが？」

少年は難なく言うがなんと云った？ 竜を倒したと言わなかったか？
少年の持つ槍は禍々しさと神々しさが共存したような槍だった

Side End

紅那岐 Side

なんか関羽驚いてるな・・・何だいたい？

※竜は基本倒せる存在ではありません BY 作者

変な電波きたが気にすることは無いな

「さて、関羽殿これから戦う貴女へ一言」

「なんだ・・・」

何をそんなに警戒してるんだ？ 豪竜胆を取り出してから相手の態度がスゲー変になってるんだが？

「あまり嘗めないでくださいね？ 一瞬で終わりますよ」

そう言って俺は槍を構えた

「さて、一刀合図ヨロ」

「あ、ああ・・・それでは始め！」

そして俺は合図と同時に関羽に接近した

Side End

三人称 Side

合図が始まると紅那岐は槍を持ちながら関羽に接近をしていた、しかし英雄もさることながら紅那岐が光速で接近するのを気配で感じ取ったのか瞬間的に偃月刀を振るい紅那岐を切ろうとしたしかし、その後一刀・鈴々・朱里は信じられない光景を目にした

「だから、嘗めるなっていたでしょーが」

紅那岐が咄くと関羽の攻撃を思いっきり跳ね上げ懷に接近をしそして

「リミッター4リリース」ボソ

「ホワタアアアア」

何かを咄やきその後某ケン○ロウよろしくな声を出しながら思いっきりデコピンをしたのであった

ドゴン！

デコピンではありえない音を出しながら関羽は頭を打ちぬかれその場で崩れ落ちた（首が思いつきり後ろへ沿ったのは言うに及ばず）

「おゝわり」

紅那岐がそう言って一刀のほうを見る

「はっ！？勝者紅那岐！」

そう言って紅那岐の勝利を宣言した後一刀は関羽の元へと駆けつけたのであった

Side End

紅那岐 Side

すごいな恋姫補正、普通ならいまのって頭打ち抜けるくらいの威力あったんだけど・・・まあ手加減はしたけどねえ

「お兄ちゃん関羽殺す気！？」

「そうだよ、手加減しなきゃダメじゃない！」

そう言ってすすか達に攻められる俺

「手加減したって、てか本気で来ないのが悪い」

言い訳をしながら俺は関羽たちの方へ近づいていった

「さてと、一刀これで俺が同行するのは問題ないな？」

「あ、ああ・・・」

呆けてるなよ、主なら背筋伸ばせって

「関羽に関して言えばその内目を覚ますはずだからほっときやいい、てか脳震盪に近いからあまり動かさない方がいいぞ？」

そう言って俺は改めて一刀たちに向き直る

「さて、改めて自己紹介をしよう。俺の名前は赤羽 紅那岐だ紅那岐が真名みたいなんだが好きに呼んでくれ」

「その妹の七星だよ！私もよろしくね☆」

「月村すずかです、よろしくお願いします」

そう言って俺達は一刀達に挨拶をした

S i d e E n d

一刀 S i d e

あの騒動が終わり俺達は今反董卓連合のために集合場所に向かって
いた。それにしても愛紗をデコピン一発で倒せるあいつって一体・

・
「ご主人様よろしいのですか本当にあんな子供を連れて行って」

「しかたないだろう？愛紗は負けちゃったし、約束は約束だし・・・
何より俺と同じようにこの世界に来たって話だしな」

「うっ・・・それは」

愛紗は負けたって所で言葉を失って後のほうを聞きそびれたみたいだ、それは兎も角紅那岐達はというと・・・

「はっはーいいぞ！碎刃」

「お兄ちゃん揺らさないで！」

「紅くんお願いだから普通に乗ってよ！」

馬に乗って遊んでいた・・・体表がなんか赤っぽいけどあれって赤兎馬じゃ・・・

「はうう・・・それにしてもご主人様あの人たちの素性って」

朱里が聞いてきた

「なんか俺とは違うけど天の世界出身らしいよ？服を見れば分かるけどここらへんじゃ見かけないでしょ？」

紅那岐↓赤いジャケットに黒いズボン白いシャツ　すずか↓白いワンピース　七星↓キャミの重ねに下はハーフパンツ

「確かに・・・でもでも」

朱里が何とか言おうとしているのを一刀がさえぎった

「まあまあ、因みに戦いには参加しないって言ってたよ？俺も子供にはさせる気ないけど・・・」

そう言っで一刀は朱里と鈴々を見る

「にゃ？どうしたのだお兄ちゃん？」

「はう、なんか失礼なことを考えられてる気がします」

「そんなことないよ？」

俺はそう言っでこれからのことについて頭を悩ませた

S i d e E n d

紅那岐 S i d e

「うゝむ・・・」

俺は馬にまたがりながら有ることを試していた

「何やってるの？」

「いやなに、この前ツールにもらった能力を試しているんだ」

「確か復元^{ダ・カーポ}する世界だっけ？」

「そ、あれ使いこなせば後2個の能力を発現できるんだけど、それだけじゃつまらないから少し自分用に昇華できないか試してるんだが、なかなか魔力食ってうまくいかないんだよ。リミッター上げすぎると周りが乙るし」

そう言って俺は能力を何とかうまく使おうとがんばった

「「がんばって！」」

二人の応援が適当に聞こえてきたような気がするが気にしないようにしよう

「見えてきましたご主人様！アレが集合場所です」

朱里（真名でいいってさ）が一刀にいつて指をさしていた、確かに大本営があった

「これからどうなることやら」

そう言って俺もそれに続いた

Ep 2 (後書き)

レティ「終了!」

紅那岐「関羽はアレでいいのか?」

レティ「正直蜀はどうでもいいかな? すきなのないし」

紅那岐「まあ、いいけどさ」

レティ「それよりお前竜倒してたのな」

紅那岐「この世界着てさまよってたらなんかいたから倒した」

レティ「てか、豪竜胆って三国無双のじゃん」

紅那岐「んだ、竜の牙使った刃の部分は凄いい切れ味だよ」

レティ「それにしても重そうな音してたな」

紅那岐「なんか知らんが20kg以上あるんだよね? 柄の部分も骨とか使ったからそれが聞いているかも」

レティ「あっそ・・・では、秋代様・時空の旅人様感想ありがとうございます
ございます」

紅那岐「秋代様に対しては正直ネタを使わせてもらいました。お礼に竜の素材で作ったこの七星帯をカスミさんにプレゼント!」

レティ「お前武器作り以外にもそんなものまで・・・」

紅那岐「いやあ、やってみると面白いよ？体力無限に近いから夜中とかに音が響かないこれをよく作ってる」

レティ「あっそ・・・では次回で！」

※七星帯

幸運のお守り

いいことがあると壊れるが使わないで置いとけば運が上がるかもしれない

EP 3 (前書き)

キャラ崩壊？見逃してください

Ep 3

三人称 Side

「おーっほっほっほ♪」

今場はドリルのウザさが際立っていた

「・・・一刀帰っていいか？」

「いや、だってお前が参加するって言ってきたんだろ？」

「いや、まさかドリルがここまでウザいとは思わなかったんだもん」

そう言ってゲンナリしている紅那岐だったが、周りも凄い冷えた視線であった

「さて、本題に入りましょう」

そう言ってドリルこと袁紹が本題に移ろうとしていた（ここまで来るのに1時間）

「さて、本題とは董卓さん・・・（割愛）」

董卓を使って自身の名を上げようとしていて其処にミニドリルこと曹操がちゃちゃを入れて喧嘩が始まった

「くだらねえ・・・ドリルたちだ」

紅那岐がボソリと呟いた言葉がドリルズ（紅那岐命名）に聞こえたらしくピタっと言い争いが止まった

「其処のガキ今なんていいましたの？」

「何か私を侮辱した言葉が聞こえてきたのだけど？」

ドリルズが紅那岐を睨みつけ問いただしてきた

「何、髪が綺麗だなんて言っただけですよ」ニコ

紅那岐はしれっと嘘を吐きながら笑顔で対応した

「あーらしい事を言う子じゃないのおーっほっほっほ♪」

「フフ、なら良いわ」

二人は満足そうに頷き、袁紹は先ほどの話に戻した

「さて、この連合に足りないものがございますわ」

神妙な顔をして言う袁紹に対し、一刀や公孫賛などは何事かと思い袁紹の言葉を待つ

「それは・・・統率者ですわ！」

紅那岐は答えを知っていたのでノーリアクションで、一刀などは何？みたいな顔をしていた

そして袁紹は統率者は自分がふさわしいと遠まわしに言っておりみんなに言わせようとしていた

因みに・・・

「バカバカしい」曹操

「アホくさ」公孫賛

「くだらねえ・・・」紅那岐

「・・・」孫権

が主な反応だった、他の諸侯は袁紹が怖いのか何もいえずにいた

（ゲームと違ってホントいろんなのいるな、当然かこれもリアルの一つだから）

が紅那岐の率直な意見であった

最終的に好きに動くよ？が暗黙での了承で終わったのだ
因みに最後のやり取りにはこんなのがあった

「おーっほっほっほ♪」

と高笑いしているドリルに対し紅那岐が

「（イラ）・・・」ヒュン

何かをドリルに投げた

「おーっほっほっ・・・ゴフォ！ゲフォ、ガフォ・・・ゲファ」

と思いつきりむせたのであった
紅那岐はほくそ笑みながら、他の物は笑ったり、笑うのを我慢しながら自分の陣営に帰っていった

Side End

一刀 Side

結局部署とか後で連絡って形になったし、間者も朱里の話じゃ帰ってきてないって話し出し・・・それより

「紅那岐最後なにかやったろ？」

「知らんよ俺は」

この子供は・・・てか性格変わりすぎだろ

「お帰りなさいませ」

愛紗と鈴々が出迎えてくれた

「ただいま」

そして愛紗がどうなったかを聞いてきたので事のあらましを伝えたら怒り出した

「なっ！？ふざけてるですか！」

と俺に言われてもな」

「一刀に起こるなよ、従者失格だぜ？」

紅那岐が横からちゃちゃを入れてきた

「くっ・・・すいませんご主人様」

愛紗が謝ってくるけど

「気にしなくても良いよ愛紗、それと紅那岐あまり愛紗をからかってやるなよ」

「だが断る！一刀と関羽をからかうのは面白いからな！」

このガキがしれっと言い放ちやがったよ

「失礼する！」

愛紗と紅那岐が言い争い（愛紗が一方的に切れてそれを紅那岐がからかう）をしてる時一人の人が声をかけてきた

S i d e E n d

紅那岐 S i d e

関羽をからかったら夏侯惇とかがやってきた
そしてなんか愛紗を口説きだした

「おうあのドリルっこ関羽をくどいてらあ、流石百合っ子！」

「紅くん百合って？」

いつの間にかいたすずかが聞いてきた

「その内わかんじゃね？俺から説明する気はないよ」

「すずかちゃんそれはね・・・」

これまたいつのまにかいた七星がすずかを連れて行き説明していた・
・デバイスだから情報多いのか？

「貴様！華琳様に向かってその口の利き方はなんだ！」

おっとバカが突っかかってきた

「あら？あなたはさっきいた」

「あゝそこにいる天の御使いの従者って思ってくれてかまわんよ」

そう言って俺は適当に返事をする

「貴様！」

そう言って夏侯惇はその手に武器を持とうとしていた・・・どこに
しまっていたんだ？

「おっと、抜くなよ？抜いたらお前の主が評価ががた落ちするし、
抜いたら俺はお前を殺さなければならん」

そう言って俺は殺気を出し夏侯惇を制する

「なっ！？こんな子供にこれほどの殺気だと！」

夏侯惇は驚いているようだ、まあ今出せる程度の殺気じゃ動きを止めるまではいかんか

「春蘭やめなさい！この子の言う通りよ！」

そう言って曹操は夏侯惇を止める

「私の部下が失礼したわね・・・貴方が天の御使いじゃないのが残念ね」

そう言って非礼をわびながら一刀を貶めていた

「貴様！」

今度は関羽が抜こうとしていた

「戯け関羽！先ほどの話は此方も同じことだ！」

「く・・・」

悔しそうに武器を収めたのを見て俺は再び曹操に向き直る

「よしてくれ俺は人を導いたりする存在じゃない。さ、悪いがとつととお帰り願える？」

そう言って俺は曹操の退場をお願いしてそのまま帰らせた

その後馬超が来たりしていざ出陣となった
因みに俺は最低限前に出るということになった・・・どうやらあの
殺気を出したのがいけなかったのか関羽が無理やり出ろっていつて
きた・・・めんどくせえ

そして今は一撃入れた後華雄が引いたのでドリルから追撃命令が出
て今は前に出ているところだ

「おゝやつとるねゝ」

そう言って俺は現在戦が行われてるところの最後尾にいる

「お前は戦いが怖くないのか・・・」

一刀が聞いてくる

「怖くない。てか一刀そんなことを思うなら今すぐこの場で死ねば
？戦ってる奴らに失礼だ」

「お前は一体・・・」

一刀が信じられないって視線を送ってくるが俺はシカトする、作戦
がどうやら最終段階にいったようだ

「ご主人様！・・・どうしたんですか？」

朱里が駆け寄ってき一刀に報告をしようとしたときに落ち込んでる
顔をしていたのでビックリしたようだ

「ほっとけ、それより策は最終段階に以降か？　だったら下がるぞ！　こんなところでぐずぐずしている暇はない！」

そういう俺は一刀を叱咤し作戦を実らせるため下がる

そして、愛紗は殿を勤め華雄と一騎打ちしていた

「殺ったどおおおおお！」

その後に聞こえてきた関羽の声に俺と一刀のツツコミは重なった

「「待て！　それはよ○この浜○だ！」」

なぜそれを知ってるんだ・・・

そして俺達は？　水関を占領し大本営を設置しその場所に向かっていったのである

Ep 3 (後書き)

紅那岐 「関羽はアレでいいのか？」

レティ 「きにしない」

紅那岐 「まあいっか・・・では、時空の旅人様・畏無様・秋代様感想ありがとうございます」

レティ 「時空の旅人様より劣化版覇煌刃をもらいました、その内本編で使おうと思いますのでお楽しみに！」

紅那岐 「次に漸くあの子が出てくれる・・・」

レティ 「私が一番好きなキャラが出てきます！お楽しみに！」

EP 4 (前書き)

長くなりそうになったので半分に切りました

Ep 4

三人称 Side

「よしこのまま後ろに向かって全身なのだー」

鈴々こと張飛の号令のもと北郷軍は虎牢関に突撃した後引いて曹操・孫権両軍に押し付ける形にした

「ご主人様！曹操・孫権の両軍動き出しました！作戦成功です」

朱里の報告の元ふたたび関羽・張飛は追撃してきた董卓軍に突撃をしていた

「・・・くるか？」

そんな作戦など関係ないといわんばかりに紅那岐はまるで待ち人を待っているかのような表情をしていた

「いい形になってきたかな？」

一刀が現在の状況を判断し、ポツリと呟いた。それに朱里は肯定をしている

「城門にはご主人様も一緒に来てもらいます」

朱里の考えで一刀も城門を突破し風評を得るという話がまとまった

そして今城門を突破し制圧をしようとしているのは他ならぬ北郷軍であった

「押せー！後一押しで敵は崩れる！押し込めー！」

関羽の声を聞いて兵士ががんばるが敵がさるものなかなか押し込めずにいたらその時に凶報が入った

「ほ、報告します、現在目の前にりよ、呂布が現れ、たった一人で死体の山を築いています！」

「なら私が止める！」

そう言って関羽はすぐさま呂布のほうへと走っていった

「鈴々！愛紗を一人で戦わせるな！」

「合点なのだ！」

一刀は張飛に指示を出し関羽を追わせた。その横で紅那岐はまるで嬉しいことがあったかのような表情をしていた

「みなさん、愛紗さんが抑えてるうちに早く制圧を！」

朱里が兵士達を鼓舞し制圧スピードを上げるよう指示を出していると突然紅那岐が一刀に言った

「一刀、関羽達を下げさせてくる。というか俺が呂布と戦ってくる」

「なっ！？お前幾らなんでも無茶だ！」

紅那岐はそれだけ言うと走り出し呂布のほうへと向かっていったのであった

Side End

関羽 Side

ヒュン！ガキン！

「くっ、強い・・・」

「にゃ！？」

私と鈴々が相手に呂布は息すら乱さず戦っている

「・・・お前ら弱い」

呂布が私達を貶めてくる、しかしここは引けん！ご主人様のためにも

「うりやあああああ！」

私は渾身の一撃を放ち呂布に迫ったが呂布はそれがどうしたと言わんばかりに軽く返してきた

「・・・ふんっ」

「ぐあ！」

私は何とか耐えるがそれでもきついのは変わらない

「ふ・・・どうした？来ないのか、だったら」

そう言って呂布が槍を構えたとき後方からものすごい殺氣が私達のほうへと向かってきた

「「！？」」」

私達はおろかあの呂布でさえ一瞬動きを止めてしまった、殺氣の方向へと目を向けるとそこには

「はっはー！俺参上！」

紅那岐がどういうわけかものすごい殺氣を出しながらも気分は高揚してるのか言動が一致しないまま私達のほうへと来た

Side End

紅那岐 Side

「俺、参上！」

電王よろしくとばかりな登場をした俺は関羽達に向き直る

「あー、関羽？ 今一刀がスゲー危ないから行ってやりー呂布は俺が相手すっから」

俺ははよ行けといわんばかりにシッシと関羽達にやっていた

「なっ！？ 貴様！」

関羽には悪いが今のこいつではどうがんばっても呂布には勝てん、てかこいつの補正すげえな強さがビンビン伝わってくる

「いいから行けって、俺は死なんし呂布相手が勤まるのは現状俺くらいだけだからな」

そう言って関羽達を睨む

「く、分かった・・・必ず生き残れよ！」

「気をつけるのだ！」

そう言って関羽と張飛は一刀の元へと戻っていった

「すまん、呂奉先」

そして俺は龍騎尖を肩に担ぎながら呂布に向き直る

「・・・なんだお前は」

呂布は先ほどまでの関羽達との戦いの時とは変わった表情？（武人

の顔だが表情変化が乏しいからわかりづらい）で俺に聞いてきた

「俺は赤羽 紅那岐・・・まあ紅那岐が真名見たいな物だが気にするな。いざ尋常に勝負といこうじゃないか」

俺はそう言って龍騎尖を構える

「・・・お前強い、本気で行く」

そう言って呂布も獲物を構えなおした

「そりゃ重畳、では勝負！」

そう言って俺と呂布は互いに飛び出した

S i d e E n d

Ep 4 (後書き)

レティ「長くなりそうだから一旦きって直ぐ投稿します」

紅那岐「時空の旅人様・畏無様、感想ありがとうございます」

レティ「旅人様には鞘を畏無様からは鬼菩薩を頂きました」

紅那岐「いずれ使うと思うのお楽しみに！」

Ep 5 (前書き)

連続投稿です

レティ「ここで紅那岐が今使っている武器の紹介を」

紅那岐「これは龍騎尖で豪竜胆と同じように竜の素材を使っている武器だ、違いはこれは短く180cmあるか無いかだね」

レティ「では、本編をどうぞ！」

Ep 5

三人称 Side

キン！ガキン！・・・グオン！ガキン！

其処にいる両軍の兵士達は信じられない表情をしていた
其処で戦っているのは天下に名をはせた最強の武神呂布とまだ顔に
幼さを残しており少年が互角の戦いを繰り広げていた

「ハッ！」

「フっ！」

ガキン！

先ほどから両者はその場を動かずお互いの必殺の一撃といって過言
ではないほどの攻撃力持った一撃をお互い放っているのだ

「はっ！呂奉先すごいぞお前は俺はここまでの奴とは戦ったことは
無い！もっと俺の限界を見せてくれ！」

紅那岐は既にリミッターを5つ開放しておりそれでもなお互角に戦
っている呂布を評価しそして己の限界を見るべく呂布に攻撃をして
いた

「くっ・・・お前強い、けど恋も負けない」

ここにきてなお呂布も凄さをまし紅那岐を攻撃している

「くっ！？流石だ呂布！手がしびれてるぞ！」

そう言うが紅那岐は関係なく槍を取り呂布と攻撃を繰り出しあっていた

その余波で周りのものが吹き飛ばされ、周りの者達は近づくに近づけない状態でもあった

Side End

曹操軍 Side

「なんだ、あいつは！？あの呂布と互角だと！？」

そこで見ていたのは片目が眼帯に覆われている夏侯惇であった

「あの呂布と互角に戦い、辺りに衝撃波を出しているとはどちらも化け物だな」

隣にいる夏侯淵もまたお互いの戦いに驚愕していた

「あの、恋と互角に戦ってるあの子供なんやねん？聞いたこと無いわ」

そして先ほど曹操陣営に就いた張遼もまた驚きの声を上げていた

「もう少し見てみたかった気がするがどうやら北郷の本陣が動き出したようだ」

夏侯淵はそう言って告げた

Side End

一刀 Side

「愛紗！鈴々！紅那岐を助ける！協力してくれ」

俺はそういうと先ほど朱里と話決めたことを話した

「納得しかねますが、呂布の強さは異常・・・幾らあいつが強いからって流石にまずいかも知れません」

愛紗がしぶしぶ納得してくれたことで俺は再び指示を出し紅那岐の元へと向かった

Side End

紅那岐 Side

俺は今凄い興奮している、あの呂布がここまで強いとは思わなかった。一瞬でも気を抜けば殺されてしまいそうになるし、何より風舞や雷舞あげくには閃舞を使っても呂布は俺の位置を獣の勘で分かるのか隙をつけず攻撃を繰り返して出しかつてるしかならないからな

「呂布感謝するぞ！ここまで俺と戦える奴は今までいなかったからなあ！」

そう、いないんだよそれに呂布とはあくまで身体能力で戦いたいからこれ以上リミッター開放しても意味が無い

「・・・恋も初めてだ」

そう言って呂布も同じようにすさまじい速度で俺に接近して攻撃してくる

「ふっ！」

その時俺は有るものが視界に入ってきた・・・忘れてた！まさか俺のときでも同じことになるとは！

Side End

一刀 Side

俺は今信じられないものを見ている、あの少年紅那岐が強いとは分かっていた、けどあの動きはなんだ！？人間のそれを超えて愛紗達みたいに戦いをしていた

「ご主人様・・・」

朱里が声をかけてくる

「はっ！？そうだった・・・今だ！」

そう言って俺達は漁師が使う網を呂布に向かって投げたが信じられないものを見た

Side End

三人称 Side

「戦いのジャマするんじゃないやねえええええ！」

紅那岐が呂布の攻撃をお構いなしに自分が持っていた槍を投げ網を吹き飛ばした

「がっはあ・・・」

もちろん紅那岐は無防備な状態での呂布の攻撃を食らい血を出しながら吹き飛んだ

「「「・・・」」」

場には何もいえない空気が漂ってきた

「卑怯者・・・お前らが殺したようなものだ」

呂布が淡々と告げた

「く・・・そんな」

一刀は絶望的な顔をしてそのばでひざをつけた

「何があったの!?」「お兄ちゃん!?」

その場になんとすずかと七星がやってきてしまった

「すまん・・・俺が余計なことをやってしまった」

ひざを突いたまま一刀は七星達に今までの経緯を説明した

「貴様ら・・・死ぬ覚悟はできてるな？」

「紅くんの敵をとらせてもらおうよ？」

七星は今までの明るい雰囲気とは変わりひどく冷たい表情になっており、すずかもまた言い方こそ変わらないがまるで人間ではない雰囲気を出し一刀達を睨む

一刀たちもまたその雰囲気に飲まれてしまい何も言えずガチガチとその殺気に身を震わせてしまっていた

「・・・いつてえな！」

すると其処に信じられない言葉を聞いた、先ほど呂布の攻撃を食らい吹っ飛ばされた紅那岐の声であった
しかも、致命傷だったはずなのだが紅那岐の体は全くといっていいほど傷が無かった

「「「えっ？ええええええええ！？」」「」」

誰もが驚愕した声を出した

「お兄ちゃん！」「紅くん！」

七星とすずかはすぐさま紅那岐に近づいていった

「「大丈夫なの！？」」

「なんとかな」

そう言って紅那岐は二人の頭を撫でた

「今度同じ事があつたらただじゃ置かない覚えとけよ？」

そう言って紅那岐は一刀達を睨んだ後呂布の方へ向かった

「白けちまったな、どうだ呂布？もう情勢は決まった一度俺達の本陣に行かないか？」

「・・・分かった」コクン

呂布もまた分かったのか素直に紅那岐の提案を呑み紅那岐達一同は本陣へと向かっていった

そして今本陣にて洛陽について呂布に聞いているところだった

『で、お兄ちゃんなんで無事なの？』

『そうだよ！すつごく心配したんだよ！』

と念話で七星とすずかが先ほどの紅那岐が無事な理由を聞いてきた
『簡単だ復元ダ・カーポする世界を使ったんだ。アレは24時間以内の事象を戻す効果があるからな、斬られた瞬間元に戻したんだが痛みで一瞬とは言え意識が飛んでしまったんだよ』

と説明をした紅那岐であった

『それにしても、あの呂布さんって凄いね、紅くんと互角だなんて』

『ねー布ーちんって魔法使わないのにあの強さは異常だよ』

そう言って賞賛する二人であった

『待て七星！それは呂布違いだ！しかも言うのはこの陣営じゃねえ！』

とツツコミする紅那岐だが七星は意味が分かってなかった

Side End

紅那岐 Side

さて、呂布から情報を引き出すのを諦めた一刀達が今度は呂布を勧誘しだしたから俺も行くか

「呂布よ、つまらん邪魔が入ったがいい戦いだった。改めて言おう
赤羽 紅那岐だ。紅那岐と読んでくれ」

そう言って俺は手を差し出した

「・・・？」コテン

呂布が分ならず首をかしげたのに対しその様子を見ていた七星たちはよほどの攻撃力だったのか「ぶほっ！」といいその場で鼻を押さ

えた・・・気持ち分かるスゲーかわいい

「握手だ、互いに認めたならこの手を握って欲しい」

「・・・ん」

そう言って呂布は直ぐに手を握ってくれた・・・このやわらかい手でどうやってあの豪撃だしてたんだ？

「恋・・・」

「ん？」

握手をしながら考えていたら呂布がいつてきた

「・・・真名」

「いいのか？」

「・・・（コクッ）」

そう言って俺はそのかわいさのあまり頭に手を置いて撫でてしまっていた

「ありがとう恋、お前の家族は守ってやるよ」

「・・・／／／」

恋は照れくさそうにも笑ってくれた・・・後ろの二人の視線が痛いほど背中に突き刺さってるのは気にしないで置こう

そして俺達は洛陽に向けて出発したのであった

「O☆H A☆N A☆S H I！必要な？」

後ろで凄い不穏当な声が聞こえたのはきつと気のせいだ

Ep 5 (後書き)

レティ「終了！恋つよ！流石私が好きなキャラNO. 1！」

紅那岐「マジでシャレにならん強さだった」

レティ「因みに私補正が入ってるからあんなに強いだけであって、それ以外はもっとよわいはず！」

紅那岐「はぁ・・・竜より強いってオマエな、幾ら身体強化魔法使ってないからってさ」

レティ「じゃあここで改めて紅那岐のリミッターについてお話を」

リミッター自体は開放していけば能力は上がっていくが、体の構成上の問題なのか力などの身体能力は5段階目でストップし後は純粹に魔力が上がっていくだけである

5段階目の時点での能力は

筋力…EX－

魔力…EX＋＋

耐久…B

幸運…C

敏捷…2EX

となっている、リミッターの7番目事態はノートウングの封印だけと考えると問題なし

レティ「こんな感じかな？」

紅那岐「おれ自身魔力攻撃自体が少ないから自分の能力を上げるく

らいしかやらないしな」

レティ「んじゃ、次は洛陽編」

紅那岐「次回もまた！」

EP 6 (前書き)

今日はみんな大好きなあいっぴが出来ます

Ep 6

三人称 Side

紅那岐達は現在洛陽に入り恋の家族のところに来ていた

「これが、お前の家族か」

「・・・（コクッ）」

恋が首を縦に振り家族こと動物達に自愛の眼を向けて安心していた

「・・・さて、恋気づいてるな？」

「・・・うん」

恋が返事をして立ち上がる

「・・・戟を」

恋が唐突に言う

「えっ？」

一刀が恋にいきなり言われて戸惑っている

「敵が来る、準備しておけ」

紅那岐が言い放つと関羽達がいきなり慌てだした、紅那岐は近くの

奴が持っていた恋の武器・方天画戟を受け取り恋に渡した
そして、伝令から少女を保護したら白装束の一団が現れたという報
告がされた・・・巨漢という報告もあったらしいよ？

「さて、漸く俺のいる意味が出てきたな・・・」

紅那岐がポソリと呟いて報告があった場所に向かっていった

Side End

紅那岐 Side

さて、漸く俺がこの世界に來た本当の意味が出てきたな・・・恋と
戦ったのっはガチで戦闘狂とかじゃないけど強い奴と戦いたいって
いう衝動に駆られたけどね

「しねえ！北郷一刀そしてイレギュラー！」

何処からともなく現れた白い奴が出てきて俺と一刀目掛けて襲いか
かってきた

「お前がね」 ザシュッ！

俺は持っていた槍を一閃して襲い掛かってきた奴らを殺した・・・
転生者って話だが見た感じ力の度合いが普通よりちょい上くらいな

んだが？憑依者か？

それにやはり俺も狙われているって事は張り何かしらあるのは確かみたいだが

「一刀下がつとけーなんかGみたくうようよ沸いてきそうだわ」

そう言っで一刀を恋を護衛に下がらせる、さて三国無双張りの無双でもしようかね？

「キエエエエイ！」 スッ

そう言っで白い集団は俺に向かって襲い掛かってくるが避ける・・・
久々に言うかな？意味あるか分からんけど

「さて、油断なく慢心することなく己が命を要らないというなら掛つてきなさい」

前になのは達にも似たような事言ったがこれを言わないとまともに掛ってくる奴いないのが不思議だ

「では、さようならです」 ブンッ！

俺はそう言っで槍を振り払い白いG達を軒並み殺していった

S i d e E n d

三人称 S i d e

「はぁ・・・はぁ・・・いつまで出てくるんだ」

関羽達が肩で息をしながら言っていた

「流石G！際限無く出てくるな」

「オマエあんなのに例えるなよ・・・」

紅那岐がボケながら一刀はツツコミをしていたら

「ふんぬーーーーー！」　ボカッ！

白装束の後ろのほうからこの世のモノとは思えない叫びが聞こえてきた

「なんだこの奇妙な音は！？」

一刀は驚き声を上げていた

「分かりません、敵の新たな兵器でしょうか？」

朱里がまじめに返しているとその叫びが再び聞こえてきた

「ほわあたたたたっ！」　ベキッ！

「ふんぬっ！」　バキッ！

「ぐえっ」

白いG軍団が空に舞っていた

「わたしのお家を壊しておいて、逃げようなんてそうは問屋が卸さ

ないわよー！ー！ー！ー！」

ものすごい音が響き渡る、一刀達一同は何が起こってるのかわからず慌てている

「これは音じゃありません！人の声です」

朱里はこの正体が声と分かり言うが何人かは声と判断できないのか否定していた

「ぬおおおおおー！ー！ー！ー！っ！」 ヒュン！バキ！ドガ！

砂煙が後ろのほうから巻き上がり其処にはやたらでかい影があった、そしてその影は奇声を発しながら白い軍団Gを千切っては投げを繰り返しながら一刀達の近くまで来た

「・・・はっ！？今だこいつらを殲滅するぞ！」

関羽が我に返り反撃にでて白い軍団を撃退した

そして今は掃討が終わり一息つけるところにやってきた一刀達そしてなぜ狙われたかを話していたが、結局董卓の所にいたという事実しか分からないということで一旦答えを保留にした

「それにしても、後ろにいたのはなんだったんだ？」

一刀は先ほどのことを思い返していると其処には筋肉がもっさりの奴が現れた

「それは私よん♪」

「ぬおっ!?!ば、化け物!」

一刀はビックリして化け物を化け物と呼んでしまった

「化け物とはヒドイわっ!・・・でも貴方ってば凄く可愛い人ね。その可愛さに免じて許してあ・げ・る♪」

化け物にロックオンされた一刀を尻目に関羽は化け物に名を聞いた

「私は貂蟬っていうの。しがない踊り子よ♪」

そしてその名を聞いた時一刀は絶望した・・・精神に100000のダメージ

「あんたの名前もういちど教えてくれないか?知っている固有名詞を聞いてドギモを抜かれてしまった」

「ドギモを抜かれるくらい興味津々なの?私も貴方に興味津々よ♪」

そう言って貂蟬はくねくねと踊っていた

Side End

紅那岐 Side

おお、知ってはいたけど2次とリアルじゃキモサが全然だな・・・俺の近くにいる七星はけらけらと笑っているが、すずかは青い顔をしていた

「喝ーーーーーっ！」

うお！びびった、どうやら一刀がいらん事を言っただな。隣にいる恋さえビックリした顔してらあ

そして愛紗（この前の戦いのあと真名を鈴々と共に許してくれた）が貂蟬に洛陽について聞いてるみたいだ・・・一刀はすっごくいやそうな顔してるけど

どうやら聞き終わったみたいで次はどうするかって話になってる時に俺は貂蟬のところにいった

「貂蟬ちよつといいか？」

「あら、貴方も可愛いわね♪」

俺もどうやらロックオンされたみたいだ

「狙うなら一刀にしとけ、俺を狙いたいなら命を賭けてもらう」

「冗談よ」

そうやって俺は貂蟬と一緒に少し離れたところに来た

「さて、少し聞きたいお前は外史をつかさどるものか？」

「貴方どうしてそれを!？」

ふむ、どうやら貂蟬は原作どおりのやつみたいだな

「見て分かるだろう?俺も一刀と同じ・・・否それよりも更なるイレギュラーだからさ」

「なあるほどお・・・で、あなたはこれからどうするの?」

貂蟬も理解してくれたのか俺に聞いてきた

「さあね、俺は有る存在に言われてきたんだ、当分は一刀と一緒にいるさ」

「分かったわ・・・でも貴方の存在がイレギュラーなら一体どうなってるの?」

「さあ?正直おれ自身はさっきの奴らの掃討をお願いされてきたんだ、どうやら事実とは違う力をもってるらしいからな」

俺はそれだけ言うと一刀達のところに戻った

Side End

一刀 Side

そして今俺の前には董卓と賈?という美少女達がいる
話を聞いているとどうやらさっきの白い集団に脅され仕方なしにやっていたと言うことがわかった

そして俺は董卓達について提案を出した、董卓が何で？と聞いてきたので理由を話した

「それはね、言葉を交わしたからだよ」

「言葉を交わした・・・？」

そして俺は理由を全部話し終え董卓たちが俺達の保護下に入ることが決まった後俺は空を見上げ息を吐いていると紅那岐達がどっか行っていたのか帰ってきて声をかけてきた

「可愛い子の口説きは終わったか？」

なんて不穏当な事を言ってきた・・・やめてくれ！愛紗達の眼がきつくなっただろ！

「いきなり何言ってるんだよ！って賈？痛い！その目は痛い！」

紅那岐の言葉を真に受けた賈？（詠）が凄い鋭い目つきで見えてきた周りは笑っているけどたまったもんじゃないぞ！

「それより何処行ってたんだ？貂蝉も一緒だったみたいだが？」

話題をそらそうと紅那岐に質問したがそれがいけなかった・・・

「なに、貂蝉がお前を落としたいというもんでねどうやるか相談していたんだ！」

「そうよくご主人様って何が好みとかを聞いていたの♪」

そう言って二人はサムズアップしながら親指を立てていた

「・・・不幸だーーーーーっ！」

俺の某とあるの主人公の台詞が当たりにこだました

Ep 6 (後書き)

レティ 「貂蟬の登場のときの台詞はほとんど弄っていません!」

紅那岐 「あれは、一度見たらキャラは絶対忘れないシリーズだからな」

レティ 「秋代様・時空の旅人様・畏無様。感想ありがとうございます!」

紅那岐 「次回もお楽しみに!」

Ep 7 短編？（前書き）

レティ「ここからはキングダムゾン連発！」

紅那岐「おい・・・MUGENはおろか東方すらほとんど知らないんだから適当言ってるぞ乙るぞ」

レティ「調子乗りました。ではどうぞ！」

Ep 7 短編？

く恋と遊びにく

紅那岐 Side

俺が城で散歩している（仕事は基本的には割り振られてないよ）と前からちっこいワンコが俺の足元に走ってきた
俺はその場にしゃがみ込みワンコの喉元や体を撫でてやる

「おうよしよしよし、いつも元気だねく」

なんかムツ〇ロウ見たいな台詞だったが気にせず弄っていると人の気配を感じそちらを向けば恋がいた

「・・・散歩行く」

そう言っただけ俺は恋につれられて森までやってきた（七星達も途中で合流）

そして歩いていると其処には穏やかな川があった
セキトが其処に着くとももの凄い勢いで川へ走って行きそのまま川へと飛び込んでいった

「元気だねく」「気持ちよさそく」「カワイイね」

と俺・七星・すずかが言っていると恋が見当たらなかった

「・・・どうしたの？」

声をしたほうを向くと其処には生まれた時の姿（ぶっちゃけ全裸）の恋がいた

「おま、服はどうした!？」

俺は慌てて後ろ向くと其処にはものすごい黒い笑顔の七星とすずかがいた

「何してるのかな? かな?」

「ちょっと待て! それはお前らの台詞じゃねえ!」

とツツコミを入れていても黒いオーラは消えなかった

「私も大きくなればあれ以上になるんだから!」

「紅くんの変態!」

七星は恋を見ながらぺたぺたと自分の胸を触っていて、すずかは俺に罵声を浴びせてきた

・・・七星よそれはフラグになるぞ? すずか俺は意図してやってないからな?

「・・・?？」

恋は最後までわかってなかったようだ

Side End

く金髪ドリルが攻めてきたらしいよ?く

三人称 Side

いつの間にやら仲間になっていた馬超を加えて軍議が開かれていた

「袁紹が攻めてきましたが、いかがいたしましょうか？」

と会議が進めてる中紅那岐達一行はというと・・・

「おっちゃんこれもう少し負けて！」

「いや、坊主おめえ既に半分まで落としてそれはないだろう？」

「これだけ買うんだからもう一声おねがい！」

などとのん気に買い物をしていた

そしてなんかいろいろと紅那岐達が遊んでいたらいつの間にか袁紹軍との戦いが終わり袁紹軍が撤退しだしたという話を聞いた紅那岐達であった

因みに、愛紗達が追撃をし文醜・顔良の両名を逃しはしたがどっかに行ってしまったとかなんとか

Side End

（卑怯者には最大の攻撃を）

文醜・顔良が撤退し孤立無援（正確には將軍がいなくなっただけ）となった袁紹が次にとった行動は黄忠がいる町？城？に行き娘を掻っ攫い挙句には脅して愛紗達と戦わなければならなくなってしまった

「お母さん」

そして愛紗達が戦っている時一人の少女が戦場に出てきた

「璃々！」

鈴々・趙雲のコンビにより救出された黄忠の娘を保護した後関羽達が袁紹の追撃に入ろうとしたら其処には紅那岐が現れていた

「おつかれ」

その手にはバットを持っておりなにやら赤い液体見たいのがこびりついていた

「あの馬鹿なら制裁を加えといたから帰ろうや今は」
ドリル

そう言って紅那岐はそのバットを何処かに仕舞い歩いていった

（（（（あの赤いのは一体！？））））

と思う一同だった

「はぁ・・・はぁ・・・この私がこんな惨めな思いをするなんて」

そう言って一人遠くに逃げていた袁紹だがその前に一人の少年が立ちふさがっていた

「あらあなたは・・・？」

思いついてはいるが、いかんせん物覚えが悪いので一回しかあつてない紅那岐の顔を思い出せるはずも無かった

「さて、将なら卑怯なまねをせず正々堂々戦って逃げるだけなら見逃そうとしたんだけどね・・・人質を取って脅すのはいただけないよ」

そう言って紅那岐は久々にグランシャリオを起動していた

「あら？なんですのその金属の棒は」

そう言って冷や汗をかいている袁紹、モノは分からなくともこれから起きることを本能で分かっているようであった

「何殺しはしないさ」

そしてそれを試し振りをしている紅那岐

「いいか？ギャグに徹しな。そうすれば死ぬことは愚か怪我すらせん、ただとてつもない衝撃が来るだけだ」

そう言って紅那岐はなんの台詞だったっけな？と呟きながら袁紹に近づき見事にフルスイングをした

「天王星まで飛んで行けーーーーーっ！」カッキーン！

「おげろーーーーーーーーっ！」キラッ☆

そう言って紅那岐はバットを担ぎ愛紗達がいるところまで帰って行った

予断だが、ぶっ飛んだ袁紹はどっかに行こうとした顔良たちと合流したとか

Ep 7 短編? (後書き)

レティ「実はこの後紅那岐がまともに活躍するの凄く後でネタが無くて困っている」

紅那岐「恋とのアレは必要だったのか？」

レティ「分からんが、お前のフラグ気質を少し書いてみた」

紅那岐「あってるのわからんがな」

レティ「では、感想ありがとうございました！」

紅那岐「次回もよろしく！」

EP 8 (前書き)

やっべ、紅那岐の活躍というか話スゲーはしよる

Ep 8

三人称 Side

現在城の前には曹操軍が展開しており誰が今出て行くかもめていた

「ここは私が」

と言う意見が多く決められず時間だけが過ぎていた

そして、ぎゃーぎゃーと騒いでる間に一人の少年が既に目の前に出ているのを誰も気づかずになっていた

「やつほゝ董卓連合以来かな？」

「貴様は！？ 呂布と戦っていた」

夏侯惇がビクリして目の前の少年を見ていた

「そ、赤羽っていうんだ覚えなくてもかまわんよ？ 盲夏侯」

「私をその名で呼ぶな！」

紅那岐が挑発し夏侯惇が面白いくらいに食いついていた

その後も紅那岐はあらゆる挑発をし夏侯惇を言いくるめて自陣へと帰って行った

「お前！ 何勝手にやってるんだ！」

そうツツコミを食らう紅那岐だが気にせずに愛紗達にいった

「いやだって、ここでもくだらない言い争いしてるなら誰かとつとに行った方がよくね？」

あまりにも正論過ぎて愛紗達は押し黙る

「んじゃ、後はがんばってね？かなり挑発したからあっちかなり頭に血が上ってるくさいから」

そう言って紅那岐は帰ろうとしていたが・・・

「お前も戦え！」

という誰かからのツツコミに対して紅那岐は言い放った

「え？お前らただか11の子供に戦場にでろと？どんな鬼畜だ？」

すると其処にいる全員が固まった

あれ？俺おかしいこと言っていないよね？というような顔をしてる紅那岐に対して静寂は破られた

「「「11だってーーーーーっ!？」」「」」

と其処にいた愛紗達だけじゃなく朱里や一刀あげくには黄忠まで出てきていた

「あれ？言ってなかった？」

「「「言っていない!!」「」」」

というそうツツコミを食らっていた

「うんまあそんな訳であとよろしく」

そう言って紅那岐はピューツという擬音が聞こえてきそうな勢いで帰って行った・・・まる

そして無事に魏の軍勢を撃退しその後の一戦を勝利に飾った一刀達しかし、そのころから一刀と紅那岐の噂が変わっていった

「それにシテも誰かは知らんが面白い噂ながすな」

「まったくねえ」

「俺としては別にそういうつもりではなかったんだけどな」

と紅那岐、貂蟬、一刀がそれぞれ言う

「誰が考えたんだあんな厨二見たいな通り名」

「地獄の使者に殺戮の王ってどっちもひどいな」

因みに地獄の使者が一刀であり殺戮の王が紅那岐である

「それで敵が減ってくれるんらいいいじゃね？」

紅那岐はもっぱら気にしてないというか気に入ったのかのほんとしていた

すると其処には一人の女性が立っていた

「あ、あの御使い様！御使い様にお守りを作ってきました。いつまでも我らをお守りください」

「ありがとう」

そう言っで一刀はお守りを受け取ろうとしていたが

「そこまでだよ」ヒュンツ ザシユツ

と紅那岐が軽いノリで槍を振るい女性を殺す、すると女性だったものは幻術だったのかいつぞやの白い軍団と同じ服に変わりはてた

「なっ！？こいつらは・・・気づいていたのか」

一刀が質問すると紅那岐は答えた

「ああ、人間とは違う気配がしたからな・・・式紙かなんかか？しかし血は出るし気配は人のそれを超えた存在の気配だし・・・何だ一体？」

と答えながらぶつぶつと呟く紅那岐を尻目に一刀は再び質問した

「捕らえるって言う選択肢は無いのかお前に」

「・・・あっ!？」

「考えなかったのな、だから殺戮の王ってよばれんだよ!」

そう言って紅那岐の殺戮の王と言う名が定着をしいった

「・・・俺殺してるの白の集団だけなんだがな」

という呟きは誰にも聞こえなかったとき

Side End

??? Side

紅那岐達が城に帰っていくのを遠くで見ているものがいた

「何だあいつは? 俺達の力の一端で作った分身をああも簡単に倒すし本来いないはずの奴が何でこの世界にいるんだ?」

誰にも聞かれず、誰にも気づかれない男が其処に居り紅那岐の観察を行っていた

「まずは、様子見をするか・・・最後は俺達がいただくがな」

そう言ってその男は薄く笑い消えていった

Ep 8 (後書き)

レティ「連続投稿！」

紅那岐「暇人め」

レティ「否定しないよ？」

紅那岐「それにしても俺の通り名殺戮の王かよ」

レティ「さしずめマードーキング？」

紅那岐「それなら殺人の王だろうが」

レティ「いやいいんじゃない？マッサカーとかなんかアレだし」

紅那岐「はぁ・・・では次回で！」

Ex 1

紅那岐 Side

曹操から逃げてる最中いきなりトールに呼び出された
念話でなくこっちに來て欲しいとの事だったので気づかれぬように
別れ來たんだが・・・

「トールがガキを作るなんてな、相手は誰だ？」

そう言っただけで問答無用で右ストレートが飛んできた
流石は戦神だった、ギャグ補正のパンチでも吹っ飛ばされて一瞬で
意識を刈り取られるとは

「くだらないボケをしないでよ」

そう言っただけで息をついているが、正直俺としてはどうでもいいこ
とだった

「で、呼び出した理由は？」

そう言っただけ俺はトールに聞いた

「貴方にこの子を預かって貰いたいのよ」

そう言っただけ俺はトールの子（仮）をみる
その子が異常だというのは一目見たときから気づいていたが俺に預
けるとは・・・

「俺は保育士か何かか？ かまわんが理由を言ってくれ」

そう言っただけ俺はそのままトールの子（仮）を見ながら聞く

「この子も転生者なんだけどね、ただ貴方や他の奴らと違って転生してもただ其処にいるだけだったのよ、そしていろいろな世界をたらいまわしにされて仕舞いには自分とはなんなのかすら分からなくなってしまうたみたいなの」

つまりはだ、心が壊れた人形になったということだった

「それはお前がやったことなのか？ 正直お前が担当ならここまでひどくはならなかったと思うのだが？」

俺がそういうとトールはやっぱりと言う顔をした

「気づいたのねこの子の事に」

当然だ、ここまでの死の気配とそれと同等の血の匂いがこびりついてる奴なんてそうはいない

「正直に言うわこの子は既に1000年以上生きているわ。そして誰が転生をさせたかすら分からなくなってしまったの」

しかもいろいろな神にたらいまわしにされたのと付け加えていた

「俺はかまわんが、この子の意思は？」

「だれかいないとこの子はいずれ壊れて世界を壊してしまうのよ・・・だからお願い」

そう言ってツールは頭を下げるが俺は意思を聞いてるんだが・・・俺は近づき目線を合わせるようにしてたずねた

「・・・だれ？」

怯えてるとかではなく単純に壊れかけてるといったところか、人見知りとかでも無いし必要最低限しか喋らないとかでもないな

「俺は紅那岐って言うんだ、名前を聞いていいかな？」

俺はできるだけ優しくいった

「・・・わかんない」

既に自分の名前すら分からなくなってしまっているか・・・

「分かったツール俺がこの子を預かるう」

そう言ってツールに言うのと礼をされ何かしてくれるとの事だったのだが・・・

「能力は終わってからでかまわんし・・・そうだ目を治してくれ」

そういった俺は自分のオッドアイになってしまった目を治してくれと頼んだ

俺の左目は赤い、通常瞳が赤と言うのは存在しない、限りなく赤く見えてもそれは茶の延長線上だ。

鬼眼の侍じゃあるまいし

それに時たまだが左が見えないことがあるので直してくれると助か

るしな

「いいの？カッコいいのに」

といってくるがかまわんと言ったが渋々了承した感じで直してくれた
そういえばこの子の名前どうするかな？と悩んでいると服の裾をつ
かまれた

「・・・どこか行くの？」

と聞いてくるもんだからこれから俺と一緒にいるんだよと言ったら

「・・・よろしくぱば」

と言ってきた・・・11にして親は簡便願いたいので兄と呼ばせる
ようにした

そして名前は飛鳥としたら突然目の前の子の雰囲気が変わった・・・
と言うか今まで肩まで掛るウェーブが美しい青髪だったのがいきな
りストレートになったのだ

「よろしくね兄ちゃん」

とかなりさつきとは変わった雰囲気だった、ツールに聞いてみると
ころ精神が2つ存在しお互いが唯一の存在だったみたいだ、便宜上
名前の感じは一つだがこっちの状態はヒトリとなずけることにした

「さて、これでいいか？なら帰るか飛鳥」

「うん」

そうして俺は新たな家族を手に入れたのだった

Ex 1 (後書き)

アンケート来なかった(泣
ので幼女とシヨタのコンボの新キャラを追加しました

○赤羽 飛鳥(アスカ・ヒトリ)

能力 ワシ・オブ・スタイル
一つの理

相手の技を見た瞬間同じように発動できる、ラグが無くまた自身の能力と合わせることもできる

固有結界を自分に纏わせるようなもので其処にただの効果をある

身体能力などは5歳児のそれと変わらないが、魔力量だけは無限にあるので危険度は高い

EP 9 (前書き)

すごい飛んでいます

Ep 9

三人称 Side

曹操との戦いが一段落着き今は城の庭にて模擬戦をしていた

「はっ！」

「・・・えい」

紅那岐と恋が愛紗達を相手にずっと戦っていたのである

「いい加減疲れてきたんだが」

「・・・」

最初は勝ち抜きだったのが紅那岐と恋は負けは無く仕方なしに全員
がかわるがわる相手をさせられていた

「兄様ががんばってー」

と戦っているときに声援が飛んできた、先日神により預けられた飛
鳥が応援したのである

「まっかせろ！」

返事をしたかと思うと急に紅那岐が張り切りだし目の前の馬超に熾
烈な攻撃をしだした

「おらっ！そりゃっ！でりゃっ！ぶうるうあああああああああ
ああああ！」

「ちょっ！？最後のなに？」

途中おかしな音声が入ったが気にはしてはいけなだろう

「ノリで言ってみただけだがなんだか、強くなった気がしたな」

そう言っぶっ飛ばした馬超を起しあげて飛鳥のほうへと向かった
後飛鳥を抱き上げ撫でくりまわしていた
その後恋もやってきたので紅那岐達は抜けそのままどこかへと行っ
てしまった

そして現在魏と戦っている、相手が引いたので本陣で一息ついて

いたところに夏侯姉妹がやってきた

多少のいざこざがあったが話を要約するとどうやら曹操が謎の軍団に御輿で担がれたとのこと、それを助けて欲しいとのことだった
各々が助けることを否定したが一刀と馬超が助けると言うことで話がまとまった

前方で曹操を発見した一刀一行、作戦は北郷軍が牽制をしその間に助けると言うものだった

「んじゃ、俺は白い集団のみ倒すから後よろしくね？」

と紅那岐がいきなり前に出てみんなに言うと言と一人突撃していった
その姿を見たものたちはのち言ったそうだと、あれこそ無双だったと

紅那岐は白い集団に突撃して行き敵を倒していると奇妙な気配を感じた

この世界に来て久しく感じなかったものだ

「なぜ魔力を感じる？」

しかし魔力の気配はそこらかしこで蔓延っており特定をするのが困難だった

仕方なしに最新の注意を払いつつ撃退していく紅那岐、其処に遅れ

てきた愛紗達を加え白い軍団は押されてしまった

夏侯惇たちが曹操を救出した後白い軍団が増えていった

何とか撃退していると白い集団は一刀や紅那岐を悪だ破滅を起すだと言って一刀達に襲い掛かっていた

しかし、敵の数がなかなか減らない中どうしたもんかと考えていると急に矢の雨が降ってきた、そちらに支援を向けると呉の軍が応援として駆けつけていたのであった

そして北郷・魏・呉の一团で白い軍団を撃退し本陣にて挨拶をしていた

挨拶もそこそこに曹操は魏の領土などを一刀に譲るといい孫権が立会人になっているころ別の場所にて

「お前は本当に強いな、今度一戦しないか？」

と戦闘狂よろしくな勢いで紅那岐に絡んでる夏侯惇がみんなに冷たい眼で見られていた

Ep 9 (後書き)

レティ「終了！」

紅那岐「なぜにバルバトス？」

レティ「一度やってみたかった。反省してるが後悔はしていない」

紅那岐「俺のキャラじゃねえだろ」

レティ「気にしないさ！では感想ありがとうございます次回でまた！」

Ep 10

く恋と紅那岐の素行を何とかしようく

一刀 Side

魏領を手に入れた俺達、その後いろいろあったけど今のところは順調に進んでいた
とそんな時に部屋で政務を行っているとき愛紗が入ってきた

「ご主人様ああああ！」

「うお！？どうしたんだ愛紗？」

「聞いてください・・・（説明中）」

要約すると恋と紅那岐が仕事もせずサボったり寝てたり、挙句の果てはどっか行ってしまっているとのことだ

「あーその紅那岐はまだ子供じゃん？あいつに関して言えばろくなことを言っても聞かないと思うよ？」

「ですが！」

愛紗の気持ちも分かるんだけどねーけど紅那岐に何かあるとあいつの家族？の七星達があの見え目以上の凄みで殺されると思うほどの殺気を向けてくるんだよな

下手なことを言っても揚げ足ばかり取ってきてこっちが言い含められるのが目に見えてるし・・・

「では恋だけでもなんとかしてください！」

そう言ってくるけど基本的に紅那岐達とセットでいるからこっちも
どうすることができないのが現状なんだよね

「呼んだか？」 「・・・ん」

と愛紗と喋っていたら紅那岐と恋がやってきた

「お前達！ 丁度いい今日と言う今日は仕事を・・・」

愛紗が騒いでるが紅那岐は知らん顔してなんか書類を投げて渡して
きた・・・分厚すぎるぞ

「いやあパソコン無いからまとめるのメンドかったよ」

そう言っただけ俺は目を軽く通していた・・・普通に日本語で書いてる
からいつもより見やすいな

「え？ これっていろいろな村の報告書じゃん」

読んでみるとあの村は賊に襲われてただの、治水工事が必要だの書
いてあった

「流石に食っちゃ寝だけじゃ悪いからまとめといたよ」

そう言ってくる紅那岐

「お前、ただ遊びまわってただけじゃなかったのか・・・」

愛紗がなにやら感動してるが、この後の展開が想像できたんですが
「うんにゃ、遊びに行ったときになんか襲われたから適当に助けて
ただけ」

と悪びれもせず言い放ちやがった、愛紗がぎゃーぎゃー騒いでるけど
どまるで気にしていないように・・・気にしてないなありゃ

「あ、因みにこっちの言葉でまとめるのめんどくさかったからまと
めるのは一刀に任せるよ」

「・・・え？」

「恋に関して言えばよく一緒に町に行ってるから警邏もどきやって
るけどそれだけで犯罪減ってるはずだからお咎めなしで頼むよ」

そう言って紅那岐達は出て行った

「この量の報告書を訳すの？」

厚さ20cm以上あるんですが・・・

End

く空気になっている七星達は何をしている！？く

七星・すずか Side

「わたしたち空気じゃないよ！」

「きゃっ!?! いきなりどうしたの七星ちゃん!?!」

急に大声を張り上げてなにやら言っている七星に対しビックリしつつもツツコミを入れているすずか

「ううん、なにやらいきなり失礼なことを言われた気がして・・・」

「それより早くやっちゃおう、じゃないと紅くんと話す時間がないよ」

そう言っすずかは今までやっていた作業を繰り返していた

「すいませーん! 注文いいですかー?」

「あ! はーい」

お分かりいただけましたでしょうか? 今すずか達が何をやっているのかと言うと・・・

「それにしても女将さんがこっちに来て料理屋を始めるなんてね」

「だね、それに親方もこっちに來ていて城御用達の武器職人になってるなんて」

そう、第1話で出てきた夫婦が今一刀達が使っている首都の町に來てそれぞれの生活を行っていたのであった

女将さんの料理はおいしく、紅那岐も氣に入ってたためこの二人は弟子と言う形で料理を教えて貰う変わりに見せの手伝いをしていたのであった

「これでお兄ちゃんのハートはいちころだね！」

「フフフ・・・何言ってるのかな？ 紅くんは私にメロメロだよ？」

お互いが牽制しあっていると周りからは大量の冷や汗が流れて止まらなくなっていた、そんな時に・・・

ゴツツン☆

「「いったゝい」」

「馬鹿なことやってるんじゃないよ！ お客さんがみんな引いちゃってるじゃないか！」

その手にお玉を持った女将さんがいつの間にか来ており二人を仲裁していた

「「ごめんなさい」」

二人はくだらない争いをやめて再び作業に戻っていった

End

く新しい家族を紹介しますく

三人称 Side

「と言うわけで新しい家族の飛鳥だ。飛鳥あいさつしなさい」

と紅那岐の後ろで隠れている飛鳥を促した
トコトコとかわいらしい擬音が聞こえてきそうな足取りで前にやってきた

「・・・飛鳥です」

そのままペコリとお辞儀をした

「あー因みに賊に襲われてるのを助けたんで今は心が少しね・・・」
と言葉を濁しながら紅那岐が説明したがそれで一応全員が納得したのでよしとした紅那岐はそのまま帰ろうとしたら飛鳥に裾をつかまれて聞かれた

「・・・ぱばこのおねえさんたち誰？」

と爆弾を投下された紅那岐、もちろん反応したのは七星・すすか

「お兄ちゃんどういことかな？」

「フフフ・・・紅くん誰の子かな？」

先ほどの説明を聞いてなかったかのごとく黒いオーラを出しながら
すすか達が詰め寄ってきた

「話をきけ！何故か知らんがそう呼ばれるときがあるだけで基本的には兄と呼ばせてるわ！」

と叫ぶように言っているが当人達には聞こえてないのかじりじりと
詰め寄ってこられている

「「問答無用！このロリコン！」」

「冗談じゃねえ！逃げさせて貰う！」

といって離脱する紅那岐を同じような速度で追いかけていく二人

「・・・おいしい？」

「・・・うん！」

恋の膝の上でお菓子を食べている飛鳥、このやり取りを見て感情が戻ったとか戻らなかったとか

E n d

Ep 10 (後書き)

レティ「やっべ本当に書くことないや」

紅那岐「恋姫無印なんかにするからだよ」

レティ「だまらっしやい！恋をどうやっても仲間に入れたかったんだ」

紅那岐「それはまあ・・・」

レティ「と言うわけで感想ありがとうございました！」

紅那岐「次回もよろしく！」

Ep 11

「曹操のトラウマ？」

一刀 Side

華琳が町へと行きたいと言ってきた、それをみんなに話したら凄く反対してきたんだが、流石に裏切ることには無いと思うのでゴリ押しして話をまとめた

で、護衛はと言う話になったのだが・・・正直誰を連れて行っても角が立つことは明白だったのだが其処に偶然一人でいた紅那岐に貂蟬連れて行けって言われたので納得した

「それで監視役って誰かしら？関羽？それとも孔明か子龍辺りかしら？」

「違うよ」

俺は華琳に誰を連れて行くかを言おうとしたら・・・

「ご主人様～～あ！」

来たみたいだな、華琳達はなにやら呆けているけど

「お待たせえん。紅ちゃんから呼んでたって聞いて全力全開できちやったわぁん♪」

何もそんなに湯気が出るほど全力で走ってこなくても・・・

「早いぞ貂蟬、追いつくのに苦労したぞ」

その後に紅那岐もやってきてお前も苦労してるんだなって思ったら
「まあ のんびり来たけどね！」 って言いやがった・・・こいつは本
当にマイペースだな

「珍しいなお前がついてくるなんて」

紅那岐に質問したら、恋は町に言ってるし飛鳥は璃々ちゃんと遊ん
でるから暇だそうだ

貂蟬などに礼やらなんやら言っていたら華琳に裾を引っ張られてた

「あ・・・あわ、わ・・・」

なにやら華琳が壊れかけてるんだが・・・

「なんなのよこの化け物は！」

「貂蟬ってな、お前らの誰より強いぞ？」

「うふふ♪あらいヤだわご主人様、流石の私も紅ちゃんにはかてな
いわよん」

そう言ってサムズアップして親指を立てる貂蟬に対して紅那岐も同
じように親指を立てていた・・・本当に仲いいねお前ら

その後ごねた華琳が紅那岐や貂蟬を殺せといったのがまずかった

「あらん？町にも出ないでいきなりオイタしちゃうのかしら？（
ピキン☆）」

「ほほう・・・俺達の実力が分からないなんてなあ・・・（ニマア）」

二人の覇気に当てられて夏侯姉妹は震えだしてしまった・・・紅那岐は完全に悪乗りだなあ（慣れだした俺もどうかと思うけど）

「諦めろよ曹操・・・貂蟬は・・・化け物だなうん」

ごめんよ貂蟬どうやってもフォローできないや

その後気持ち悪くさめざめ泣く貂蟬を無視して話は進みなんやかんやで町に繰り出し最終的には何とかなったといったところだった・・・

「貂蟬・・・（ごによごによ）」

「うふふ♪了解よ」

紅那岐が最後の最後で貂蟬に耳打ちをして何かをやろうとしていた

「曹操！」

「なによ！・・・ひう！？」ドサッ

紅那岐がいきなり話しかけ振り向いた華琳だったが目の前に貂蟬の顔がドアップでありそのまま気絶してしまった

あれはキモイ、キモイです。大事なので2回言いました

その後夏侯姉妹は華琳を助けてる間紅那岐はケラケラ笑っていた華琳はその後何日か悪夢に魘されたらしい・・・ごめんよ

End

〱呉との戦いが終了しました〱

ダイジェストでお送りします

呉が同盟を破棄し宣戦布告をした

←

北郷軍が受けて立つ

←

星が孫尚香を亀甲縛りで捕まえる（後で何人かが習っていた）

←

孫権が激怒、北郷軍と孫呉軍が激突

←

甘寧と翠が戦う↓翠がバカ力と罵られる↓翠キレル↓紅那岐が何故かいてやじっていた

←

最終的に北郷軍が勝利

となりました！

え？はしよりすぎ？紅那岐やることないですよ？

〱一刀ハーレム計画〱※台本形式です

紅那岐「現在の一刀ハーレム状態を発表したいと思います！」

一刀「待て！何でそんな事をやっているんだ！」

レティ「なんとなく？場つなぎ必要じゃん？」

一刀「誰！？」

紅那岐「ある意味で神だな（作者立場的な意味で）」

レティ「まあ、私の出番これで終了だから・・・またね」

場「・・・」

愛紗「ところではーれむ？ってのはなんだ」

紅那岐「簡単に言うと一刀がどれだけ女の子を引っ掛けた（落としたり）かって感じかな？」

場「ほう・・・」

一刀「ひい!？」

紅那岐「さて現在までってのを念頭に発表します・・・」

場「ドキドキ・・・」

紅那岐「愛紗・朱里・翠・星・紫苑・華琳・蓮華・思春・貂蟬（笑）の以上です」

愛紗達 Loves 「ご主人様（一刀）ちょっとO☆H A ☆N A ☆S
H I ! が」

一刀「ひい!？てか何で紅那岐が知ってるんだ！それに貂蟬ってなんだ」

愛紗達 Love 「認め（ましたね？）（たな?）」

紅那岐「まあ、神（作者）がどういう風に進んだか発表したかったんだって。貂蟬はネタで」

鈴々「鈴々が入ってないのはなんでなのだ？」

紅那岐「神（作者）曰く・・・雛理＞朱里＞鈴々らしくて攻略する暇がないんだって。因みに月・詠・恋は単純に神（作者）大好きで一刀に渡したくなくて攻略してないらしい。巨尻さんも本当は渡したくなかったみたいだけど展開上しかたなしっていていたな・・・」

鈴々「雛理って誰なのだ？」

紅那岐「秘密です！では以上で終了します！一刀のご冥福をお祈りします」

一刀「助けてーーーーーえ！」

Ep 11 (後書き)

レティ 「一刀安らかに眠れ」

紅那岐 「最後のは最悪だな」

レティ 「ネタ出なくて攻略順を発表したくなったw」

紅那岐 「最悪だな」

レティ 「ではこの辺で」

紅那岐 「感想ありがとうございました！」

Ep 12

三人称 Side

周瑜との戦いが終わり今町には一刀・愛紗・紅那岐が町に繰り出し視察を行っていた

「紅那岐が俺達についてくるのは珍しいな、特に仕事としてきてるときに」

紅那岐は基本的には仕事をしない、と言うより恋や飛鳥などと遊んでることが常である

「まあな、白い軍団が最近大人しくていやな予感がするってのが大きな理由だな」

珍しくまともな答えを出しているのに対し、愛紗はその発言に何故か感動した

「まさかお前までご主人様の身を案じてくれるとは」

となにやら勘違いしているようだったが、紅那岐は気にせず市をみていた

「なにやら珍しい組み合わせね♪散歩かしら？」

いつの間にやら隣にいた巨漢・・・貂蟬が声をかけてきた

「まあね、散歩と言うか調査と言うか」

一刀がある程度説明し、貂蟬は現状を教えていた
すると急に気配が変わり2人の男が立っていた

一刀は片方は見覚えがあるようで驚いてる間に一刀に攻撃をしてきたが、貂蟬が防いでいた

「くっ・・・！ジャマするな貂蟬！」

一刀が攻撃されている時紅那岐はもう片方の男と対峙をしていた

「どちら様ですか？あの方とは違う感じがしますが？」

二人は貂蟬たちとは違いお互い動いてなかったが、場の緊張度はそれ以上だった

「ふ・・・どうやら神が言っていたのは間違いがなかったか」

男はなにやら納得していたが紅那岐はわからないので顔をしかめていた

「ヒトリで納得しないで貰えますか？私にも説明いただけると嬉しいのですが？」

「お前に教えることなどないさ、今回は挨拶だけで俺は参加しないよ」

目の前の男はそう言うが相変わらずの緊張状態であった

「おいお前なんで戦わないんだ！」

見かねた左慈は目の前の男に怒鳴りつけつつも相変わらず貂蟬と戦っていた

「今俺が戦えばお前も巻き込むのでな、悪いが今回は顔見世だけにさせて貰おう」

そう言って男は本当に戦う気がないのか引き始めていた、それを見た左慈も仕方なしに引いたのであった

「待て！」

と愛紗が追おうとしてるのを紅那岐・貂蟬が止めた

「待て愛紗！左慈と言うのは別として、もう片方はお前じゃどうやっても勝てん」

「なっ！？それほどまでなのか？」

愛紗が驚いて止まるのを良しとして俺は一刀の眼を見て頷いた
一刀は貂蟬に説明を求めるといふ形で一旦城に戻ることが決まった

貂蟬がこの物語も終盤（中略）と言う言葉に一刀はこれから聞けば分かるかと言う顔をしている一方紅那岐はなんともいえない顔をしていた

「終盤か確かにそうだな、しかしこの流れは一体・・・それにあの男の言葉を理解しようとするとか何か矛盾が付きまとう。転生者なら生きていくのが常なのに俺と戦うのが目的にも見えた・・・」

ぶつぶつと呟きながら紅那岐は最後尾で一刀達についていった

Side End

紅那岐 Side

今貂蟬が玉座の間で一刀達にこの世界について説明している
一刀達（特にこの世界の住人達）は貂蟬の説明をがんばって理解しようとしていた

「この世界以外にも世界と言うのは存在しているわ」

と貂蟬の言葉が聞こえたので俺も少し参加するかな

「さて、今貂蟬が説明したように世界とは無限に存在する。例えばだ、俺がいた世界には一刀がいたとされる学園がない」

その言葉を聞いて全員驚いた顔をしていた

「その中でも俺は特殊でな、転生という言葉が分かる奴はいるか？

ふむ、どうやらわかるのは2割弱と言ったところか、つまりはだ・
・

と言うことだ。分かったか？では俺が一刀と違う一番の理由はな・

・・」

俺は自身のことも含め全て説明をした、そして最後に白い軍団が最終目的であるということ

説明が終わると全員ビックリしていた、愛紗などにはもっと早く説明しろといわれたが時が来るまでどう動くかは決めてなかったという無理やり納得させた

そして俺達は最終決戦に向けて旅たった

「お兄ちゃん気をつけてね」

「紅くんがんばって！」

「「兄様（兄ちゃん、いってらっしゃい！」」

七星・すずか・飛鳥に見送られ俺は行こうとすると門前に恋がいた、恋は確か城待機だったはずだが？

「どうした恋？」

「行くなって聞いたから・・・」

どうやら見送ってくれるらしい

「ああ、お前の家族を守るために行ってくるさ！」

「・・・ん」

そう言っただけ俺は恋を一瞥して久しく来ていなかったバリアジャケットを展開し一刀達を追った

Side End

三人称 Side

戦いは熾烈を極めていた、倒せど倒せど敵はわんさか湧いてきた、誰もが心が折れそうになった時救いの手は差し伸べられたのであった

「あ、アレは曹操軍です！」

いつの間にか曹操は自身の軍勢を引きつれ一刀達の援護に来ていたしかし、それでも敵の数は減らずまたも心が折れそうとき再び救いは現れた

「今度は孫権軍です！」

違う方向から今度は孫権が一刀達を救おうとやってきたのであったこの結果により全員の士気は一気に回復し敵勢を押し出した一刀達数人は戦いを任せて一気に敵本陣に突入を果たしたのである

「来たか本郷一刀。ここでお前を殺せば修正はできる！」

最奥まで来ると其処に待っていたのは左慈・于吉と後は知らない二人であった

「さて、貴方達二人は本来いない存在・・・では貴方たちの目的は？」

左慈などが一刀に向かつてる中紅那岐は本来いないはずの存在にたずねていた

「ふ・・・お前はもう気づいているのだろうか？　だったら語ることはない！」

「ああ！　てめえを殺して俺達の力としてやる！」

そう言って男二人は紅那岐に突っかかってくる

「そうか・・・一刀！」

紅那岐は何か納得したようにしたあと一刀に声をかけた

「いいか？　お前は一人じゃない、それを胸に刻め！　それはお前にとって最強の武器だからな」

そういうと紅那岐は二人のほうへ歩いていった

「さて、俺達がここで戦うと巻き添えが半端ないのでな場所を移そう」

そういうと紅那岐は手に銃を持っており壁を打ち抜き外に飛び出していた

一刀達はその事実を受け入れるのに時間が掛ったが、左慈が動き出したので止まってはいられなかった

Ep 12 (後書き)

中途半端ですが一旦切り
直ぐに続きを執筆します

Ep 13 (前書き)

すいません。

ちよいちよい読み直して修正入れまくってます

Ep 13

三人称 Side

紅那岐は今満身創痍であった、左腕は肘から先がなく右足は折れ曲がり左目を切れてボロボロの上体だった

「ははは！神の奴が貴様は特別といていたがどうやら俺達のほうが強かったみたいだな！」

「期待はずれもいいところだったな！」

そう言って二人は笑っているが、同時に紅那岐も笑っていた

「何がおかしいんだ！」

一人が尋ねると紅那岐はおかしそうに言った

「おかしいに決まっているだろう？直死の能力に後はわけわからん能力だが俺を殺せてないんだぞ？お前達が俺を殺せてない時点で勝ち誇ってるのを見ておかしい以外の表現ができないんでね」

紅那岐がそういうと一人の男が紅那岐に向かっていく、この男が紅那岐の左腕を殺した直死の力を持つ転生者である、飛行能力も持っていることからいくつかの世界を回っているようだ

「死ねええええ！・・・ガハッ！？」

二人は現在信じられない光景を見ていた、それは今直死を持った男

が紅那岐に止めをさそうと向かっていったら左腕で殴られたからである

「ば、馬鹿な！？直死の攻撃は死だぞ！？再生できるはずがない！」
そう言って現実を否定してる時に紅那岐が言い放った

「再生しだんじゃない、復元したんだ。簡単に言えば過去にあった自分の体をこの瞬間に持ってきたんだよ」

紅那岐はそう言って自分の体を見ながら言っていた

「まあ、直死で殺された部分も直るかは賭けだったがどうやら概念としては互角で後は意志の力だったみたいだな」

「どうやら死を受け入れるかどうかで再生できるかどうかが決まるらしい」

「流石にいちいち直しているメンドイのでな悪いが固定させて貰う！」

紅那岐は腕を上げて言った

「ダ・カーポ復元する世界・アインハルト術式固定！」

ダ・カーポ復元する世界・アインハルト術式固定とは簡単に言えばダ・カーポを自動的に発動させるため、何処かしらを壊されたり死ぬ攻撃を受けても一瞬で回復する方法である

「だからどうしたってんだ！俺達が優勢なのは変わらん！」

そう言って三者は再び激突していった

Side End

一刀 Side

紅那岐に言われた俺は一人じゃないそれを胸に刻めといわれた意味が分かったかもしれない

左慈が言うにはこの世界はもう崩壊する直前らしい、そして今俺はこの世界に來たきっかけの鏡に向かって走っていた

「「ご主人様！」」

俺を主として慕ってくれるみんなの声が聞こえる・・・

「「一刀！」」

俺が作る世界に最終的に乗ってくれたみんなの声が聞こえる

「そうだ俺は一人じゃない！」

鏡に触れるとまばゆい光が辺り一面を覆った

Side End

三人称 Side

「くっ！厄介な力だ！」

「臆するな！再生速度は遅くなってきてるぞ！」

紅那岐は二人掛りと言うこともあいまってなかなか決定打を与えられずにいた

（まずいな・・・術式固定に使った魔力が残り少ないし何よりオリジナルと異なる力になっているからこれ以上の重ねがけの意味がない・・・収束砲が撃てないってのがきつすぎる）

内心あせってこれからの戦術を頭の中で考えていた

「終わりだー！ーあっ！」

「しまっ!？」

考えに集中しすぎたのか直死の攻撃をまともに受けてしまう紅那岐、それにより術式固定の力が殺されてしまった

「さあ・・・これで終わりだ！お前を殺しこの世界を壊してから戻らせて貰おう！」

直死ではない男の言葉で紅那岐は止まった

「何だと？」

「悪いがこの世界は俺達には要らないのでね、力を使うだけ使ったら戻らせてもらおう」

紅那岐はこの言葉を聞いた瞬間に何かが切れた感じがした

Side End

紅那岐 Side

俺は正義と悪そのどちらでもない、ただやることをやるただそれだけだ・・・だけだな

「そうかただ壊すだけの存在か何を遠慮してんだろうな俺は・・・」
俺は自分がどこか手加減していたことに気づき驚いた

「だったら遠慮はいらん・・・オープン！リミッター7・ラグナレク」

俺の最強の力と借り物の力を使わせてもらおう

「セカンドアクセス・ゲートオープン」

本来の力は違うのだろうが、何故かこんな感じになるとはな

ダ・カーポ・セカンド
「再現する世界」

そう、本来ならば甦りし記憶のはずだが、俺にはそれではなかった・・・
本来なら担い手を顕現できるのだが俺の力の場合何故か顕現できるのが武器と技のみのようだな

「そ、それは！？何で此处にあるんだ！」

「チェーン・ストラグル・ライトニングバインド」

俺は気にせず知っているバインドを全て出し二人を拘束する、直死の奴もがんばって殺そうとも腕が動かないではどうもできんだろう
「さて、気づいてると思うがあえて聞こう。リリカルなのはの世界はわるよな？」

そうやって俺の周りには38基のスフィアが浮かぶ

「フアランクスか・・・しかし！俺達にはダメージは其処まで入らん！」

「だろうね・・・けどな忘れてないか？レイジングハートがある意味を」

二人は気づいたようだ、レイジングハートがどんな攻撃をするのかを

「さて、最初から最後まで魔王砲と呼ばれる攻撃の連続攻撃だ・・・心して受けるといい」

「魔王じゃないの！」

変な電波を受信したきがするな・・・

俺は気にせず右手を前に出して言い放つ

「スターライトブレイカー・フアランクスシフト」

「全力全開・・・撃ち砕け！」

俺が言い放つと38基のスフィアから毎秒7発のSLBが放たれ相

手に向かっていく

そして世界は光に染まるのと同時に俺の意識も闇に落ちた

「知らない天井だ・・・」

目を覚ますと其処は知らない天井だった、意識が落ちた後俺はどうなったんだ？

「まったく！毎回毎回なんで命を削る攻撃してるのよ貴方は！」

そう言って横にいるのはトールだった

「そうか、俺はまた・・・」

現状を理解しトールに向き直る

「とりあえずは無事あの世界はハッピーエンドを向かえたわ、貴女達入ってきて」

其処に入ってくるのは、七星・すずか・恋・飛鳥・・・恋！？

「恋何でここにいるんだ!？」

「・・・寝てた、光った、ここに居た」

「どうやらあの子じゃなくてあなたと共にいたいという願いでこっちに来たみたいよ」

トールが説明してくれるが・・・おう

「恋いいのか？」

「・・・くなぎ好き」

とやって来た、照れるじゃねえか

七星達が悪魔すら逃げ出しそうな笑顔をしてるが今は無視だ!

「トール聞きたいことがある・・・いや正解を聞きたいといったほうが妥当か？」

「気づいたみたいね・・・」

トールは観念した顔をしていた、どうやらあっているようだな

「その前に次の世界は何処だ？」

「リリなのA's,よ」

「分かった・・・お前達は悪いが先に帰っていてくれ、俺はトールと話したら直ぐに帰る」

七星達に説明すると渋々了解してくれて帰って行った

因みに恋はインプリンティングの効果で常識などを刷り込んだらしい

「さて・・・何処から話そうかしら」

Ep 13 (後書き)

レティ「恋姫終了!」

紅那岐「敵二人も必要だったか?」

レティ「最初東方の力にしようとしたんだけど、詳しくないからモブA・Bにしちゃった」

紅那岐「おいおい・・・」

レティ「では感想ありがとうございます次回でまた!」

お知らせと言うかなんと言うか

次の章から小説の内容が少し変わってしまい、タイトルを変えないとダメじゃね？って結論になりました

そこで一旦この小説を完結扱いにして次からは新しい小説と共に新章に突入したいと思います

また、紅那岐の能力がぐちゃぐちゃで分かりづらいと私自身思ってしまった大幅な修正を入れる予定です

流れ自体は変わりませんが、能力ともどもかなり変わると思いますがよろしく願います

また、新章は現在作成中です

次の話は紅那岐の能力修正+前回の続きからのないようになっていきます

新たに「神々のゲームと転生者」を始めました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8751v/>

贖罪にささげる転生者

2011年9月11日16時26分発行